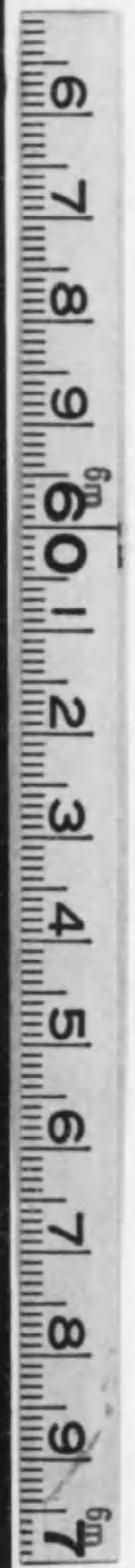


342  
4831

342-4831  
1200501400813



始





改訂  
肥後藩國事史料

卷

八



842-4834



# 改訂肥後藩國事史料 卷八

## 目次

明治元辰年正月十九日我藩兵士の東海道鎮撫總督に隨ひ桑名へ進軍するものに對し軍規風規を嚴守すべき旨を令す……………一

正月十九日日本藩備頭清水數馬が引率せる藩兵一大隊今明兩日に亘りて京都に到着す……………一

正月十九日日本藩溝口孤雲津田山三郎先に備前藩士の外國人殺害に關する償金談判の不調につき外交事務總督より諮問せられたるに答ふ……………二

正月某日我藩長崎警衛として物頭二人輕卒四十人を出張せしむ……………三

正月十九日徳川慶喜萬石以上の大名及び交代寄合を營中に招きて自己恭順の誠意徹上に關する盡力を依頼す我藩留守居澤村脩藏は老中板倉勝靜等に對し今日に及びては兵端の開けたる所以を明瞭に辯解せしめては謝罪の道立ち難しと進言せしにより板倉等は關門行違之始末書を澤村に交付したり……………三

正月十九日花山院家理の徒天草島より書を在長崎土州人に與へて該島鎮撫の爲め來援せんことを乞ふ……………六

正月廿日仁和寺宮嘉彰親王諸外國との條約は舊幕府の制に遵據すべく且つ自身外國掛總督を命せられたる旨各國使節に通報せらる……………六

正月廿日北陸道鎮撫總督高倉永祐全副總督四條隆平京師を發す安藝肥前若狹等の兵之に隨行す……………七

正月廿日我藩在京吏員は延岡藩士の依頼により該藩の入京禁止を宥免せらるべく周旋せし旨を藩地に報す……………七

正月廿日森藩主久留島伊豫守の使者門屋七郎右衛門熊本に來たり豊後國日田陣屋警衛に關する件を協議す……………八

正月廿一日東山道鎮總撫督岩倉具定京都を發す大垣藩兵之に隨ふ……………九

正月廿一日久我建通大和國鎮臺を命せらる……………九

正月廿一日外國事務總督東久世通禧は徳川慶喜征討に關し外國政府は局外中立を守り彼を援助せざるやう英國公使に照會す……………一〇

正月廿一日外國事務總督東久世通禧は各國公使に對し外人を殺害せし備前藩士處分に關する要求を容るべき旨を答ふ……………一〇

正月廿一日本藩溝口孤雲は英國人ゴロウルより徳川慶喜保護斡旋を請ふ書を得て之を上參與に提出す……………一一

正月廿一日本藩留守居澤村脩藏等江戸城に赴きて平山圖書頭に面し慶喜の誠意徹上を圖る爲め先其決心行動の實を問はむと欲し推問を試み其答を得て京都藩邸に通報す……………一二

正月廿一日天草出張本藩物頭宮部璋七郎等同鳥の民心動搖するにつき警備の爲め衛兵を増遣せられんことを藩政府に要求す……………一四

正月某日我藩天草警衛として物頭一組を派遣す……………一五

正月廿一日尾張藩は其藩臣の舊幕保護の策を企てたるものを誅す……………一五

正月廿一日尾張藩世子徳川元千代藩主慶勝に代りて上京の途に就く……………一七

正月廿二日東海道鎮總督伊勢四日市に到る……………一七

正月廿二日大坂及び兵庫に鎮臺を置かる……………一八

正月廿二日長岡護美上京の命あり……………一九

正月廿二日我藩溝口孤雲、山良河水徴士を命せらる……………一九

正月廿二日我藩徴士津田山三郎海陸軍務懸を命せらる……………二〇

正月廿二日本藩政府は書を在京老臣溝口孤雲等に贈り京地の近狀を問ひ且つ長崎日田等の形勢を報す……………二二

正月廿二日本藩偵吏金栗量平等豊後國日田に出張し該地の騷擾事件を探りて之を玉名郡吏員に報告す……………二三

正月廿三日人を暗殺する者は嚴刑に處する旨布達せらる……………二六

正月廿三日大和國鎮臺久我建通任地へ發向するを以て我藩に守衛兵を出すへしとの命あり……………二六

正月廿三日本藩奉行木村得太郎徴士刑法掛を命せらる……………二七

正月廿三日本藩廣田貞右衛門岡松辰吾に刑法書調方を命す……………二八

正月廿三日桑名藩世子松平萬之助開城して官軍に歸順す……………二八

正月某日參與大久保利通遷都の議を上る……………二九

正月廿三日夜大坂遷都の可否につき我藩に諮問せらる翌日世子喜廷遷都の時宜に適せざるへき旨を奉答す……………三二

正月廿四日本藩世子喜廷襖を穿つことを許さる……………三三

正月廿四日宇和島藩林玖十郎徴士并に參與を命せらる……………三三

正月廿四日我藩番頭下津縫殿奉行永屋猪兵衛は桑名藩歸順開城の狀況を在京重臣に報告す……………三三

正月廿四日土佐藩兵高松城を徇ふ……………三六

正月廿五日醍醐忠順東國基敬參與を命せらる……………三六

正月廿五日本藩土山田五次郎安場一平徴士、内國掛を命せらる……………三九

正月廿五日我藩偵吏兵庫港にて外國人より探知せし情況を在京重臣に通報す……………四〇

正月廿五日長州藩兵隊豊前國四日市に至り遂に御許山の暴徒を掃蕩す……………四一

正月廿五日豊後在勤我藩郡代飯田熊之助堀内源之允御許山暴徒落去の件を在京同僚に通報す……………四二

正月廿五日肥前藩故の如く長崎警衛を命せらる……………四三

正月廿五日尼張藩世子徳川元千代着京す……………五  
 正月廿六日三條家より我藩に對し苞苴私謀の禁令出たるを以て爾後物贈與を謝絶する旨の通報あり……………五  
 正月廿六日日本藩世子喜延は大坂遷都の議に關し更に意見書を捧呈す……………五  
 正月廿六日滋野井公壽の隨身山本太宰小笠原大和等美濃國にて暴行せしを以て誅戮せらる……………五  
 正月廿六日日本藩偵吏首藤敬助大坂にて探知せる中國四國征討軍の情況を通報す……………五  
 正月廿六日我藩鶴崎番代大河原次郎九郎は杵築藩の報知を添付し御許山屯集浪士等の狀況を藩政府に申報す……………五  
 正月廿六日薩摩藩士等天草郡に來たり寺院及び庄屋等に對し地方鎮撫の爲め出兵せし由を告げ更に申達すへき  
 件あるを以て陣所に出頭すへき旨を達す……………五  
 正月廿六日土佐藩兵松山城を徇ふ……………五  
 正月廿七日太政官代を二條城に移さる……………五  
 正月廿七日松平氏を稱する者は其本姓に復せしめ又宮門警衛征討出兵を命せられたる者には旗幕挑灯等菊花御  
 紋章を使用せしめらる……………五  
 正月廿七日日本藩世子喜延太政官代に出動し撰述せる刑法柱礎を進達す是日岩倉具視大坂巡狩あるへき旨を喜延  
 に告ぐ……………五  
 正月廿七日日本藩志方司馬助徳川慶喜の我藩主慶順父子に與へて謝罪の求解を依頼したる書を携へ江戸より京都  
 壬生の藩邸に到る……………五  
 正月廿七日我藩舊幕領地にして從來管轄若くは警備せし所の豊後國四郡及び肥後天草豊後日田等の處置に關し  
 朝廷に稟申し即日指令を受く……………五  
 正月廿八日朝議あり關東親征に決す此日征討將軍嘉彰親王大坂より歸京せらる……………五

正月廿八日我藩徳川慶喜征討につきての諮問に答ふ但し我藩は海軍未熟なるを以て陸路より進軍を命せられた  
 き旨を陳す……………五  
 正月廿八日我藩世子喜延家臣安場一平山田五次郎が徴士を免せられむことを請願す……………六  
 正月廿八日九州鎮撫總督澤宣嘉明日を以て京師を發し長崎に赴かんとす我藩中島嘉左衛門外一名を之に隨行せ  
 しむ……………六  
 正月廿八日東海道鎮撫總督橋本實梁等桑名城に入る……………六  
 正月廿八日在京我藩重臣等は志方司馬助か齎したる徳川慶喜の本藩主父子に贈れる親書に接し協議して慶喜が  
 謝罪の實効を見はし死生只朝命に従ふとの決心を以て惣督府へ歎願すへき勸告すへしとて志方を江戸へ返す  
 に決す……………六  
 正月廿九日花山院家理の募に應じたる者の行爲を査察し不逞の輩は九州鎮撫總督に申告すへしとの命あり……………六  
 正月廿九日日本藩政府は藩主慶順の時局に對する決心及び藩議確立の要領を在京重臣に通報す……………六  
 正月廿九日我藩備前郡夷則へ兵を率ゐて急ぎ上京すへき旨を命す……………六  
 正月廿九日日本藩政府は時勢に鑑み從來の衣服制度を廢止する旨を藩内に布達す……………六  
 正月某日島津久光は賊魁徳川慶喜等を誅伐し宸標を奉安し且つ大義名分に暗くして賊に黨し王師に抗するもの  
 は天誅を加ふべく彼の親族姻戚たりとも自訴の意を發して反正歸順するものは舊惡を咎めす王師に召加へら  
 るへしとの旨を列藩の將卒百姓に告ぐ……………六  
 正月某日舊幕府閣老小笠原長行は近畿關西の諸侯各其封地に歸り朝旨を遵奉し上民を安堵せしむへしとの旨傳  
 達せしむ……………六  
 二月朔日東山道鎮撫總督岩倉大夫同副總督岩倉八千丸大垣に至り駐營す……………七

- 二月朔日薩藩士天草島に至り浮浪の浪籍を肅清すへき旨を告げ且つ將來薩藩に隨從して違背せすとの證書を島内町年寄村庄屋遠見及び山方役等より提出せしむ……………七〇
- 二月某日徳川慶喜は謝罪狀を越前藩に贈りて朝廷に上達せむことを依頼す……………七一
- 二月二日中院通富三條實美權大納言に任せらる是日二條齊敬藤氏長者を辭し九條道孝之に代る……………七二
- 二月二日神祇制度寮裁判所惣督及び顧問事務掛等任命ありし旨の布達あり……………七二
- 二月二日九州鎮撫總督澤宣嘉に長崎裁判所總督を兼ねしめ長崎警衛を大村藩に命せらる……………七三
- 二月二日我藩世子喜廷太政官代行幸供奉の命を拜す……………七四
- 二月二日朝廷我藩をして延岡藩主に上京の命を傳達せしめらる……………七四
- 二月二日肥前藩主鍋島直大召命に應じ京都警衛の爲め着京す……………七五
- 二月二日中津藩島津祐太郎は書を在京我藩重臣に贈りて我藩の救解に依り該藩の嫌疑解除出兵の命を蒙るに至りしを陳謝す……………七五
- 二月二日先に外國人を砲撃したる備前藩家老日置帶刀等處罰せらる……………七六
- 二月二日我藩安場一平山田五次郎徴士を免せらる……………七六
- 二月二日日本藩備頭郡夷則兵を率ゐて上京の途に就く……………七六
- 二月三日天皇二條城に臨幸あり討幕の大詔を煥發し給ふ……………七六
- 二月三日議定中山忠能正親町三條實愛輔弼拜命の旨を達せらる……………八一
- 二月三日大坂裁判所總督を任命し舊幕時代の城代町奉行等の事務を管掌せしめらる旨廻達あり……………八一
- 二月三日九州鎮撫總督澤宣嘉京都を發して長崎へ向ふ……………八二
- 二月三日延岡藩在京吏員は我藩より其藩主の上京藩士の謹慎に關する朝旨を傳達せしに對し請書を提出す……………八二

- 二月三日日本藩老臣連署して書を在京重臣に贈り藩世子喜廷の示命を奉する旨を陳へ且つ藩議所決の要領を通報す……………八二
- 二月四日我藩在京重臣は先に江戸より徳川慶喜の藩主慶順及世子喜廷に對する救解書を持參せし留守居助役志方司馬助を京都より江戸へ返し慶喜に其の恭順謝罪の實行を示すべく忠言せしめんとす……………八三
- 二月四日我藩末家細川利永上京遅延せしを以て更に急使を江戸に派して上京を促すへき旨留守居役をして參與役所へ上申しむ……………八四
- 二月四日在京本藩重臣は花山院の募に應じたる徒輩の取締及び關東規征に關する件等を藩政府に通報す……………八五
- 二月四日日本政府は書を在京重臣に與へて徳川慶喜に謝罪恭順の實を擧げしめ朝廷に寛大の處置に出でさせられむことを望むへき公正なる我藩議を貫徹せしむるには多少の兵力を要すへしとて備組第二番手を上京せしむへしとの旨を報す……………八七
- 二月五日大和鎮撫總督久我通久出張につき我藩兵百人隨從して京都を發す……………八八
- 二月五日舊幕閣老小笠原長行は我藩外四藩上を江戸城に招きて近日濃信地方に勅使下向と稱し其舉措甚疑ふへきものあるを以て朝廷に上申して其眞偽を詳らかにし事變を未發に防止するに盡力せむことを依頼す……………八九
- 二月五日我藩上兼坂熊四郎江戸を發して上京するに當り舊幕臣勝安房建白書を草して之を示す……………九一
- 二月六日我藩世子護久親征に依り東海道先鋒を命せらる……………九二
- 二月六日征東諸藩其兵員に應じ醫師を引率して病院を設置すへきの命あり……………九三
- 二月六日征東の諸藩は冗員及不要物品を省き人員砲銃等の數を申告すへしとの命あり……………九三
- 二月七日朝廷元幕府郡代窪田治部右衛門支配地の取締を我藩に命せらる……………九四
- 二月七日征東出兵休泊地を豫定し桑名に會同すへきの命あり……………九五

二月七日我藩世子護久は東海道先鋒の命其他二令達に對し奉命書を提出す……………九六

二月七日官軍征東につき近江水口藩外十藩主に東海道筋宿驛取締を命せらる……………九六

二月七日我藩京都留守居役をして護久の改名を參與役所に具申せしむ……………九六

二月七日我藩世子護久は松平慶永外三名と連署して目今の急務は宇内の大勢を達觀し皇國萬世の大基礎を確立せらるゝに在りとの旨趣を建議す……………九七

二月七日我藩奉行淺井新九郎に東海道先鋒隊の改革編成等の事を命す……………九九

二月七日我藩世子護久は征東兵員分配に關し備頭清水數馬に諭示する所あり……………一〇〇

二月七日日本藩在桑名先發隊長下津縫殿に對し今般出張を命せし清水數馬隊と交替して凱旋すへしとの旨を達す……………一〇〇

二月七日日本藩在京歩使番安田兵右衛門藤本源右衛門先きに江戸に至り彼地の事情を探り今日京都の重臣に復命す……………一〇一

二月七日長藩世子毛利廣封召に應じて京師に至る……………一〇一

二月八日先帝の忌辰には諸藩士以上の參候貢獻を停め、服忌の制は從來の例に據り、松平の稱號を廢する旨の令達あり……………一〇一

二月八日萬幕令に依り管掌せし土地年貢に關する調査書を提出すへきこと及び我藩主に肥後豊後中十藩の觸頭を命する旨の達あり……………一〇一

二月八日外國事務總督三條實美より佛國軍艦來航申立の件に關し列藩の公議を盡さしむる爲め重役一人下坂せしむへき命ありしを以て我藩奉行木村得太郎に下坂を命す……………一〇四

二月八日去る六日の令達に依り我藩東海道先鋒の兵員を申告す……………一〇四

二月八日我藩萬幕西國郡代支配地取締の令達に關し疑惑の條項を稟申して指示を受く……………一〇五

二月八日在京本藩老臣は東海道先鋒を命せられたること及び萬幕西國郡代支配地取締に關する件等に就きて藩政府に詳報す……………一〇六

二月八日在京本藩吏員内藤貞八東海道先鋒隊の改革編成等に就き實弟西田八左衛門に詳報す……………一〇八

二月八日備前藩東海道從軍の兵數砲器等を其筋に申す……………一〇九

二月九日親征行幸御發豫定を發布せらる……………一一〇

二月九日親征につき諸道宿驛の取締及び東海東山兩道休泊宿驛の兵糧設備に關する件を令達せらる……………一一一

二月九日萬民の撫恤は治國の要務なるを以て托屈の憂なきやう言路を開き隨意に訴願せしむへしとの旨を諭達せらる……………一一三

二月九日我藩士礎谷小右衛門東海道征討軍附屬會計事務取扱方を命せらる……………一一三

二月九日我藩東海道先鋒隊の出發に臨み先に殘留を命したる二十歳以下の戰士に對し其父兄の出征する者に限り特に從軍することを許す……………一一四

二月九日我藩政府は在京老臣に對し長岡護美上京の件備組二番手上京中止の件及びひ人才を登用し公平の處置を取り一新の事業を達成せしめむことを期する旨を報す……………一二四

二月九日徳川慶喜は朝議を蒙りし舊聞老京都守護職所司代監察等二十四人の登城を禁し且つ松平豊前守等十六人の職務を免す……………一二五

二月十日我藩世子護久來十四日太政官代行幸の先驅を命せらる……………一二七

二月十日桑名なる東海道鎮撫總督府を名古屋へ轉する旨同府參謀より我藩に通達す……………一二八

二月十日我藩備頭清水數馬に東海道先鋒總帥を命し且つ軍令狀を下附す……………一二八

二月十日我藩費用多端の際軍用金に缺乏せるを以て大坂に蓄積したる米穀を外國人に賣却せむことを請願す……………一二九

二月十日日本藩王政維新大赦令の發布により文久三年以來入檻せしめたる山田十郎を放免して本職に復す…………… 二二〇

二月十日我藩江戸留守居助勤志方司馬助江戸に至り徳川慶喜に面謁して京都の事情を陳し恭順の實を擧げんことを勸告す…………… 二二一

二月十日東海道先鋒長州藩兵京都を出發す…………… 二二二

二月十一日各藩貢士を選出すへしとの命あり…………… 二二三

二月十一日各藩封地の石高によつて大中小の三藩に區別せらるゝ旨の令達あり…………… 二二四

二月十一日徴士拜命の者は直に朝臣たるへき旨の令達あり…………… 二二五

二月十一日日本藩醫士内藤泰吉に我東征軍に従軍すへき旨を命す…………… 二二六

二月十一日我藩政務の方針を定め至誠を以て朝意遵奉するは勿論徳川氏亦謝罪の上は舊誼を思ひて疎外すへからざる旨を藩學時習館の教職に諭示す…………… 二二七

二月十一日東海道先鋒薩州藩兵京都を出發す…………… 二二八

二月十二日徳川慶喜江戸城を出て東叡山大慈院に屏居し上表して征東の軍を懐められむことを懇願す…………… 二二九

二月十二日我藩東海道先鋒總帥清水數馬五百餘人を率ゐて京師を發し尾州名古屋へ向ふ…………… 二三〇

二月十三日自今太政官へ行幸ある毎に東院參町辻の警衛を我藩に命せらる…………… 二三一

二月十三日東海道先鋒總督橋本實梁同副總督柳原前光古屋に至る…………… 二三二

二月十三日我藩元桑名藩邸北門の添地借用願の件許可せらる…………… 二三三

二月十三日日本藩世子護久書を在藩老臣を與へ時勢に應じ速に兵制を改革すへき旨を諭示す…………… 二三四

二月十三日在京本藩老臣は在江戸末家細川利永及び家族の同地退去の件につき藩政府に報告す…………… 二三五

二月十三日在京我藩老臣等徳川慶喜の依頼せる征東軍中止の件に就きて朝廷に訴願するは却て徳川家の爲め不利なるへしと議決す…………… 二三六

二月十三日東海道先鋒紀州藩兵京都を出發す…………… 二三七

二月十四日東奥征討總督參謀及び屬員姓名を示達せらる…………… 二三八

二月十四日日本藩津田山三郎北陸道先鋒參謀を命せらる…………… 二三九

二月十四日大坂裁判所總督醒醐忠順等大坂西本願寺に於て各國公使と會同し交易通商の盟約を定め且つ近日上海京謁見を賜ふへき旨を告ぐ…………… 二四〇

二月十四日在京本藩吏員は五畿内及び各道舊幕府代官支配地取締を各藩に命せられたる由を藩政府へ報告す…………… 二四一

二月十四日在京本藩老臣は徳川慶喜謝罪書勝安房建白書等に關する内國事務局内議の趣を報し且つ英式砲術家平元良藏聘用並に貢士選定等の事を藩政府に照會す…………… 二四二

二月十五日外國公使に參朝を命せらるゝ旨布告せらる…………… 二四三

二月十五日有栖川大總督宮征東の爲め京都を發せらる…………… 二四四

二月十五日九州鎮撫總督澤宣嘉長崎に至り初めて西役所に入る…………… 二四五

二月十五日舊幕臣中條金之助等東叡山覺王院に對し恭順謝罪せる慶喜を寛典に處せらるへく輪王寺宮より朝廷に執奏あらむことを歎訴す…………… 二四六

二月十五日土州藩兵隊泉州堺に於て上陸せし佛國人を撃攘す…………… 二四七

二月十六日宇瀨生人上京につき南禪寺を其宿所に當て同寺内に宿營せる諸藩に其警衛方を命せらる…………… 二四八

二月十六日日本藩世子護久書を在藩老臣等に與へ曩に松平慶永外四名連署建言せし趣旨に基き藩内一般に誤謬なからしむへしとの意を諭示す…………… 二四九

二月十六日日本藩京都留守居は行幸の際町筋警衛に關する諸藩動向の情況を探りて奉行の間に答ふ…………… 二五〇

改訂肥後藩國事史料 卷八 目次

一一一



二月十六日天草島警衛の爲め出張したる我藩物頭等は島民に對し鎮靜安堵すべき旨を諭告す……………一五五

二月十六日我藩東海道先鋒隊總帥清水數馬兵を率ゐて名古屋に至る……………一五六

二月十七日太政官三職は外國交際に關し聖旨の所在を敘述し上下大に活眼を開き弊習を脱して國家に貢獻すべきの意を訓示す……………一五七

二月十七日外國人上京につき我藩に佛蘭西人宿泊所の警衛を命ぜらる……………一五八

二月十七日日本藩京都留守居は天草島警備に關し他藩と應接錯誤を生したるを以て朝裁の猶豫を上請す……………一五八

二月十七日萬幕士勝安房更に越前藩に託して建白書を呈し其主徳川慶喜の爲めに冤を訴ふ……………一五九

二月十七日筑前藩世子黒田慶賢着京す……………一六〇

二月十八日九州鎮撫使長崎着任の初に當り九州諸藩に對し其當世に處する藩論を一定して具陳すべき旨を達す……………一六一

二月十八日在京本藩吏員は親征につき軍令陸軍諸法度等發布せられたる旨を藩政府に報告す……………一六一

二月十八日北陸道征討參謀津田山三郎京都を發し征途に上る……………一六二

二月十八日阿州藩主蜂須賀茂韶上京す……………一六三

二月十九日親征につき街道筋宿驛に於て印鑑を携帶し往來すべき旨を達せらる……………一六四

二月十九日松平慶永は徳川慶喜が謝罪謹慎の實効を表したるにより征東軍を收めて公平の處置あらむことを建言す……………一六五

二月廿日日本藩世子護久親征の爲め大坂行幸の供奉を命ぜらる……………一六七

二月廿日大阪行在所を本願寺に指定せらる……………一六七

二月廿日大阪行幸供奉各藩の兵士及び吏員の數を規定せらる……………一六八

二月廿日天下臣民親征の旨を奉戴し深く謹戒して過誤に陥らざるやうとの旨を諭達せらる……………一六八

二月廿日日本藩世子護久議定職刑法事務局輔を命ぜらる……………一七〇

二月廿日日本藩講口孤雲木村得太郎參與職刑法事務局判事を命ぜらる……………一七〇

二月廿日外國との通商につき洋銀一枚を以て我金三分に當て融通すべき旨を諭達せらる……………一七一

二月廿一日車駕親征の後寺町門の警衛を嚴にすへき旨我藩に令達せらる……………一七一

二月廿一日我藩世子護久の從兵を分ち親征行幸に先たちて下坂せしめ彼地を警衛せしむへしとの命あり……………一七二

二月廿一日朝廷先に佛國人に對し暴行を加へし土佐藩士を刑罰に處せらるゝに當り我藩に警護方を命ぜらる……………一七二

二月廿一日長岡護美召命を奉して熊本を發し上京の途に就く……………一七三

二月廿一日我藩末家細川利永江戸城に出頭す之を利永最後の登城とす……………一七三

二月廿一日紀州藩主徳川茂承召に依りて上京す……………一七三

二月廿二日讃州高藩主高松頼聰等に入京を免されたる旨達せらる……………一七三

二月廿二日日本藩世子護久大坂行幸供奉の際引率すへき人員を定め之を朝廷に具申す……………一七四

二月廿二日長岡護美上京の途次長崎に於て見聞せし時體の要領及び自己の意見を藩政府に通報す……………一七四

二月廿二日日本藩番頭下津縫殿が引率せる隊士漸次桑名より歸京す……………一七六

二月廿二日日本藩江戸留守居澤村脩藏徳川慶喜の謝罪書を携へて京都の本藩邸に至る……………一七六

二月廿二日加賀藩主前田慶寧着京す……………一七七

二月廿二日外國事務掛副總督東久世通禧等佛國公使に土州人を處刑すへき旨を通報す……………一七七

二月廿三日三職、八局、徴士、貢士の制及び官職名簿を發布せらる……………一七八

二月廿三日古金銀貨通用停止の令を解かる……………一八〇

二月廿三日總督府は靜寛院宮使者京都より歸東につき途中支障なきやう取計ふへき旨を各藩隊長に令達す……………一八四

二月廿三日總督府は輪王寺宮江戸を發し上京せらるとの儀につき道中取締方を各藩隊長に令達す……………一八五

二月廿三日我藩澤村脩藏が江戸より携來たりし徳川慶喜の謝罪書を朝廷に進達す……………一八六

二月廿三日本藩上田休兵衛長崎より佐賀長崎の状況及び軍制取調に關する意見を藩政府に通報す……………一八六

二月廿三日泉州堺に於て佛國人に對し暴行せし土州人處刑せらる……………一八八

二月廿四日我藩及び藝州藩は昨日堺にて暫く死を宥恕せられたる土州人を大坂へ護送し遂に土州藩へ引渡すへしとの命令を受く……………一八六

二月廿四日我藩使者津野田儀右衛門筑前藩に至り日田天草兩地警備の件を謀る筑前藩は目下日田並に加布里等守衛の任に當れるを以て天草へは戍兵を派遣し難き旨を以て之を謝す……………一九七

二月廿四日越前藩より徳川慶喜の謝罪書を朝廷に進達したるに對し征東惣督府へ歎訴すへき旨を命せらる……………一九七

二月廿五日親征發聲期日を更に坊城俊政より通達せらる……………一九八

二月廿五日英國人上京につき我藩及び尾藩に其警衛を命せらる……………一九八

二月廿五日土州藩人を該藩に警護せしむとの議を變し前令を取消し我藩及び藝州藩にて警護すへく命せらる……………一九九

二月廿五日本藩世子護久舊幕元日田郡代窪田治部右衛門逃走して我藩内に來り其踪跡を失したるを以て搜索を遂げ發見せは指揮を仰くへき旨を上申す……………一九九

二月廿五日我藩政府は長崎に於て九州鎮撫使より諮問せられたる國論一定及び舊幕領預り地等の件につき長崎留守居宮村庄之丞に命じて答申せしむ……………二〇〇

二月廿六日佛英蘭三國公使上京すへきを以て土民に違犯なきやう取締を嚴にすへき旨を各藩に令達せらる……………二〇〇

二月廿六日英人上京につき更に阿州藩に警衛を命せらる……………二〇〇

二月廿六日佛國公使の上京一日延期につき更に取締の件を令達せらる……………二〇一

二月廿六日我藩の佛人警衛を免し薩藩をして之に代らしめらる……………二〇一

二月廿六日諸侯參朝の節の服裝につき示達せらる……………二〇一

二月廿六日奥羽鎮撫使を改め九條道孝を總督とし澤爲量を副總督とし醍醐忠順大山格之助世良修藏等を參謀とし薩州長州筑前仙臺四藩の兵に其の護衛を命せらる……………二〇三

二月廿七日親征行幸の次序及び淑旨奉體に關し更に布達せらる……………二〇三

二月廿七日大坂行幸に關して人心動搖せざるやう論達せらる……………二〇四

二月廿七日大坂行幸につき來三月四日各局官吏大坂へ出向すへき旨の令達あり……………二〇四

二月廿七日外國使臣上京參内につき其の警衛心得書を關係各藩に通達せらる……………二〇四

二月廿七日我藩英國人上京につき警衛を命せられたるを以て物頭堀内彈右衛門外數人に令して警固の任に當らしむ……………二〇六

二月廿七日我藩先鋒隊進んで駿府に至る……………二〇八

二月廿八日天皇諸侯を便殿に召し同心協力以て國事に奮勵せむことを親諭し給ふ……………二〇九

二月廿八日佛國公使入京につき我藩外五藩に騎馬警衛を命せらる……………二一〇

二月廿八日明後晦日佛英蘭三國公使に謁見を賜ふ旨達せらる……………二一一

二月廿八日東海道鎮撫總督橋本實梁同副總督柳原前光駿府に着陣す……………二一一

二月廿八日本藩世子護久行幸に供奉して下坂するに際し家臣の隨從者を任命す……………二一一

二月廿八日長岡護美は上京の爲め航行中其觀察及び所感を敘述して大坂より在藩老臣に贈る……………二一五

二月廿九日我藩天草警衛兵を増遣す……………二一七

二月廿九日佛國公使上京して相國寺の旅館に入る……………二一八

二月晦日佛蘭兩國公使參朝す天皇之を引見し兩國との交際益々親睦し永久不變ならむことを欲すとの叡旨を宣し給ふ……………二二九

二月晦日英國公使參朝の途上事變ありたるを以て深く宸憂し給ひ更に戒嚴を加ふべき旨我藩並に列藩へ令達せらる……………二二〇

二月晦日大坂行幸供奉者下宿の件につき武家前列は下鳥羽今後列は上鳥羽に指定の旨を達せらる……………二二二

二月晦日長岡護美京都に到着す……………二二三

二月晦日日本藩世子護久の先に在藩老臣に與へし書翰に對し老臣等連署して請書を在京重臣に贈る……………二二四

二月晦日日本藩天草派遺員は天草郡警衛の朝命我藩に下りし趣を薩藩派出員に通告す……………二二五

二月某日元京都守護職松平容保自ら責を引きて徳川慶喜を寛典に處せられむことを請願す……………二二六

二月某日我藩先きに豊後日田に出張せしめたる警衛兵を撤退す……………二二六

二月某日會津藩は藩主朝敵の名を蒙り人心不穩にして脱藩するものあるにより兵隊を派遣して鎮撫せしむべき旨各地へ通牒す……………二二六

二月某日松平陸奥守等連署建白して徳川慶喜追討の疑議を陳す……………二二七

二月某日信州小諸藩主牧野遠江守は徳川慶喜追討の兵を出すことを謝す……………二二八

三月朔日暗殺暴行猶ほ止まざるを以て重ねて取締方を嚴にすべき旨を達せらる……………二二九

三月朔日長岡護美に參與職を命ぜらる……………二三〇

三月朔日鍋島閑叟議定兼軍防事務局輔に同直大議定兼外國事務局輔に任せらる……………二三〇

三月朔日我藩世子護久大坂行幸供奉に用ふる隨從荷物等の目數を辨事役所に申告す……………二三一

三月朔日先に泉州堺に於て割服を命ぜられたる土州人の内九名は佛人の教諭に依りて死一等を減し流罪に處せらる……………二三一

らる……………二三二

三月朔日外國事務總督三條實美等書を英國公使に與へ其の昨日參朝の途次暴行者の妨害を加へしことを謝す……………二三二

三月朔日英國公使參朝の途次警衛の任に當りし我藩物頭堀内彈右衛門井上儀左衛門は其傷害事變の顛末を太政官に申告す……………二三三

三月朔日日本藩老臣等書を在京老臣に與へ東西相應し一致協力して君徳を補佐し皇國治安の政策を樹立せんとの意を致す……………二三四

三月朔日日本藩天草出張物頭柏木文右衛門等に對し更に物頭四人を増遣すること及び警衛中の心得方を示達す……………二三五

三月朔日薩藩得能彦右衛門は天草に於て前日の通告承諾の書を我藩に贈る……………二三六

三月二日親征行幸出陣延期の旨仰出さる……………二三七

三月二日長岡護美軍防事務局輔に補せられ且つ左京亮從五位下に任叙せらる……………二三七

三月二日延岡藩主内藤備後守勅免せられたる旨布達せらる……………二三六

三月二日英國公使に明三日參朝を命し且つ途上警衛に關する條項を布達せらる……………二三元

三月二日英國公使下坂の節大坂まで護送すべき旨を我藩外三藩に命ぜらる……………二四〇

三月二日東海道先鋒本藩兵總帥清水數馬殿府を發して前進す……………二四〇

三月某日日本藩先鋒隊從軍者島田治兵衛江戶定詰留齋土彌一郎等江戶濱町の藩邸に至り金銀を保管して本藩兵の來着を待つ……………二四一

三月二日薩藩得能彦右衛門は天草にて更に書を我藩派遣員に贈り主用を以て該地に留まれとも敢て鎮撫等の爲に非ざる旨を辯す……………二四二

三月三日天皇英國公使に謁見を賜ふ……………二四二

三月三日英國公使參朝の際我藩兵三拾人を遣はして之を警衛せしむ……………(一四二)

三月三日日本藩英國公使下坂の際護衛すべく命せられたるを以て財津次郎兵衛等に大坂まで護送を命ず……………(一四二)

三月三日我藩佛國公使下坂の護衛を命せらるる仍て請書を進達す……………(一四二)

三月三日我藩大坂邸に保管せる堺浦暴行の土佐藩人を同藩に引渡す……………(一四二)

三月四日太政官代行幸を來九日に治定せられたる旨通達あり……………(一四四)

三月四日先に英國公使參朝の途次暴行せしものを處刑せらる……………(一四五)

三月四日佛國公使下坂に就きて我藩騎士三名を遣はし護して伏見に到らしむ……………(一四五)

三月四日日本藩末家細川利永家族及び藩士等を引率して江戸を退去す……………(一四五)

三月四日舊幕府目付中臺信太郎時勢の切迫に際し江戸に在る隊號及び兵數を調査す……………(一四五)

三月五日有栖川大總督宮殿府に着營し給ふ……………(一四七)

三月五日我藩警衛に係る元代官地調査の上九州鎮撫使へ申告すへき旨令達せらる……………(一四七)

三月五日日本藩世子護久大坂行幸供奉の支度金を拜受す……………(一四八)

三月五日我藩兵箱根關門の守衛に任す……………(一四八)

三月五日日本藩軍制を改革して開國主義を取るへしとの旨を布達す……………(一四九)

三月五日舊幕臣勝安房書を官軍參謀西郷吉之助に與へ今や官軍江戸府に迫れとも君臣恭順の禮を守り居るを以て能く其の情實を詳らかにし條理を正して處置せられむことを乞ふとの意を致す……………(一五〇)

三月六日大總督府江戸城攻撃の期日を定め且つ先鋒の注意事項を指示せらる……………(一五一)

三月六日日本藩轟木武兵衛山田十郎を上京せしむへしとの旨を達せらる……………(一五一)

三月六日日本藩京都留守居池邊松右衛門は英國公使下坂の際我藩外三藩談合して護送したる旨を申告す……………(一五三)

三月六日長岡護美は天恩に感泣し就職叙位の已を得ざるを陳し且つ軍防局中の事情等を在藩老臣に通報す……………(一五四)

三月六日副總裁兼海陸軍務會計事務總督岩倉具視は長岡護美の横井平四郎召命を辭するの書に答へ何等留意せず勿々命に應ずへしとの旨を内示す……………(一五五)

三月六日佐伯藩儒臣秋月小相書を我藩領鶴崎毛利到に與へ王政維新に際し尊王の國議に定まりたる旨を報し且つ小藩獨立し難きを以て諸事誘掖せられむことを乞ふとの意を致す……………(一五六)

三月六日東海道先鋒總督府參謀木梨精一郎書を廣澤兵助に與へ關東の情勢及び徳川氏に對する處置の意見を通報す……………(一五六)

三月六日東山道先鋒總督の軍甲斐國勝沼にて舊幕兵と戦ひ之を破る……………(一五六)

三月七日言語を洞開し士民の意思を盡さしめ脱籍者を生せしむへからすとの旨諭達せらる……………(一五七)

三月七日外國交際に關し臣民均く朝旨を奉戴すべく若し違犯者あらは刑典に處せらるへき旨令達せらる……………(一五七)

三月七日長岡護美を穿つことを許さる……………(一五七)

三月七日姫路藩主酒井忠惇入京官位を止めらる……………(一五八)

三月七日小倉藩主小笠原豊千代先年來避難して熊本に滞在し居たるが此日熊本を發して領地へ歸る……………(一五八)

三月七日東海道先鋒總督府參謀海江田武次甲府の急報に接し駿府より兵を分け自ら率ゐて鎮撫に向ふ……………(一五九)

三月八日我藩横井平四郎を上京せしむへき旨重ねて令達あり……………(一六〇)

三月八日在京長岡護美は我藩邸内物論沸騰して薩長の處置に不満なるものあり且つ兵制改革に洋法を採用するを否とする論者あるを慨し又横井平四郎を徵上に採用せらるる件等につきて在藩家老に情報す……………(一六〇)

三月九日太政官代に行幸あり三職を召見し蝦夷地開拓の事を諮詢せられ且つ先帝の遺旨を繼述し國基を確立し皇威を振起し萬民を安堵せしむへしとの旨を宣し給ふ……………(一六一)

三月九日日本藩天草島警衛の爲め増遣せし物頭久武彌平左衛門等四隊を富岡に駐屯せしむ……………二六九

三月九日東山道官軍大垣藩兵薩長二藩兵と俱に舊幕府を武藏國築田宿に討ちて之を走らす……………二六九

三月九日舊幕府は幕臣の暴動せむことを憂ひ恭順の意を守り君家に禍を及さるやう深く謹慎すへしとの旨を諭達す……………二七二

三月十日我藩箱根關門守衛の件に關して疑議を生し總督の指揮を仰く此日本藩安場一平總督府參謀を命せらる……………二七三

三月十日舊幕府は中山道總督府へ歎願せしに對し官軍の先鋒隊長より答書を交付したるを以て益々恭順の旨を守りて謹慎すへしとの意を舊幕臣に諭達す……………二七五

三月十日舊幕旗下の土山岡鐵太郎先に駿府に至り參謀西郷吉之助に面して慶喜恭順謝罪の意を達し總督府の處置條件を得て江戸に歸報す……………二七五

三月十一日長岡護美は在京諸藩親交の狀況及び親兵設置の要を略叙し本藩政府に通告す……………二七七

三月十二日我藩副奉行淺井新九郎は相模國湯元陣中より征東軍進行の次第甲府の戰爭及び總督府の徳川氏處置に關すること等を藩政府へ通報す……………二七八

三月十二日我藩從軍醫員内藤泰吉關東の情況を在京の山形典次郎等に詳報す……………二八一

三月十二日小笠原豐千代領國豊前田川郡に歸邑す……………二八三

三月十三日我藩汽船を兵庫港より關東へ廻航せしめ且つ輪送藩兵として横濱を警衛せしむへき旨命せらる……………二八三

三月十三日神祇官を再興し祭政一致の舊典に復し且つ諸國神職の者を支配せらるへき旨布達せらる……………二八四

三月十三日本藩世子護久刑法事務局輔を免せらる……………二八四

三月十三日東山道先鋒總督岩倉具定全副總督岩倉具經進みて江戸市外板橋驛に到る……………二八五

三月十三日本藩政府は軍制改革に着手せしこと及び出張兵交替の件を在京重臣に通報す……………二八六

三月十三日東海道先鋒總督府參謀木梨精一郎は英國公使と横濱に會し徳川慶喜の處置につき談判す……………二八八

三月十四日天皇祖宗の祭典を宮中に行ひ神明に誓ひて廟謨を定め五條の誓文並に宸翰を下し給ふ翌日之を發布せらる……………二八九

三月十四日本藩末家細川利永江戸より京都に至り壬生の地藏院に入る……………二九三

三月十四日我藩兵箱根關門の守衛を小田原藩に譲りて前進す……………二九三

三月十四日舊幕臣勝安房高輪薩藩邸に至り大總督府參謀西郷吉之助と徳川慶喜謝罪の件を談判す西郷領する所あり自ら總督府に至り指揮を請ふを約し且つ令を諸軍に傳へて明日の江戸城進撃を中止す……………二九四

三月十五日親征發聲に關する日程及び行幸路次供奉進止等の規定を告示せらる……………二九八

三月十五日親征行幸の意義を明らかにし上下疑惑なく各其分を盡すへき旨を諭示せらる……………三〇〇

三月十五日從來諸國に掲けたる舊幕府の榜示を撤去し更に國民の心得方を揭示せしめらる……………三〇一

三月十五日朝廷我藩軍艦に對する東海廻航の命を變し更に親征につき來る廿五日迄に汽船一艘を天保山沖に碇船せしむへき旨を命せらる……………三〇三

三月十五日東山道先鋒開戦の報ありしを以て各藩兵益々奮勵すへき旨命令せらる……………三〇四

三月十五日我藩東海道先鋒隊進んで藤澤に至り滯陣す……………三〇五

三月十五日舊幕府は大總督府參謀西郷吉之助より進撃中止の答辭を得たるを以て益々鎮靜して大命を待つへき旨を舊幕臣に諭達す……………三〇六

三月十六日海軍天覽の爲め軍艦及び汽船の大坂出帆を停止せらる……………三〇六

三月十六日本藩長谷川仁右衛門參與内國事務局判事兼大坂裁判所掛を命せらる……………三〇七

三月十六日我藩溝口藏人に海軍總奉行を命す……………三〇七

三月十六日仁和寺宮家木村右衛門は彰仁親王の來十七日兵部郷任官宣下あるへき内命を藏らせられたるを告げ  
且つ翌十八日に悅使者を請けらるゝ旨を我藩在京吏員に報す……………三〇八

三月十六日舊幕府江戸城内の政廳を田安邸に移す……………三〇八

三月十七日去る十四日宮中の祭典誓約に洩れたるものは明十八日參朝して加名すへき旨を達せらる……………三〇八

三月十七日來廿一日親征行幸八幡駐紮の際當該地附近の警衛を我藩に命せらる……………三〇九

三月十八日准皇を尊て皇太后と爲し大宮と稱し給ふ……………三〇九

三月十八日我藩兵百人横濱警衛の爲め京都を發す……………三一一

三月十八日我藩軍制改革につき自今演武場に於て洋法の步操砲術を練習すへき旨を布達す……………三一一

三月十八日東海道先鋒總督府參謀は副總督柳原前光甲府に進軍するを以て我藩兵の一半を分ちて該地へ派遣す  
へき旨を傳達す……………三一一

三月十八日藤澤在陣我藩副奉行淺井新九郎は征東軍行進の情況及び關東處置の件等を在京重臣に報告す……………三一二

三月十八日東山道官軍先鋒隊新宿より進みて市ヶ谷の尾張藩邸に入る……………三一二

三月十八日舊幕府は天璋院の旨を奉し再び恭順の意を嚴守すへき旨を其臣下に諭達す……………三一二

三月十九日諸侯の參朝に關する心得方を示達せらる……………三一二

三月十九日東海道先鋒兼鎮撫總督柳原前光同參謀海江田武次甲府の鎮撫に向ふ我藩兵之に隨行す……………三一二

三月十九日我藩大和鎮臺守衛の兵數を減少すへき旨命せらる……………三一二

三月十九日長岡護美は京都の時體等に就き自己の觀察する所を在藩の老臣に通報す……………三一二

三月十九日内國事務局判事兼大坂裁兼所掛長谷川二右衛門京都を發して大坂へ至る……………三一二

三月十九日奥羽鎮撫總督九條道孝奥州鹽竈に至る……………三一二

三月某日鍋島兩叟防軍事務局輔を免せられ制度事務局輔に任せらる……………三二七

三月廿日徳川慶喜と私に文通することを禁せらる……………三二八

三月廿日曩に英國公使參内の途次事變を生したる際警衛の任にありし我藩隊長に五日間の差控を命せらる……………三二九

三月廿日長岡護美行幸に先たち京都を發して大坂に到る……………三二九

三月廿日我藩八幡警衛として兵若干を派遣す……………三二九

三月廿日西園寺公望權中納言に任せらる……………三三〇

三月廿日東久世通禧横濱裁判所總督に任せられ鍋島直大副總督に任せらる……………三三〇

三月廿日島津忠義米十萬石を獻し軍政宏張の費に供せむことを請ふ……………三三〇

三月廿日征東大總督府參謀西郷吉之助徳川慶喜謝罪の條款を齎して入京す即日廟議を決し案を具して宸裁を得  
たり……………三三〇

三月廿一日大坂に行幸あらせらる本藩世子護久之に供奉す……………三三一

三月廿一日薩長二藩の兵江戸千住新宿板橋品川等に關門を設け之を嚴守する由を報する者あり……………三三一

三月某日舊幕府政廳江戸城を出て、田安邸に移りしより旗下の十亦領邑或は近郊に退去す爲めに府下物情騒然  
たり……………三三一

三月廿二日本藩横井平四郎に徴上を命せらるゝにつき早々上京すへしとの旨を達す……………三三四

三月廿二日副總裁岩倉具視は親しく天地の神祇に誓はせられたる聖旨を奉戴し維新の實功を奏せさるへからす  
各局諸官は益々勵精事に當り意見あるものは隔意なく進言すへしとの旨を諭達す……………三三五

三月廿二日舊幕歩兵隊長古屋作左衛門等兵千餘名を率ゐて若松城下に至り尋て奥羽聯合を策す……………三三五

三月廿二日信州上田藩人某信州地方に於ける古屋作左衛門等の行動及び之に對し各藩警戒の爲め兵を派遣せし  
たり……………三三五

ことを京都の同藩人に通報す……………三六

三月廿三日天皇大坂行在所に着せし給ふ本藩世子護久供奉して大坂に到る……………三六

三月廿三日宗對馬守朝鮮國との交通事務管掌を命せらる……………三七

三月廿三日石見國濱田藩主城池を失ひ作州へ流寓し君臣困厄に陥れるを憫み備前因幡二藩に命じて之が救恤の道を謀せしめらる……………三八

三月廿三日大赦令の節目及び癸丑以來國家の爲め非命に斃れ若くは禁錮落魄に陥りたる者に對し更に寛宥の恩命下をさる……………三六

三月廿三日我藩襲に英國公使參内の途次事變を生じたる際警衛の任に當りし兵隊長堀内彈右衛門等に差控を命ず……………三九

三月廿四日在京の各藩人員を調査申告すへき旨令達せらる……………三九

三月廿四日立太后宣下につき在邑の諸侯は來廿七日名代を以て祝詞を奉啓せしむへき旨令達せらる……………三九

三月廿四日銅錢の通用相場を定め布告せらる……………三九

三月廿四日平塚在陣本藩副奉行淺井新九郎關東の事情を報告し且つ甲府鎮撫の爲め藩兵を分遣せしを以て京都に滯留せる大砲手一隊を急派せられんことを在京の重臣に請ふ……………三九

三月廿五日時機により大旗を東に向け給ふへきを以て諸軍速に忠戰を遂げ四海平定の功を奏すへしとの旨を達せらる……………三九

三月廿五日日本藩世子護久海軍天覽行幸供奉を命せらる……………三九

三月廿五日海軍天覽に關し出撃次第、祝砲發砲、艦船廻轉、整列場所、軍列順序等を達せらる……………三九

三月廿五日紀州外五藩主に對し有栖川大總督宮不日江戸入城あるへきにより其指揮に従ひ關東奥羽平定の功を

奏すへしとの旨を達せらる……………三六

三月廿五日副總裁岩倉具視三職及び微上等を會し蝦夷地開拓のことを講す……………三六

三月廿五日有馬中務大輔書を長岡護美に附り佛國軍艦演習の見學に同行を誘はれたるに答ふ……………三六

三月廿五日參謀西郷吉之助徳川慶喜謝罪條款の勅裁を得て駿府に歸り大總督府に報告し遂に江戸城開收に着手す……………三六

三月廿五日結城城主水野勝知は留守家臣等己に背きて官軍に應ずと聞き江戸より歸り之を撃攘して城に入る……………三六

三月廿六日天保山に行幸ありて海軍演習を觀覽し給ふ……………三六

三月廿六日本藩政府は支藩士細川豊前守上京の件横井平四郎に徴士として上京を命じたる事及び山田十郎轟木武兵衛召命辭退の事を在京老臣に通牒す……………三六

三月廿六日水戸藩士故武田耕雲齋の同志等兵を率る反對派の市川三左衛門佐藤圖書朝比奈彌太郎等六百餘人會津へ逃走せしを以て追躡して奥州白川驛に至る……………三六

三月廿七日仁和寺宮嘉彰親王、東久世通禧島丸光徳萬里小路博房毛利廣封長岡護美等と佛國軍艦に抵り訓練を觀覽せらる……………三六

三月廿七日日本藩京都留守居池邊椋右衛門は去る廿四日の令達に依り我藩及び觸下各藩の在京人員調書を辨事役所に進達す……………三六

三月廿七日我藩政府は徳川慶喜の我忠言を容れて江戸開城謝罪謹慎の意を表したるに猶ほ官軍進みて之を討伐するは我周旋の勞空しく前言を食むの恐あれば其筋に寛典の處置を乞ひ信義を天下に失はざるやう盡力すへしとの旨を在京老臣に通牒す……………三六

三月廿八日神社の稱號に佛語を用ひたるもの及び佛像を神體とせるもの等を調査せしめらる……………三六

三月廿八日本藩世子護久及び弟護美は時勢に鑑み兵制改革の急務たる旨を在京在坂の重臣に訓諭す……………三五五

三月廿八日在坂本藩老臣米田虎之助は兵制改革に關する藩世子等訓諭の趣意を藩上に周知せしむべく小姓頭に示達す……………三五五

三月廿八日東海道先鋒總督橋本實梁進みて鎌倉に至る……………三五七

三月廿九日朝廷土佐藩に對し佛國への償金拾五萬トルの内先つ五萬トルを支拂ふべき旨を命せらる……………三五七

三月廿九日在坂本藩老臣米田虎之助は天保山行幸の後人心漸く安定せし趣を在藩老臣に報す……………三五八

三月廿九日本藩副奉行木村得太郎親征中軍監兼務を命せらる……………三五九

三月廿九日舊幕大目付妻木多宮江府の人心動搖するを憂ひ慶喜の恭順に對し寛大の處置あるべく惣督府より達せられたる旨を示達す……………三五九

三月晦日藩主議定參與等奉職の藩は貢上を出すに及はざる旨達せらる……………三六〇

三月晦日本藩京都留守居林新九郎末家細川利永歸國願の添書を提出す……………三六〇

三月晦日在京本藩重臣は關東出張副奉行淺井新九郎の請求に據りて大砲手増遣の事を在坂老臣米田虎之助に謀る……………三六一

三月某日本藩平井城之介京都に於て岡松辰吾の紹介により米澤藩士雲井龍雄肥後藩士甲村久伍と交を結ぶ……………三六二

三月某日鍋島直大横濱裁判所副總督に任せらる……………三六三

三月某日津輕藩士西館平馬我藩世子護久の意を受け歸藩して其主津輕承烈に勤王を勸む承烈素より其志あり心を決し力を官軍に致す……………三六三

四月朔日東海道先鋒兼鎮撫使總督橋本實梁池上本門寺に至り同副總督柳原前光三田有馬邸に入る……………三六四

四月本藩砲術師範大島久平の一隊に大坂より關東へ出張を命ず……………三六四

四月朔日箱館に出張せる本藩吏員安田助一彼地の情況を京都熊本の同僚に詳報す……………三六五

四月朔日延岡藩使者服部傳兵衛等熊本に來たり藩主内藤備後守京都にて謹慎を命せられたるにより重ねて救解の周旋を乞ふ……………三六八

四月朔日伊達宗城長岡護美の書に答へ其軍監任命に對する不平を宥む……………三六九

四月二日北陸道鎮撫使總督高倉永祐副總督四條隆平千住に到る……………三六九

四月二日總裁局顧問參與小松帶刀同後藤象二郎車駕に扈從して大坂に滯在中内國事務判事參與大久保一藏に顧問詰所出仕事務取扱を命せらる……………三六九

四月二日在坂本藩老臣米田虎之助大坂行幸後京攝間の人心稍々鎮靜に歸したる事且つ護久歸藩の件及び銃隊の練を始めたる由を藩政府に通報す……………三七〇

四月二日在坂本藩吏員は會津藩の檄文を得て之を藩政府に送達す……………三七〇

四月某日横濱裁判所總督東久世通禧に江戸開市事務總督心得を横濱裁判所副總督鍋島直大に同副總督心得を命せらる……………三七三

四月三日東國の細民饑饉に頻する者あるを憂ひ仙臺藩に對し大總督府の需用に供すべく豫め米穀の調達を命せらる……………三七四

四月三日本藩末家細川利永天機奉伺の上肥後へ下國の事を聽許せらる……………三七四

四月三日我藩征東軍の應援として大坂より大島藤一郎の率ゐる大砲隊を派遣す仍て鑑札印章旗等下附の儀を太政官代へ伺ふ……………三七五

四月三日征東軍所屬の我藩兵江戸に至り芝白金の藩邸に入る……………三七七

四月三日本藩老臣郡夷則溝口藏人に海軍事務を總管せしむる旨布達す……………三七七



四月四日東海道先鋒總督橋本實梁同副總督柳原前光、參謀西郷吉之助等を隨へて江戸城に入り勅旨を田安慶頼に傳達す……………三六九

四月四日本藩は大坂行幸に供奉せる藩世子護久及び長岡護美の率ゐたる隊長兵士の員數を申告す……………三七一

四月四日明五日觀兵式施行の旨令達せらる……………三七一

四月四日諸街道筋通行の節の取締方及び各藩主の天機伺の爲め下坂するもの、從者を簡易にして宿驛の煩とならざるやうとの旨を布達せらる……………三七一

四月四日本藩遊學生井上多久馬武州横濱より熊本に歸る……………三七一

四月五日太政官日誌出版につき趣旨邊限に至るまで其趣旨普く貫徹せしむとの旨を達せらる……………三七一

四月五日我藩觀兵式に參列せしむべき兵數を申告す……………三七一

四月五日松平慶永長岡護美に答書して行在所へ伺候せし由を報し海軍充實陸軍觀兵式のこと及び……………三七一

四月五日日本藩演武場主任郡夷則我藩の兵制改革につき異論勃興し人心一和を缺くを憂ひ從來の六備隊は暫く舊法に従ひ別に郷兵一隊を編隊して専ら西洋法を以て訓練せん事を請願す……………三七一

四月五日日本藩曾て保管せし土州人塚に於て處刑せられし時使用したる木綿代金の請求書を提出す……………三七一

四月某日奥羽地方賊徒跳梁主命を梗塞するものあるを以て伊達慶邦に對し父子戮力近接の諸候を鼓舞して速に會賊勦絶の功を奏せしむべしとの旨を令達せらる……………三七一

四月某日舊幕歩兵隊長古屋作左衛門等北越の諸藩を説いて同盟を訂結す……………三七一

四月六日大坂城に行幸ありて觀兵式を行はしめらる……………三七一

四月六日東山道官軍結城城を抜く……………三七一

四月六日仙臺藩世子伊達左京大夫朝旨を奉し京都を發して國に歸る……………三七一

四月六日仙臺藩主伊達慶邦使者伊達將監を駿府なる征東大總督府に遣し征討の鋒を止め諸藩の公論を盡し天下の正義に従ひて王政復古の偉業を大成せしめられんことを建議し直に斥けらる……………三七一

四月六日北陸道先鋒兼鎮撫使總督高倉永祐同副總督四條隆平千住より淺草本願寺へ轉營す……………三七一

四月七日日本藩末家細川利永下國せんとして京都を發し大坂に赴く……………三七一

四月七日元代官管轄地の石高地圖等調査すへき旨我藩に達せらる……………三七一

四月七日列藩及び諸領地の村高帳其他諸帳簿寫を提出すへき旨の令達あり……………三七一

四月七日日本藩は一昨年來我領内に避難滞在せし小倉藩主小笠原豐千代丸の歸邑したる旨を申告す……………三七一

四月八日諸侯の家族及び其臣隸の江戸に在る者の歸邑を奨め且つ其異同等を内國事務局に申告すへしとの旨達せらる……………三七一

四月八日三道出兵の宿驛通行及び給與規則を發布せらる……………三七一

四月八日去る六日の觀兵式に參列せし我藩兵隊に慰勞として酒饌を賜ふ……………三七一

四月八日本藩は豊後府内藩士の依頼により目下謹慎中の其主大給左衛門尉を寛典に處せられたき旨の數願書を傳達す……………三七一

四月八日本藩副奉行淺井新九郎官軍江戸に到着後の情況江戸本藩邸解放處分及び大島大砲隊増派の件等に関し在京重臣に通牒す……………三七一

四月八日本藩横井平四郎徴士の命を帯ひ上京の途に就き凌雲丸に塔乗して百貫石港を發す又本藩京都遊學生江村裕益之に同乗す……………三七一

四月八日本藩廳は内山又助の上京に託し徳川氏の處置公平に出てなは會津藩亦悔悟恭順の道に至るへきにつき益々寛仁の聖徳を發揮して神州治安の基を開かるべく周旋すへしとの旨を在京在坂の老臣に通牒す……………三七一

- 四月九日日本藩偵吏江戸の情報を通告す……………四〇八
- 四月九日伊達宗城書を長岡護美に贈りて佛國軍艦見學に誘ふ……………四〇九
- 四月九日水戸藩故武田耕雲齋子武田金次郎國論反正の朝命を奉し京都を發して水戸に向ふ……………四一〇
- 四月九日舊幕臣勝安房大久保一翁大總督府に至り江戸城及び軍艦兵器を田安家に保管せしめむこと及び尾張元千代を徳川氏の相續者たらしむることを敷願し且つ既に引渡したる護送船の返付と生計に窮せる歩卒四千名の引渡とを請ふ翌日皆之を聽許せらる……………四一一
- 四月十日諸國大小神社の佛體佛具を除去するに當り社人社僧の間に粉擾を醸す如きことなからしむへく豫しめ示達せらる……………四一二
- 四月十日大坂劍會所設置につき心得方を布達せらる……………四一三
- 四月某日政度事務局權判事井上石見の建言に基づき人工を省き國財を殖する策及び總て皇基を固くする經論の策等施行せらるへきにつき俾らす願出つへき旨達せらる……………四一四
- 四月十一日東本願寺掛所に行幸ありて演武講文を贈はせ給ふ……………四一四
- 四月十一日來十四日大坂元陸軍省に於て供奉各藩兵の訓練を施行すへき旨達せらる……………四一六
- 四月十一日官軍江戸城を收む此日徳川慶喜水戸へ退去す……………四一六
- 四月十一日日本藩井上多久馬に長崎遊學を命す……………四一七
- 四月十一日薩藩上野五左衛門大坂に至り會津兵勢強大なるを以て薩長の精兵を増遣せられんことを請ふ……………四一八
- 四月十二日蝦夷地開拓の爲め箱館裁判所を設置し議定兼軍防事務局總督仁和寺宮嘉彰親王を總督とし清水谷公考士井利恒を副總督に任せらる親王は之を辭し舊官に復せらる……………四二〇
- 四月十二日江戸三番町に屯集せる舊幕歩兵隊を勦討すへく我藩及び備前大村三藩に命せられ夜に入りて更に延

期の令達あり……………四二三

- 四月十二日朝政一新の叢旨を奉し簡易賈略を主として大いに藩政を改革し門地執權等の習慣を廢し庸劣を黜け人材を任選して復古の趣旨を貫徹せしむへしとの奉書を下さる……………四二三
- 四月十二日日本藩主慶順家族及び家來の江戸引拂並に殘留者の届書を提出す……………四二三
- 四月十二日在大坂本藩偵吏首藤敬助舊幕兵の隊名兵數屯所等を報告す……………四二四
- 四月十二日米國より舊幕府へ贈るへかりし軍艦一隻横濱に來航す……………四二五
- 四月十二日舊幕歩兵奉行大島圭介は福田八郎右衛門等と兵を率ゐて江戸を脱す……………四二五
- 四月十二日舊幕海軍副總督榎本釜次郎等軍艦を率ゐて品海を脱出す……………四二七
- 四月十三日在京諸侯中職任なき者は相當の兵員を留め歸藩して家政を改革し兵備を嚴にすべきを命せらる……………四二九
- 四月十三日上野館林藩主秋元但馬守上野伊勢崎藩主酒井下野守謹慎免除の旨達せらる……………四三〇
- 四月十三日東海道先鋒總督江戸城中を點檢し遂に久留米藩邸に陣す……………四三〇
- 四月十三日日本藩に保管を命せられたる舊幕歩兵三番町の屯集所に銃砲彈藥を集纏すとの聞えあり物頭山路太左衛門屯集所に至り隊長平岡慎太郎をして嚴に調査せしむ……………四三二
- 四月十三日小倉藩主小笠原豐千代丸家族熊本を發して歸邑の途に就く……………四三二
- 四月十四日日本藩主慶順先に命せられたる九州御領地の取締方を免せらる……………四三三
- 四月十四日日本藩世子護久書を一門長岡休焉に與へて天下革新の際舊習を洗脱し一致和協して國事に勤勞せむことを囑す……………四三三
- 四月十四日日本藩末家細川利永大坂を發して下國の途に就く……………四三三
- 四月十四日三番町歩兵隊を誅伐すへしとの命令あり我藩兵大村藩兵と與に之を圍み遂に兵戈を用ひず彼を説服

して銃器彈藥等を押収す……………四四

四月十五日征東大總督有栖川宮熾仁親王江戸に到り芝増上寺に滯陣せらる……………四六

四月十五日大坂駐紮中供奉者の心得法度を發布せらる……………四八

四月十五日陸奥欄倉藩主松井周防守趣後権谷藩主堀右京亮謹愼を命せらる……………四九

四月十五日田安慶頼脱走したる舊幕軍艦の處置を勝安房に託す……………四〇

四月十五日東海道先鋒總督府は脱走軍艦を品海へ引戻の事を大久保一翁勝安房に委任す依りて翌日勝安房軍艦へ抵る……………四〇

四月十六日江戸開市副總督鍋島直大大坂を發し此日横濱に至る……………四一

四月十七日諸布告書類傳達規則を發布せらる……………四一

四月十七日美濃大垣藩主戸田采女正讃岐高松藩主松平讃岐守謝罪歸順の實効顯はれたるを以て前過を宥免せらる……………四二

四月十七日近江宮川藩主堀田出羽守謹愼を免せらる……………四四

四月十七日日本藩世子慶久歸藩して力を兵制改革に致さんと欲し百日の賜暇を請願す……………四四

四月十七日日本藩林玄助奥州の偵察を終へ江戸に返り結城の戦況及び奥州街道筋一揆騒擾の事を報告す……………四六

四月十七日東山道官軍は宇都宮及び結城より進み舊幕兵を小山驛に邀撃し利あらずして退く……………四七

四月十七日勝安房襲に脱出せし舊幕船艦を率ゐて品川灣に歸る……………四八

四月十八日水戸藩鈴木石見朝比奈彌太郎脱走せしを以て搜索を遂くへしとの旨達せらる……………四八

四月某日脱走せる舊幕旗下の士等君側の姦を除きて舊主の冤を雪ぎ大義名分を正して綱常を萬世の下に維持すへしとの意を宣言す……………四九

四月十九日北陸道先鋒總督府を上野寛永寺に移されむとして遂に中止せらる……………四五

四月十九日日本藩末家細川行眞召に依りて上京し大坂駐紮中につき同地に滯留することを申告す……………四九

四月十九日日本藩天草郡に於て薩摩土佐大村三藩人に接し錯誤を生したる徒士二名を處罰し且つ長崎鎮臺に其旨を申告す……………四五

四月十九日長岡護美更に書を在京老臣に贈り兵制一新文武奨励の急務たる所以を説く……………四五

四月十九日日本藩老臣米田虎之助は兵制改革の要件を帯ひて大坂より熊本に歸る……………四五

四月十九日舊幕兵宇都宮城を攻め之を陥る……………四七

四月廿日住吉に行幸し給ふ……………四八

四月廿日前右大臣一條實良薨す……………四九

四月廿一日加州大聖寺藩主前田飛騨守召に應じて上京す……………四九

四月廿一日征東大總督熾仁親王江戸城に入り大總督本營を設置せらる……………四九

四月廿二日征東大總督宮諸軍戰鬪の勞なくして江戸城に入りたるを賞し且つ府下人心未だ穩やかならず之を鎮靜せしむる方策如何を各藩隊長等に諮詢せらる……………四〇

四月某日征東總督府は東國諸郡兇徒嘯集して王命を梗塞し結城地方に於て既に交戦に及ひたるを以て速に赴援すへしとの旨を津大村二藩に命し且つ我藩安場一平をして其軍を監せしむ……………四一

四月廿二日日本藩世子慶久歸藩の聽許あらは末家細川行眞を以て名代とし還幸の節供奉せしめられんことを請願す……………四二

四月某日長崎浦上村耶蘇教徒の處分を在京在坂諸侯に諮詢せらる……………四三

四月廿二日三條實美書を長岡護美に贈りて其の耶蘇教徒處分の意見に答ふ……………四四

四月廿二日本藩横井平四郎徴士參與を命せらる..... 四六五

四月廿二日津藩の兵武州杉戸に於て舊幕兵に破らる..... 四六五

四月廿三日本藩藩主慶順名を詔邦と改めたる旨を申告す..... 四六五

四月廿三日本藩末家細川利永熊本に着す..... 四六六

四月廿三日我藩保管せる江戸三番町屯營舊幕歩兵從順に歸せしを以て歩練教練の爲め先に田安家倉庫に保管を託したる銃器の返付方を交渉す..... 四六六

四月廿三日本藩世子護久及び長岡護美長崎浦上村耶蘇教徒處分に關する詰問に奉答す..... 四六六

四月某日本藩徴士溝口孤雲及び長谷川二右衛門浦上耶蘇教徒の處分に關し建白書を上る..... 四六八

四月廿三日伊達宗城書を長岡護美に贈り觀兵式舉行の節は我藩と合して隊伍を編成し式場に參列せしめん事を照會す..... 四七〇

四月廿三日伊達宗城更に書を長岡護美に贈り其の耶蘇教徒處分其他の意見に對して答ふる所あり..... 四七〇

四月廿三日先に甲州へ分遣せられし我藩兵江戸白金の藩邸に歸着す..... 四七一

四月廿三日東山道官軍宇都宮城を復す..... 四七一

四月廿四日奥羽鎮撫總督澤爲量同參謀大山格之助薩長二藩の兵を率る庄内に入り清川關門にて酒井忠篤の兵と戦ひ利あらずして退く..... 四七三

四月廿四日舊幕臣勝安房先鋒總督府に到り參謀海田武次木梨精一郎と會見して軍艦の處置方を議す..... 四七五

四月廿五日徳川慶喜の處置及び其家名相續秩祿等の事に關し在京諸侯の意見を徵せらる..... 四七五

四月廿五日慶喜の處置及び家名相續秩祿等に關し會議を開かるゝにつき來廿七日太政官代に參集すへしとの旨を諸藩貢上に達せらる..... 四七五

四月某日在京本藩重臣等徳川氏相續秩祿等の下間に對し議決せし意見を在坂重臣に通牒す..... 四七九

四月廿五日本藩隊長清水數馬等時體處理に關する大總督府の詰問に答申す..... 四八〇

四月廿五日在江戸本藩副奉行淺井新九郎關東の形勢總督府の時體處理に關する下間に對し答申せし事及び我藩兵の督府守衛を命せられたる外諸種の件を在京重臣に通報す..... 四八一

四月廿五日在坂本藩重臣は藩世子護久歸藩の遲延する事情を藩政府に詳報す..... 四八四

四月廿五日本藩軍艦總奉行溝口藏人長崎に至りて外國軍艦を見學し所感を奉行鎌田軍之助に報す..... 四八六

四月廿五日播磨安志藩主小笠原幸松丸大坂を發し上京するに際し書を長岡護美に贈り京帥に於ての再會を期す..... 四八七

四月廿五日越後榎谷藩主堀右京亮謹慎を免せらる..... 四八七

四月廿六日本藩老臣米田虎之助は藩世子護久の使命を帯ひて大坂より歸り是日熊本城内に於て一門家老等に其意を傳達す..... 四八八

四月廿六日長岡護美長崎浦上耶蘇教徒一件英國公使との談判江戸鎮臺設置及び砲隊練練天覽のことにつき伊達宗城と書翰を以て問答す..... 四八八

四月廿七日各藩貢士太政官代に於て徳川氏の處置を讀するに當り岩倉副總裁の意見書を示さる..... 四九〇

四月廿八日英國公使來月朔日行宮に朝し國書を上るへきにつき諸藩に令して豫め藩人の暴舉を嚴戒せしめらる..... 四九一

四月廿八日先鋒總督府は舊幕臣勝安房の幹旋に據りて舊幕軍艦四隻を收む..... 四九一

四月廿八日在坂本藩重臣は藩世子護久歸藩遲延の事情徳川氏處分及び耶蘇教徒の件に關して藩政府へ通報す..... 四九二

四月廿八日我藩兵井伊家邸に移り東海道先鋒總督府守衛の任に當る..... 四九三

四月廿九日石清水字佐宮崎八幡大菩薩の稱號を改めらる..... 四九三

四月廿九日美濃加納藩主永井肥前守武州川越藩主松平大和守謹慎差控等を宥免せらる..... 四九四

四月廿九日參謀西郷吉之助等德川氏處置伺の爲め今朝江戸を發して上京の途に就く…………… 四九四

四月某日東山道總督府は信州の賊徒亂暴相募り民生塗炭に苦しむを以て近境諸藩に令して之を鎮撫せしむ…………… 四九四

四月某日日本藩偵吏は探索せし北越地方の情況を報告す…………… 四九五

四月某日脱走舊幕臣等大公至正忠膽義烈の志士天兵を起して皇國の爲に賣國不義の奸賊を誅鋤すへしとの檄文を發す…………… 四九七

閏四月朔日東山道の官軍進みて日光山に通る舊幕大島圭介等支ふる能はず退きて會津境内に向ふ…………… 四九八

閏四月朔日常州矢田部藩主細川玄蕃頭上京す…………… 四九九

閏四月二日日本藩山形典次郎大坂に於て裁判所判事介、寺社掛勘定掛を命せらる…………… 四九九

閏四月二日大總督府田安慶頼に感狀を與へ大久保一翁勝安房に江戸鎮撫方を委任せらる…………… 四九九

閏四月三日徳川慶喜の處置及び家名相續秩祿等に關して意見を上陳すべく重ねて在坂諸侯に諮問せらる…………… 五〇二

閏四月四日徳川慶喜の降伏謝罪を寛宥し給ひ七日を以て還幸あらせられ且つ爾來萬機を親裁し文武を講究し給ふへき教旨を垂示せらる…………… 五〇二

閏四月四日朝廷徳川慶喜恭順謝罪を寛恕せられ更に將來の神算を垂示し公卿諸卿益々奮勵國事に盡瘁すへしとの勅諭を下さる…………… 五〇三

閏四月四日自今時機により四方へ行幸あらせらるへきを以て民力休養の爲め務めて簡便省略を旨とし給ふとの勅諭を下さる…………… 五〇四

閏四月四日法令を堅守し禮義廉耻を主とし諸家僱從者に至るまで不法の行爲なきやう嚴に戒諭すへき旨を達せらる…………… 五〇四

閏四月四日肥後國天草島の内に遠島の刑に處せられて居住せる者の有無を調査申告すへき旨を我藩に達せらる…………… 五〇五

閏四月四日長岡護美從四位下侍從に叙任せられ且つ第二軍副總督として兵を率ゐて出征すへしと命せらる…………… 五〇五

閏四月四日在坂本藩重臣は會津の賊勢強大なるに依りて應援出兵の命下らんことも計り難しとて兵隊を精選し出師の準備を整へ臨時の命に應せしむへしとの旨を藩政府に通牒す…………… 五〇六

閏四月四日日本藩世子護久徳川慶喜處分に關する諮詢に對し奉答書を提出す…………… 五〇六

閏四月某日日本藩徴士長谷川二右衛門徳川慶喜の處分家名相續等に關する下問に答申す…………… 五〇八

閏四月四日仙臺米澤二藩檄を發して奥羽諸藩の同盟を策せんとす…………… 五〇八

閏四月五日神佛混淆を廢し諸社の別當僧等還俗し神道を以て勤仕すへしとの旨を令達せらる…………… 五〇九

閏四月五日先きに發布せる制札中切支丹邪宗門禁止の令文を改めらる…………… 五〇九

閏四月五日日本藩世子護久の請暇を許可し給ふ…………… 五一二

閏四月五日本藩末家細川行眞藩世子護久の名代となりて還幸に供奉することを許可せらる…………… 五二二

閏四月五日城州淀藩主稻葉正邦の謹慎を解除し羽州庄内藩主酒井忠篤下總結城藩主水野勝知の官位を停め入京を禁せらる…………… 五二二

閏四月五日在江戸本藩副奉行淺井新九郎舊幕歩兵隊五百人を我藩に採用する事及び軍用金の件等を在京重臣に照會す…………… 五二三

閏四月五日箱館裁判所副總督清水谷公考總督に昇任す…………… 五二七

閏四月六日日本藩世子護久行在所に出頭す時に歸藩後連に庶政を改め藩屏の任務を全くすへしとの勅諭を下さる…………… 五二七

閏四月七日天皇大坂行在所を發して京都へ還幸し給ふ…………… 五二七

閏四月七日明八日大坂より還幸につき本藩に院參町西院參町の兩口を警衛すべく命せらる…………… 五二八

閏四月七日尾州藩成瀬半人正竹腰龍若紀州藩安藤飛彈守水野大炊頭水戸藩中山備中守長州藩吉川監物等藩屏に

列せられたる旨示達せらるる……………五八

閏四月七日日本藩世子護久大坂を發して歸藩の途につく……………五九

閏四月七日在坂本藩重臣は關東出張中の我藩兵を引揚げんが爲め財津民助を東下せしむるを否として之を引留  
むへしとの意を在京重臣に通牒す……………五〇

閏四月八日天皇還幸あり九門内乗馬を禁せらるる……………五〇

閏四月八日日本藩末家細川行眞藩世子護久に代り還幸に供奉して京都に至る且つ大坂にて本藩より護衛銃隊を借  
用せしを謝す……………五一

閏四月九日還幸につき在國在邑の諸侯は十日十一日の内に重臣をして天機を伺はしむべき旨を命せらるる……………五二

閏四月九日長岡護美軍防事務局補に任せられたる身の一地方の浪賊追討に出征せしめらるるを否とし第二軍總  
督には公卿中より選任せらるるへしとの意を建議す……………五二

閏四月十日長岡護美大坂を發して京都に至る……………五三

閏四月十日日本藩は舊幕旗下三淵鍵之助に寛恕の恩命降下あらむことを京都留守居役をして請願せしむ……………五三

閏四月十一日關東監察使三條實美等徳川慶喜處分及び人民綏撫の任を拜し京都を發して江戸に向ふ……………五四

閏四月十一日我藩砲隊長安田源之丞舊幕歩兵採用の使命を帯ひ去る六日江戸を發し本日京都壬生の藩邸に着し  
直に意見を重臣に陳す……………五六

四月十一日奥羽列藩の重臣等白石に會盟し會津の寛典を請ふの議を決し翌十二日仙臺米澤二藩主岩沼に至り歎  
願書を九條鎮撫總督に呈し其の採納を要請す……………五七

閏四月十二日下總結城藩主水野勝知の官位を停め且つ其の家臣と共に入京を禁する旨を達せらるる……………五八

閏四月十二日日本藩世子護久熊本に歸着す……………五八

閏四月十二日日本藩世子護久内外の政務悉く委任を受けたる旨を布達す……………五九

閏四月十三日宮堂上諸侯参内の節の従者及び服裝の制を定めらるる……………五九

四月十三日日本藩主昭邦舊名世子護久舊名改名につき藩内に同字同音の名を稱するものを改めしむ……………五〇

閏四月十四日滯京の諸侯に賜暇の恩命下り藩力を養ひて後命を待つへしとの勅諭あり……………五〇

閏四月十四日貨幣の定價金銀銅錢の通用法を定めらるる……………五〇

閏四月十四日我藩の日田天草兩地警衛を免せらるる……………五三

閏四月十四日我藩番頭大河原次郎九郎の率ゐる番上隊并に歩兵砲兵諸隊に上京を命す……………五四

閏四月十四日日本藩使者津野田儀左衛門等筑前藩に至り三條實美等大宰府に於ける警衛方及び歸京の節の便船の  
ことにつきて謝意を陳す……………五五

閏月十四日長岡護美我藩征東大隊長清水數馬等の建議に關する舊幕歩兵採用の件を否とし藩地より銃隊を召登  
すへしとの旨砲隊長安田源之丞に諭示す……………五六

閏四月十五日皇族の待遇に關して布達せらるる……………五六

閏四月十五日我藩外三藩に命し定日を立て、練兵を行はしめらるる……………五七

閏四月十六日長岡護美書を本藩征東大隊長清水數馬に與へて軍制變更の急務を述へ將上其意を奉して勉勵功を  
奏すへき旨を指示す……………五八

閏四月十六日北陸道鎮撫使參謀津田山三郎は江戸の狀況及び自己の意見を略叙し越後の片桐省介を紹介する書  
簡を京都在勤の長谷川二右衛門木村得太郎に贈る……………五九

閏四月十六日北陸道鎮撫總督高倉永祐等江戸常盤橋内營中に於て北越再進のことを決す……………五九

閏四月十七日還幸につき供奉並に留守の公卿諸侯以下に御物酒饌等を賜ふ我藩世子護久及び長岡護美又恩賜を

拜す……………五〇一

閏四月十七日切支丹信徒を列藩に分ちて保管せしめ其處置方法及び分配人員を指定せらる……………五〇四

閏四月十七日丹後峯山藩主京極主膳正謹慎を命ぜらる……………五〇七

閏四月十八日關東の殘賊を討伐せらるゝを以て更に出兵し奮戰掃蕩其功を奏すへき旨を本藩主留邦に命ぜらる……………五〇八

閏四月十八日舊幕府の令に依り管轄せし地域石高等を各藩に調査申告せしめらる……………五〇九

閏四月十八日下野佐野藩主堀田攝津守謹慎を命ぜらる……………五〇九

閏四月十八日兵庫に於て外國人に暴行を加へ逃亡せしものあり發見次第申告すへしとの旨を達せらる……………五〇九

閏四月十八日諸侯滯京五十日餘に亘るものは歸邑を許し且つ會津等賊勢益々強暴なるを以て國力を養ひ不慮の備を嚴にすへしとの旨を達せらる……………五一〇

閏四月十九日徳川氏より獻納せし軍糧の管守を我藩に命ぜらる……………五一〇

閏四月十九日財政の窮乏を救ふ爲め新に紙幣を製造して通用を十三ヶ年とし之を列藩に融通して産業を興さしむへき旨を布達せらる……………五一〇

閏四月十九日列藩に賦課して陸軍を編制すへき旨達せらる……………五一〇

閏四月十九日立花出雲守陸奥伊達郡下謹慎を命ぜらる……………五一〇

閏四月十九日宮家公卿諸侯及び社寺等領地高改正の爲め舊幕府より受封の判物を提出すへき旨示達せらる……………五一〇

閏四月十九日神職の葬祭には神式を用ふへき旨示達せらる……………五一〇

閏四月十九日列藩に令して臣子の大義を忘失するものあるを戒防せらる……………五一〇

閏四月十九日日本藩舊幕府の令に依り管轄せる地域石高の調書を民政役所に提出す……………五一〇

閏四月十九日日本藩津田山三郎書を在京長谷川二右衛門等に贈り佐渡鎮撫使參謀に轉任を命ぜられたれとも思ふ……………五一〇

所ありて退職の幹旋を乞ひ且つ北陸道鎮撫に關する意見を陳ふ……………五九八

閏四月十九日奥羽鎮撫總督九條道孝十二日の奥羽列藩敷願書を却下し仙臺米澤二藩に會津討伐を命す二藩主之に服せず更に衆議を盡して太政官に稟請せんとの旨を申告す……………五九八

閏四月十九日仙臺藩上等奥羽鎮撫總督府參謀世良修藏を福島に殺す……………五九八

閏四月廿日明日太政官代を禁中二條城に移さるゝ旨達せらる……………五九八

閏四月廿日副總裁岩倉具視輔弼中山忠能の職務を免せらる……………五九八

閏四月廿日諸寺跡山等の住職任命及び訴狀其他の取扱規定を達せらる……………五九八

閏四月廿日來廿三日車駕山陵に幸し給ふを以て長岡護美に守衛を命ぜらる……………五九八

閏四月廿日日本藩森尾龍彦海軍御用掛を命ぜらる……………五九八

閏四月廿日賊兵來りて白河城を襲ふ官軍支ふる能はず去て二本松に至る……………五九八

閏四月廿一日官政を改革して太政官を議政行政神祇會計軍務外國刑法の七官と爲し且つ府藩縣の制を定めらる……………五九八

閏四月廿一日日本藩庄村助右衛門京攝關に於ける内外の異聞を在藩機局吏坂本彦兵衛に詳報す……………五九八

閏四月廿一日日本藩安田源之丞京都より江戸に返りて復命し長岡護美の親書を大隊長清水數馬に致す……………五九八

閏四月廿二日岩倉具視右大臣に任せられ中山忠能以下二位に叙せらる……………五九八

閏四月廿二日長岡護美軍務副知事を命ぜらる……………五九八

閏四月廿二日太政官代に出勤する者の服裝に節制の外は羽織袴を着用するを許さる……………五九八

閏四月廿三日雨天につき山陵御拜の行幸を中止せらる……………五九八

閏四月廿三日親王公卿及び諸侯出行の際の從者數を更に規定せらる……………五九八

閏四月廿三日阿片禁止の令を布達せらる……………五九八

閏四月廿三日下總關宿藩内勤王佐幕の兩派相闘爭す大總督府參謀安場一平其間に周旋し勤王派の負傷者を我藩に收容す尋て總督府より勤王派の人々を我藩に保管せしめらる.....五七

閏四月廿三日日本藩遊學生井上多久馬長崎より歸藩す.....五七八

閏四月廿四日箱館裁判所を改めて箱館府と爲し總督清水谷公考を箱館府知事に任せらる.....五七八

閏四月廿四日徴兵選出及び軍資納金規定を定めらる.....五七九

閏四月廿四日日本藩政府は社家觸頭人選其他の件に關して意見を具し京都詰吏員として神祇事務局に指揮を乞はしむ.....五八〇

閏四月廿五日元京都守護職邸を以て陸軍局に宛つへき旨を達せらる.....五八一

閏四月廿五日各藩有所の軍艦及び船舶調書を提出すへしとの旨達せらる.....五八一

閏四月廿五日官軍白河城を奪還せむとして敵の伏兵に陥り大敗して背進す.....五八二

閏四月廿六日日本藩山田五次郎會計官出納司權判事を命せらる.....五八三

閏四月廿六日日本藩古庄養拙後名植野虎平太竹添進一郎等探索の命を帯ひて佐賀藩雇の汽船に便乗し横濱を發して仙臺に向ふ.....五八三

閏四月廿六日舊幕脱走林昌之介等海路沼津に至り將に甲府に迫らむとす總督府參謀安場一平急に甲府へ向ふ我藩兵之に隨行す.....五八四

閏四月廿七日日本藩は神社由緒調及び寺院に神體を勸請せるもの又は神社に佛像佛具等を備へたるものを取除く件を管内に布達す.....五八五

閏四月廿七日參與横井平四郎書を米田虎之助に與へ太政官の改革及び關東の情勢等を詳報す.....五八六

閏四月廿七日日本藩長谷川二右衛門書を下津休也萩蘇源太に贈り京坂の状況を報す.....五八七

閏四月廿七日或人書を本藩世子護久に贈り徳川慶喜の反心なき所以を述へ且つ祖先家康治安の功を擧げ寛典の恩命降下すへく幹旋盡力せられんことを請ふ.....五八九

閏四月廿八日日本藩木村得太郎日向國富高知縣事に任せらる.....五九一

閏四月廿八日徴兵四十八人以上を出す諸藩に對し其指揮官を出すへき旨を命せらる.....五九一

閏四月廿八日徴兵教授の爲め英式銃陣習得せる我藩人二名を出仕せしむへき旨命せらる.....五九二

閏四月廿八日貨幣通用の件に關し示達せらる.....五九二

閏四月廿八日日本藩徴兵選出に關し疑惑あるを以て留守居役をして指示を請はしむ.....五九二

閏四月廿八日長岡護美軍務局へ出動の際隨從兵士の休憩所建設の爲め地所借用の件留守居役をして請願せしむ.....五九三

閏四月廿八日我藩末家細川利永細川行眞共に在京兵隊なく來五月朔日迄に差出し得ざる旨を申告す.....五九四

閏四月廿八日我藩保管する所の關宿藩杉山對軒等の人名及び携へし所の物品調書を總督府に提出す.....五九四

閏四月廿八日熊本藤崎宮の社僧神護寺は同宮の神體を明日取下くる旨を申告す尋て本藩廳より指示する迄見合すへき旨を達す.....五九五

閏四月廿八日古庄養拙植野虎平太竹添進一郎等奥州東名濱に着船す仙臺藩守兵怪しみて之を拒む古庄等之を辯し遂に仙臺城下に入るを得たり.....五九六

閏四月廿九日田安龜之助をして徳川の家名を相續せしむとの勅命下る.....五九七

閏四月廿九日諸藩貢上に陸海軍制會計法及び關東運撫の三條につき意見を徵せらる.....五九八

閏四月廿九日官許を得ざる刊行書の發賣を禁せらる.....六〇〇

閏四月廿九日日本藩徴兵人員先つ五十四入を出すへき旨申告す.....六〇〇

閏四月廿九日我藩制度を改革し船方を軍備方に併合す.....六〇一



閏四月廿九日伊達宗城書を裁して長岡護美等に贈り時事に關する所見を述へ其意見を叩く……………六一

閏四月廿九日總督府參謀安場一平我藩兵を率ゐて甲州烏澤驛に至る時に舊幕脫兵黒駒驛に達すとこの報あり仍て安場參謀輕騎急馳して甲府に赴く……………六一

五月朔日大總督府參謀安場一平甲府城に各藩隊長を會し將に甲府に入らんとする舊幕脫走林昌之助等を峻拒するに決し舊幕吏中山誠一郎をして之を説諭し遂に黒駒驛より沼津へ退却せしむ……………六一

五月朔日陸軍所法度を定めたる旨を示達せらる……………六一

五月朔日日本藩徵兵五十四人名簿を添へ陸軍局に出仕せしむ……………六一

五月朔日日本藩銃陣習得者二人を陸軍局に出仕せしむ……………六一

五月朔日日本藩保管中の關宿藩上杉山對軒等其藩情を續述せし歎願書を交附せしを以て之を總督府へ進達す……………六一

五月朔日鑓に本藩に保管を命せられし關宿藩上三十人を更に藝州藩に變換の命ありしを以て同藩に交附す……………六一

五月朔日薩長大垣等の官軍襲ひて奥州白河城を抜く……………六一

五月二日我藩寺町門の警衛を免せらる……………六一

五月二日我藩老臣溝口孤雲願に依りて參與を免せられ且つ在職中勤勞の賞として大和錦印籠等を賜はる……………六一

五月二日松平確堂三河守齊氏德川龜之助の後見人となる……………六一

五月二日大總督府副督正親町公董軍兵催促の爲め京都に歸着す……………六一

五月二日參謀安場一平甲府總撫の件に關し大總督府に陳情の爲め單身江戸へ返る……………六一

五月三日舊幕旗下の上歸順せし者は朝臣に列せしむとの旨を達せらる……………六一

五月三日我藩末家細川行眞歸邑を請願して許可を受く……………六一

五月三日日本藩軍船主任を牛島五一郎に命す……………六一

五月四日天皇日に學問所に出御して政を聴き且つ文武を講し給ふへき旨を達せらる……………六一

五月四日來七日より軍務官を陸軍局へ移さるへき旨を達せらる……………六一

五月四日濱田藩主松平武聰に謹慎解除の命ありし旨を達せらる……………六一

五月五日日本藩廣田貞右衛門刑法官判事試補を命せらる……………六一

五月五日佐倉藩主堀田相模守他行禁止を解かれし旨達せらる……………六一

五月五日信濃國松代藩主眞田幸民討賊の功を賞せらる……………六一

五月六日東海道先鋒副總督柳原前光總撫使として甲府に至る……………六一

五月六日參謀安場一平我藩論の動搖するを聞き之を憂ひ大總督府に乞ひ此日江戸を發して上京す……………六一

五月七日東國の形勢益々紛擾するにつき我藩に對し急に出兵すへしとの令達あり……………六一

五月七日軍資金は自今爲替を以て上納すへしとの旨達せらる……………六一

五月七日北陸道總撫使一行江戸より海路越後國今町港に達し高田に至りて本營を置く我藩津田山三郎參謀となりて之に従ふ……………六一

五月八日朝廷用度不足して軍費給せざるの虞あり仍て資力あるものは金穀を捧けて四海平定の功を扶植すへしとの旨を達せらる……………六一

五月八日濱田藩主松平武聰に作州の内三萬七千餘石の地を管せしめらる……………六一

五月八日先きに免せられたる我藩老臣溝口孤雲京都を發して歸國の途に就く……………六一

五月八日我藩兵寺町警衛を免せられたるを以て本日徵兵と交替す……………六一

五月九日朝誦あり天皇親征の宸慮を漏し給ふ松平慶永長岡護美共に今日未だ親征の時機にあらざるを陳し議暫く止む……………六一

五月九日金札發行の期日及び丁銀豆板銀通用停止の件を布達せらる…………… 六四  
五月九日府藩縣に印鑑を製せしめ且つ社家寺院の支配を定めらる…………… 六五  
五月九日若州小濱藩主酒井忠義父子の謹慎を免除せらる…………… 六五  
五月十日豊臣秀吉在世の功を追賞し神社を建て、祭祀せしめらる…………… 六六  
五月十日癸丑以來國事に斃れし者及び伏見開戦以來王事に忠死せし者等の靈魂を祭祀すへしとの旨達せらる…………… 六六  
五月十日日向延岡藩主内藤備後守志摩鳥羽藩主稻垣平右衛門謹慎を免せらる…………… 六七  
五月十日中將西園寺公望越後國第二都督と爲り京都を發して任に赴く…………… 六八  
五月十日我藩甲府出張兵甲府頭撫府巡邏警衛を命せらる…………… 六九  
五月十一日我藩鎌田軍之助に豊後鶴崎取締兼番代を命す…………… 六九  
五月十二日長岡護美に對し速に東下し總督府に力を副へ徳川旗下の士を鎮撫すへしとの命あり…………… 七〇  
五月十二日阿波徳島藩主蜂須賀茂韶及び筑後柳河藩主立花鑑寛に命し東下して大總督府を輔翼せしめらる…………… 七〇  
五月十二日長岡護美は書を輔相岩倉具視に贈り關東鎮撫の要は速に徳川氏を處置するに在り然らずして専ら兵力を用ふる時は玉石共燒の恐ある所以を陳ふ…………… 七二  
五月十三日長岡護美は更に書を岩倉具視に贈り前書の旨趣を敷衍再設す…………… 七三  
五月十三日中津藩の江戸邸内勤王佐幕二派分争す重臣桑名登等大義を唱へて動かす佐幕黨百餘名遂に走りて上野山内に投ず…………… 七三  
五月十四日長岡護美參内す輔相岩倉具視等に對し建議の主意を上陳し採用せられす遂に小御所に於て宸翰及び御物を賜はる…………… 七三  
五月十四日長岡護美に對し重ねて速に關東へ出張すへしとの旨を諭達せらる…………… 七四

五月十四日人吉藩兵駿府城警衛を命せらる…………… 七四  
五月某日高松藩兵猿ヶ辻警衛を命せらる…………… 七五  
五月十四日豊後府内藩主大給左衛門尉三河奥殿藩主大給縫殿頭陸奥榎倉藩主松井周防守等謹慎解除ありし旨示達せらる…………… 七五  
五月十四日肥前唐津藩主小笠原佐渡守謹慎を解除せらる…………… 七五  
五月十四日舊幕旗下其他の徒輩朝旨を奉せず上野山内に屯集せるを以て誅代せらるへき旨を徳川龜之助に大總督宮より示達せらる…………… 七六  
五月十四日大總督府は上野山内に屯集せる舊幕旗下の輩を誅代すへく各藩兵隊に命令を發す…………… 七六  
五月十四日舊幕旗下の暴徒を誅代せしめらるゝに依りて動搖するなく各々安堵して業を營むへくまた亂賊を扶助するものは同罪たるへき旨を布達せらる…………… 七六  
五月十四日舊幕臣河村惠十郎上野の暴徒に降伏を勸告したれとも遂に容られず…………… 七六  
五月十五日太政官以下諸官府藩縣及び諸司の印制を定めらる…………… 七六  
五月十五日新製の紙幣を發行せらる…………… 七六  
五月十五日小笠原佐渡守外三名謹慎解除ありし旨を示達せらる…………… 七六  
五月十五日延岡藩主内藤備後守は謹慎宥免の命を蒙りたるを以て使者を遣し我藩幹旌の謝辭を述へ物品を贈る…………… 七六  
五月十五日官軍上野山内屯集の賊徒を撃掃す…………… 七六  
五月十五日輪王寺宮公現法親王上野山内を脱し北豊島郡下尾久村の農家に潜み給ふ…………… 七六  
五月十五日長岡護美故菊池武時及び故加藤清正等を祀典に列し其勳功を表彰せられむことを朝廷に建議す…………… 七六  
五月中旬下野國藤原に在陣せる大島圭介新兵を募らむと欲して若松に赴き松平容保に而して種々建議する所あり…………… 七六

り遂に意を達する能はずして藤原に歸る……………六六一

五月十六日上野の賊徒討伐の際踪跡を暗まされたる輪王寺宮を探索して届出つへしとの旨を示達せらる……………六六二

五月十七日上野の殘賊を掃討すへしとの令達あり……………六六四

五月十六日上野の殘賊掃討につき各藩の部署を指定せらる……………六六四

五月十六日上野屯集賊兵討伐に際し本藩兵の進撃方面及び負傷者等を總督府に申告す……………六六五

五月十六日上野の戦功を賞して本藩戦士に酒肴を賜ふ……………六六五

五月十六日長岡護美軍事及び國事上に關する意見を大總督府へ具陳したき旨を豫しめ輔相岩倉具視に申請す……………六六六

五月十六日豊後府内藩主大給左衛門尉は其の謹慎宥免に關し我藩在京吏員の斡旋せしを謝し物品を贈る……………六六六

五月十六日輪王寺宮下尾久村の農家を出て忍びて江戸淺草に歸り東光院に入り給ふ……………六六七

五月十七日輪王寺宮東光院を去りて市ヶ谷自證院に到り潜匿し給ふ……………六六八

五月十七日宮堂上方の名義にて金錢を貸與し貨殖を計ることを禁示せられし旨布達せらる……………六六八

五月十七日諸國街道に私に關門番所を置くを禁せらる……………六六九

五月十七日國事多事の際諸事省略すへき旨を達せらる……………六六九

五月十七日軍防局を軍務官と改めたる旨布告せらる……………六七〇

五月十七日軍資金上納には一萬石未滿の端數も計算すへき旨の令達あり……………六七〇

五月十七日江府内の殘賊悉く退散せしを以て爾後私に襲撃すへからすとの旨達せらる……………六七〇

五月十七日長岡護美早々東下して總督府に心を協せ萬幕旗下の士の鎮撫に盡力すへしとの旨に對し請書を進達す……………六七二

五月某日長岡護美關東出張中議定職心得を以て政務を處理すへき旨を命せらる……………六七二

五月十七日佐渡鎮撫使參謀津田山三郎は佐渡へ渡航を止め北陸道の參謀として勤仕すへき旨を命せらる……………六七二

五月十七日毛利敬親上京の途次大坂に到る……………六七二

五月十八日先き上野山内攻撃に参加せし各藩兵隊の觀兵式を行はせらるゝ旨大總督府よりの令達あり……………六七三

五月十八日我藩各處に派遣せしめたる兵員數調書を軍務局に提出す……………六七三

五月十八日奥羽鎮撫總督九條道孝陣營を秋田に轉せんと欲して仙臺を發す……………六七四

五月十八日本藩小笠原美濃下津休也に財政改革を委任す……………六七五

五月十九日我藩兵白川城應援として出征を命せらる適々兵食缺乏して困憊せるを以て之を辭す……………六七五

五月十九日我藩砲隊長安田源之丞甲府に在りて鎮撫使附屬となり掛川藩兵を督して八王寺へ出張を命せらる……………六七六

五月十九日本藩京都留守居役内山又助をして金札借用願を提出せしむ……………六七七

五月十九日伊達宗城は書を長岡護美に致して意見の交換を需む……………六七七

五月十九日官軍越後國長岡城を抜く……………六七八

五月廿日本藩兵大和鎮臺守衛を免せらる……………六七九

五月廿日本藩軍資金上納期に至り故ありて果さず仍て猶豫請願書を提出す……………六七九

五月廿日本藩世子護久議定職を免せられ且つ上京を促かさる……………六八〇

五月廿日參與横井平四郎從四位下に叙せられたる旨を郷里の友人に報す……………六八一

五月廿日本藩安田源之丞我大砲隊に離れ掛川藩兵を督して八王寺へ出張す……………六八二

五月廿日肥後藩兵甲府城警衛の爲め京師を發す……………六八二

五月廿日林忠崇兵を率ゐて箱根を侵し小田原藩の兵を追ふ等て戦利あらず海に航して陸奥に逃る……………六八二

五月廿一日江戸上野山内の徒誅伐の報昨日京都に達したるを以て諸藩に對し勉勵協力平定の功を奏すへき旨を……………六八二

達せらる..... 六八三

五月廿一日我藩兵の大坂に在るものを關東へ急派すへき旨長岡護美に命せられ且つ軍旗一流を下賜せらる..... 六八四

五月廿一日松平慶永其臣松平貫之助水野小刑部をして參與横井平四郎を訪ひ關東の事を探らしめ且つ書を岩倉具視に贈りて意見を陳す..... 六八五

五月廿一日松平慶永は我藩安場一平が關東の事情を齎し京都に來たりしを聞き所感を略叙し之を長岡護美に致す..... 六八六

五月廿一日長崎府浦上村の耶蘇教徒百十四人を捕ふ..... 六八七

五月廿二日上野山内の賊徒既に掃蕩せられしかと猶ほ各地不穩の狀あるを以て各藩更に兵備を嚴にして出兵の命を待つへき旨を達せらる..... 六八八

五月廿二日本藩廣田貞右衛門願に依りて刑法官判事試補を免せらる..... 六八九

五月廿二日長岡護美は自己の決心及び軍令を本藩出征隊長等に示す..... 六八九

五月廿三日來廿五日補正成の祭典を執行せらるゝ旨の達あり..... 六九〇

五月廿三日丹後宮津藩主本莊宗秀等宥恕の恩命あり..... 六九一

五月廿四日徳川龜之助を駿河國府中城主に封し一橋田安兩家を藩屏に列せられ且つ上京を命せらる..... 六九二

五月廿四日萬石以下の領地並に寺社領の所屬を定めらる..... 六九三

五月某日軍兵催促の爲め上京中なりし大總督府副督正親町公董關東へ下る..... 六九三

五月廿四日長岡護美京都を發して大坂に到る..... 六九三

五月廿四日辦事役所に於て中川大炊より輔相岩倉具視の我藩世子護久に與ふる親書を留守居内山又助に交付す..... 六九五

五月廿四日參與横井平四郎禁中玉座及び議定參與等出仕の狀を在熊の家族に通報す..... 六九五

五月廿四日甲府出張中の我藩兵隊任務を終りて江戸へ歸る..... 六九六

五月廿五日徳川龜之助に駿河國を下賜せられたるにつき同國元領主等に所替の準備すへき旨を命せらる..... 六九六

五月廿五日日本藩米田虎之助沼田勘解由に備組受持の交替を命し且つ虎之助に征東軍總帥を命す..... 六九七

五月廿五日輪王寺宮舊幕軍艦に搭乘して奥州へ渡航すへき品川灣を抜鑄せしめ給ふ..... 六九七

五月廿五日先きに奥羽方面探索の使命を帯ひて出張せし本藩古庄養拙植野虎平太竹添進一郎等仙臺に在ること數句此日仙臺を發して江戸へ還る..... 七〇〇

五月廿六日賊兵來りて奥州白河城を襲ふ官軍防戦甚勉め遂に夜を徹し翌日之を撃退す..... 七〇一

五月廿七日日本藩世子護久及び長岡護美等の俸給四月支拂殘額半月分を支給せらる..... 七〇三

五月廿七日在京本藩老臣尾藤金左衛門は長岡護美の征東につき従軍を命したる人名を在藩老臣に通報す..... 七〇四

五月廿七日我藩津田山三郎北陸道鎮撫使參謀を免せらる..... 七〇六

五月廿八日仙臺米澤二藩の京都館邸を沒收し且つ二藩人の入京を禁せらる..... 七〇六

五月廿八日輔相岩倉具視は大坂長岡護美に答書を贈り其の東下を促し且つ北地の事情を通報す..... 七〇七

五月廿八日本藩征東軍總帥米田虎之助熊本を發して東上す..... 七〇八

五月廿九日我藩先鋒隊を至急關東へ派遣すへき旨軍務官より更に令達せらる..... 七〇八

五月晦日舊幕臣高家以下の稱號を廢し資格を定められたる旨布達せらる..... 七〇九

五月晦日諸藩に公務人を置き其職務權限を定めたる旨を示達し且つ貢上の對策條件を指示せらる..... 七二〇

五月晦日我藩上野山内賊徒討伐の顛末を軍務官に具申す..... 七二一

五月晦日正月以來國事に殉せし者の祭典を行はせらるゝにつき其の死亡の月日姓名等を調査報告すへき旨示達せらる..... 七二二

五月晦日本藩軍資金上納之件先きに淀川洪水に依つて猶豫せられしもの既に川明きたるを以て速に上納すべき旨を達せらる……………七二四

五月晦日伊達宗城書を長岡護美に贈り其の上野戦況を報したるを謝す……………七二四

五月某日酒井忠績舊誼を重し徳川氏の臣僚たらんことを大總督府へ情願す……………七二五

六月朔日奥州白河城の官軍出て、賊兵を撃拂せんとし伏兵に陥りて敗れ還る……………七二六

六月某日本藩古庄養拙植野虎平太竹添進一郎仙臺より江戸に返り奥羽列藩の戦氣あるを告ぐ奉行淺井新九郎之を諭せとも聽かず依て歸藩して關東の情勢を報告せしむ……………七二八

六月二日我藩征東軍總師米田虎之助大坂に到る……………七三〇

六月三日奥羽鎮撫總督九條道孝郡山を發して盛岡に入る……………七三〇

六月四日我藩米田虎之助京都に至る……………七三二

六月四日關宿藩主久世暉岐守は藩臣派を立て黨争紛亂せしを以て統治不能の責を負ひて大總督府へ謝罪歎願す……………七三三

六月五日米田虎之助輔相岩倉具視に謁し本藩勤王の誠意あるところを陳辯す且つ軍旗肩章を賜り大坂へ下る……………七三三

六月六日米田虎之助大坂に返り京都の事情を長岡護美に復命す時に藩士中征東に異議を唱へ米田等を苦しむるものあり……………七三五

六月六日賊徒各地に出没するを以て諸藩兵に命し勦討せしめらる……………七三七

六月六日姫路藩主酒井直之助上京す……………七三八

六月七日先きに發布せられたる大赦令未だ關東地方に普及せざるを以て速に施行すへき旨重ねて布達せらる……………七三八

六月七日列藩封地に於て兵士を編制し臨機令に應ずへしとの旨を達せらる……………七三九

六月七日輪王寺宮會津に到り給ふ……………七三九

六月七日日本藩の納入すへき軍資金年額の三分の一金五千四百兩を陸軍局に提出す……………七四〇

六月七日我藩征東軍總師米田虎之助中老尾藤金左衛門は大坂より書を在藩老臣に贈り奉行一人上坂せしむることと藩世子護久急速上京のこと及び軍資金送致の事を懇請す……………七四二

六月八日公務人任擧の件及び貢士對策督責の件を達せらる……………七四三

六月八日長岡護美は大坂より書を在藩老臣に與へ出陣準備其他關東の事情及び藩臣益田藤彦處分の件を垂示す……………七四三

六月八日米田虎之助尾藤金左衛門は藩世子護久上京のこと及び其隨從兵隊のこと等につき重ねて在藩老臣に照會す……………七四五

六月九日本藩世子護久弟長岡護美に書を與へ藩内異論者ありて一致を缺き且つ出陣遅延につきて苦心の情を告ぐ……………七四六

六月九日薩藩主島津忠義京師を發して國に歸る……………七四七

六月某日薩藩島津伊勢白河口應援として兵を率る京師を發す……………七四七

六月十日暗殺者取締に關し重て嚴達せらる……………七四七

六月十日衣服の制度設定に關し意見上言すへき旨在京諸侯及び貢士に達せらる……………七四八

六月十日正親町公董奥羽追討總督を命せられ鷲尾隆聚大總督府參謀と爲り白河口出張を命せらる……………七四九

六月十日本藩安場一平江戸より大坂に至る……………七四九

六月十一日本藩植野虎平太古庄養拙等江戸より大坂に至る翌日急命を帯ひて歸國の途に就く……………七五〇

六月十二日官軍白河口に於て大に東軍を破る……………七五〇

六月十三日本藩留守居をして公務人任擧及び貢士對策の件に關し具申せしむ……………七五二

六月十三日奥州棚倉藩主阿部正靜家臣の入京を禁し其藩邸を沒收せられし旨布告せらる……………七五二

六月十三日奥州二本松藩主丹羽長國警城平藩主安藤信正中村藩主相馬季胤三春藩主秋田映季等家臣の京師に在る者該藩邸に禁足せしめられし旨の示達あり…………… 五三

六月十三日日本藩主昭邦書を弟長岡護美に贈り朝廷の基本確立し關東の處置至公にして天下の人心を一定せしむへく邦家の爲めに盡瘁せよとの意を致す…………… 五三

六月十三日日本藩京都留守居助勤林新九郎等上國の形勢報告の爲めに歸藩し本日熊本に着す…………… 五三

六月十四日日本藩野々口又三郎後名志爲書を在長崎嘉悦市之進房に贈り熊本の事情及び京師關東の光景を報す…………… 五三

六月十四日兵部卿嘉彰親王を會津征討越後口總督に任せらる…………… 五三

六月十四日肥前藩の兵二百餘翌日阿波藩の兵四百餘共に白河口應援として江戸を發す…………… 五三

六月十五日我藩々政を改革するは富強の本を立て人民を撫育して藩屏の任を全くせむが爲めなれば舊慣を脱して改革の成功を期すへしとの旨を諭す…………… 五三

六月十五日大坂に於て本藩兼坂熊四郎水橋亥熊に朝廷購入の軍艦に乘組み北海道へ回航すへき旨を命す…………… 五二

六月十六日蜂須賀茂韶は長岡護美の書に答へ益々戮力王事に盡瘁すへき旨を報す…………… 五二

六月十六日日本藩津田山三郎越後より返り大坂に至る長岡護美關東出張の隨從を命し且つ奉行の任を兼務せしむ…………… 五二

六月十六日官軍薩州大村佐海路常陸平沼港に到り上陸して直に賊徒と交戦す…………… 五二

六月十八日日本藩舊來の軍制を改革す…………… 五二

六月十九日朝廷佐竹義亮津輕承昭南部利剛の孤忠を賞し王事に勤めしめらる…………… 五二

六月十九日楠神社創建につき寄附手續の件を達せらる…………… 五二

六月十九日在大坂本藩米田虎之助は吏員松本彦作の歸熊に託し其決心及び藩邸内異論者に対する處置の件等を在藩重臣へ傳達せしむ…………… 五二

六月某日大總督府參謀西四辻公業江戸より京師に至り奥羽の戦況を報告す…………… 五九

六月某日參與木戸準一郎關東親征に關し該地方情況視察の爲め東下す…………… 五九

六月廿日上總領野藩主保科正忠謹慎解除の旨示達せらる…………… 五〇

六月廿日徳川慶喜征討の榜示を除去せらる旨の令達あり…………… 五〇

六月廿日我藩汽船に長州兵を搭載して越後へ廻航すへき旨の令達あり…………… 五一

六月廿日曩に保管を命せられたる長崎の切支丹宗徒の受取人は更に沙汰あるまで出張せしむるに及はすとの旨を達せらる…………… 五一

六月廿日紙幣融通に關し姦商の取締を嚴にすへき旨を達せらる…………… 五一

六月廿日長岡護美徴士津田山三郎が佐渡參謀たるを免せられ自ら率ゐて東下せんことを請願す…………… 五三

六月廿日日本藩井上多久馬に長崎遊學を命し外交生の用務をも兼ねしむ…………… 五三

六月廿二日日本願寺に命し北國の門徒を殺撫せしめらる…………… 五三

六月廿二日野々口又三郎熊本より書を在長崎嘉悦市之進に贈り古莊養拙竹添進一郎植野虎平太歸熊して關東の事情を報告せしより藩論或は一變せんかとの意を致す…………… 五三

六月廿三日會津征討越後口總督嘉彰親王兵一千餘を率ゐて發向せらる…………… 五三

六月廿三日日本藩願に依りて金札五萬兩を貸與せらる…………… 五三

六月廿三日諸藩在京在藩兵員及び近畿關門守衛の兵員等を調査し軍務官に申告すへしとの旨を達せらる…………… 五〇

六月廿三日日本藩征東軍總帥米田虎之助米國汽船に搭乘して大坂を發し關東へ向ふ…………… 七一

六月廿三日我藩老臣等は先きに上坂せし下津休也に書を與へ藩内議論沸騰し且つ關東の情報區々にして疑惑の點あれは着坂の上確實に通報せよとの意を致す…………… 七一

六月廿四日各宮家の復節につき事務を定めて諸國末寺を支配せしめらる…………… 七三

六月廿四日白河口官軍柵倉城を抜く…………… 七四

六月廿四日山崎主税助外二名藩屏に列せらるゝ旨の示達あり…………… 七四

六月廿四日柳河藩主立花鑑寛は長岡護美の關東へ出發豫報及び藩兵上着の件を問ひたるに對して答書を贈る…………… 七五

六月廿四日野々口又三郎更に書を在長崎嘉悦市之進に與へ熊本にて議論紛興して藩の方針容易に確定せず或は一事變を生せんかとの意を致す…………… 七五

六月廿五日日本藩公務人代内山又助は輔相岩倉具視に面謁し藩世子護久の答書を致して我藩の情況を報告し且つ佐渡參謀津田山三郎辭職聽許の件を促す…………… 七六

六月廿五日日本藩征東軍總帥米田虎之助江戸に至る…………… 七六

六月廿五日日本藩徴士佐渡參謀津田山三郎の職を免し其勤勞に對して賞賜せらる…………… 七六

六月某日越前藩老臣本多興之助兵を奉りて越後口に向ふ…………… 七六

六月廿七日來一日日蝕により參賀を止むべき旨を達せらる…………… 七六

六月廿七日日本藩汽船凌雲丸の北海航を止めて我藩兵を江戸に廻送すへしとの命あり…………… 七六

六月廿七日日本藩森尾龍彦海軍御用掛を免せらる…………… 七六

六月廿七日日本藩主昭邦奥羽列藩を征討せむか爲めに軍資金を外邦に借るは國體を汚損する所以なるにより朝廷に建白すへしとの意を老臣以下に諭達す…………… 七六

六月廿八日東北諸道出征軍への通信不便なるを以て毎月二度官使を差遣すへしとの旨を達せらる…………… 七六

六月廿八日軍務官判事吉井幸輔軍監兼坂熊四郎等攝津艦に搭乘して越後國柏崎港に入る…………… 七六

六月廿九日關東の戦い慰勞として勅使派遣の旨を布達せらる…………… 七六

六月廿九日長岡護美大坂天保山沖を發艦して江戸に赴く…………… 七三

六月廿九日日本藩在京在坂及び近畿關門守衛の兵員調査を提出す…………… 七六

六月廿九日奥羽追討軍攻めて湯長谷城を抜く…………… 七六

六月某日長崎裁判所を長崎知府と改められたれとも當府支配地限のものは裁判所と唱へ他方へ提出すへき書類には長崎府と認むべき旨を達せらる…………… 七六

六月某日長崎本興善町唐通事會所に學館を開設し各藩の有志并に地役人の子弟を入學せしむべき旨嚴達せらる…………… 七六

六月某日參與副島二郎大浦基督教徒再發につき京都を發して長崎に赴く…………… 七六

六月某日仙臺藩主伊達慶邦時勢を憤慨し奥羽列藩と盟約して義兵を擧げ君側の姦を除き皇國を無窮に維持すへしとの意を藩内に布達す…………… 七六

七月朔日九條澤奥羽鎮撫兩總督秋田城下に至り藩學明德館に舍す…………… 七六

七月朔日參與大久保一藏江戸に到る…………… 七六

七月某日舊幕脫走林昌之助忠等汽船に乗り奥羽地方に出沒す…………… 七六

七月二日我藩の幹旋に依り謹慎を免されたる舊幕旗下三淵縫殿助元使番千二百石 六月廿九日着京せし旨我公務人代内山又助より申告す…………… 七六

七月三日各藩諸道へ出兵の人員地名等を調査報告すへしとの旨を達せらる…………… 七六

七月三日日本藩機局吏北野角太郎江戸より府下及び奥羽の狀勢を在藩同僚に通報す…………… 七六

七月四日奥羽北越鎮定を期とし諸藩の艦船を借用せらるゝにつき速に大坂兵庫兩港に廻航すへしとの旨を達せらる…………… 七六

七月四日日本藩機局吏鹿子木大太郎京都藩邸内の事情を在藩同僚に内報す…………… 七六

七月四日日本藩下津休也京都に到り藩世子護久上京の件及び諸種の事情につき在藩老臣に通報す…………… 五八

七月四日秋田藩は仙臺藩使者志茂又左衛門等を殺して庄内征討軍の先鋒たらむことを請ふ…………… 八六

七月五日奥羽追討總督正親町公董の平潟出張を免し四條隆調を仙臺追討總督として出張せしめらる…………… 八八

七月五日鍋島閑叟京都を發し歸國の途に就く…………… 八九

七月六日來る十日十一日の兩日當春以來戰死せし者の祭典を施行する旨の示達あり…………… 八九

七月六日勅使平松時厚戦士慰勞の爲め京師を發して奥羽に赴く…………… 九〇

七月六日我藩關東出征軍の宿泊料支出の件に關し疑義を生して稟申す…………… 九〇

七月六日日本藩長岡護美の關東出張に隨從する兵隊陸行者の鑑札に軍務官の檢印を請ふ…………… 九二

七月八日敦賀軍務官出張所を設け運輸の便を聞かす…………… 九三

七月八日老養の典を定めらる…………… 九三

七月八日日本藩公務人代内山又助は我藩王生邸に滞在し居たる谷田部藩主細川玄蕃頭昨日出發歸藩せし旨を申告す…………… 九三

七月八日前東海道先鋒兼撫使總督橋本實梁關東より歸京せしにつき我藩より隨從を命し居たる淺香市太郎等數人を返し且つ其長途の勤勞を謝す…………… 九三

七月九日我藩汽船に奥州廻航を命せらる…………… 九四

七月九日大總督府參謀鷲尾隆聚に奥羽追討白河口總督を命せらる…………… 九四

七月九日長岡護美江戸に至り白金の本藩邸に入る…………… 九四

七月九日前幕府外國奉行水野癡雲病みて卒す…………… 九五

七月十日徳川龜之助家の願に依りて水戸に在る慶喜を駿府へ移轉せしめらる…………… 九五

七月十日駿河國を徳川龜之助に下賜せられたるにより舊領主等に對し引渡すへき旨を令達せらる…………… 九六

七月十日舊幕臣不逞輩の蠢動を取締るべく徳川藩に命せらる…………… 九七

七月十日各驛に於ける出征兵士の賄方及び荷道人馬遣高制限に關し布達せらる…………… 九八

七月十日本藩偵吏宮部豐記永田貞助奥羽の形勢を探りて之を報告す…………… 九八

七月十一日本藩近藤信之助諸侯の動靜各地の形勢等を探りて之を報告す…………… 九八

七月十一日江戸に於て本藩備頭清水數馬が引卒する一番隊に交替歸藩を命す…………… 九九

七月十一日本藩汽船凌雲丸の御用を免し歸坂の節官兵の便乗を命せらる…………… 九九

七月十二日本藩汽船凌雲丸歸坂の節官兵の便乗を免せられんことを願ふ…………… 九九

七月十二日本藩醫員内藤泰吉軍務官病院局長を命せらる…………… 九九

七月十二日本藩出征軍の人員及び地名等の調書を提出す…………… 九九

七月十二日本藩津田山三郎は長岡護美の始めて登營せし狀況江戸藩邸内の事情及び本藩汽船使用罷免等の件につき在京下津休也に通報す…………… 九九

七月十二日本藩偵吏某京都に於て薩藩海江田武次より聞きたる奥羽北越の情況を報告す…………… 九九

七月十二日本藩政府は書を上京中の奉行下津休也に與へ藩内改革に關して議論沸騰し且つ會計事務の整理上必要なるを以て急き使命を調へて歸藩すへしとの旨を報す…………… 九九

七月十三日本藩政府は奥羽に對する寛大の處置及び藩世子護久の上京猶豫を願ふ爲め專使を發すとの旨を在京下津休也に豫報す…………… 九九

七月十三日官軍警城平城を抜く…………… 九九

七月十四日大坂を開港場と改めらるゝ旨示達せらる…………… 九九



- 七月十六日長岡護美白金の我藩邸より吳服橋内戸田邸に移轉す……………八四二
- 七月十七日長岡護美本藩征東軍總帥米田虎之助に對し奥羽白河口へ出征すへき旨を内示す……………八四二
- 七月十八日菊池氏の裔日向米良の領主米良主膳舊姓に復す……………八四二
- 七月十八日刑法官を閑院殿へ移轉せらる……………八四三
- 七月十八日徳川慶喜駿府へ移轉を命せられたる旨大總督府使番よりの示達あり……………八四三
- 七月十八日本藩有吉將監を家老に復職せしむ此の日家老小笠原美濃辭表を提出す……………八四四
- 七月某日本藩士澤村脩藏時弊を條陳し吏員の陟黜を行ひ朝廷と存亡を共にするの國是を定め人心を一致し諸政改革の實績を擧げんことを藩政府に建議す……………八四七
- 七月十九日江戸を以て東京と爲し更に鎮將府を設置する旨を示達せらる……………八四九
- 七月十九日長岡護美の建議に依り我藩にて菊池加藤二氏を祭祀すへき旨を達せらる……………八五二
- 七月十九日我藩征東軍總帥米田虎之助來廿三日東京を發し岩城平の城に向ふに決す……………八五三
- 七月十九日徳川慶喜水戸を發し海路駿河に移る……………八五三
- 七月廿日仙臺追討總督四條隆謨東京を發し海路平潟口へ出張す此日我藩並に津大村三藩兵に奥洲派遣を命せらる……………八五三
- 七月廿日河東操練場に於て來廿三日護良親王の祭典を舉行せらる旨を達せらる……………八五四
- 七月廿日我藩偵吏近藤信之助京地に於て探知せし朝廷の事情各藩主の動靜を報告す……………八五五
- 七月廿七日是日より八月初旬に及び外國船二艘を雇ひ長崎より全府兵振遠隊並に大村外五藩の兵を北國に輸送す……………八五七
- 七月廿一日本藩兵奥州出張の節神龍丸に乗船すへき旨を命せらる……………八五七
- 七月廿二日脱走人捕縛の爲め高輪泉岳寺へ我藩兵を派出すへき旨を命せらる……………八五八

- 七月廿二日阿蘇大宮司惟治祖先以來の忠誠を勳賞せらる……………八五八
- 七月廿二日元田八右衛門熊本より書を米田虎之助に贈り藩内議論沸騰して政變を生せしこと及び自己の心事を詳報す……………八五九
- 七月廿三日百姓町人等の宮堂上方用建館入など、稱し權勢を振ふものあるを嚴に取締るへく重ねて布達せらる……………八六三
- 七月廿三日昨日泉岳寺へ出張せし我藩兵に引揚を命せらる……………八六三
- 七月廿三日警城小名濱に碇船中の我藩汽船萬里丸に對し急き東京海灣へ赴き兵隊を搭載して直に歸航すへき旨を命せらる……………八六四
- 七月廿三日本藩兼坂熊四郎越後國柏崎本營に於て攝津艦指揮役を命せらる……………八六四
- 七月廿三日本藩兵奥州出征軍發途の旨を惣督府に申告す……………八六四
- 七月廿三日本藩奥州出征軍に關する砲器彈藥等の調書を總督府に提出す……………八六五
- 七月廿三日東京在留の本藩兵數調書を總督府に提出す……………八六六
- 七月廿三日會計官の示達に基き我藩及び肥後豊後觸下十藩の祿高住所調書を提出す……………八六六
- 七月廿三日立花出雲寺奥州伊達郡下使者を熊本に遣し家族を三池に移したるを以て隣交の誼を厚くせむことを請ふ……………八六八
- 七月廿四日本藩關八郎助は神奈川警衛隊々長を永田條之助は鎮臺應接方を命せらる……………八六八
- 七月廿四日本藩兵隊東京を發して奥州に向ふ……………八六九
- 七月廿五日本藩兵惣帥米田虎之助奉行以下の吏目を従へ東京を發して奥州に向ふ……………八六九
- 七月廿五日本藩汽船凌雲丸の大坂に着せし趣を軍務官に申告す……………八七一
- 七月廿五日本藩汽船に柳河藩兵を搭載して東京へ航すへき旨の令達あり……………八七一

- 七月廿五日本藩世子護久上京に際し採用すへき我汽船を官用に徴收せられしを以て暫時上京を猶豫せられむことを請願す……………八七一
- 七月廿五日賊軍越後長岡城を來襲す官軍城を棄て、關原に退く……………八七三
- 七月廿五日北海を回航せし官軍越後大夫濱及び松ヶ崎の二港に着船上陸す新發田藩歸順して官軍を迎へ先鋒となる……………八七四
- 七月廿五日在東京本藩重臣等長岡護美領將府に出勤の事藩兵の奥州へ出征せし事及び奥羽の戦況等を大坂熊本の同僚に通報す……………八七六
- 七月廿六日會津征討越後口總督府參謀長岡開城を報して援兵増派のことを軍務官に請ふ……………八七六
- 七月廿七日本藩重臣溝口藏人は京都に同小笠原一學は東京に使用する爲め各藩議決定書を携へて共に熊本を發す……………八七九
- 七月廿七日官軍攝津丁卯二艦新潟海邊の賊砲臺と砲火を交ふ……………八八〇
- 七月廿八日通用停止の丁銀豆板銀等買收の代償に關する希望を日を期して申告せしめらる……………八八一
- 七月廿八日大坂鐵山局にて山出金銀銅等總て買收すへき旨を布達せらる……………八八一
- 七月廿八日本藩征討軍總帥米田虎之助常陸國片倉に至る時に征討軍の前進方面につきて令達を受く……………八八一
- 七月廿八日我藩所有の艦船調書を軍務官に提出す……………八八二
- 七月廿八日本藩公務人代内山又助全目附役中山源次右衛門調名左次岩倉邸に至り我藩紛擾の内情を陳し藩世子護久上京の猶豫を請ひ遂に我藩所有の汽船を官に使用せらる、期間中の猶豫を得たり……………八八四
- 七月廿八日肥前藩老臣鍋島上總兵を率ゐて羽州久保田に至り奥州追討軍に賜ふところの感狀及び金を傳達す……………八八六
- 七月廿八日三春城主秋田映季歸順す……………八八八
- 七月廿八日軍防事務官判事吉井幸輔越後口關原より書を東都總督府に在る大村益次郎に贈り新發田藩兵を歸藩……………

- せしめむことを請求す……………八八九
- 七月廿九日大總督宮明八月朔日を以て因州藩邸へ轉營あるへき旨を達せらる……………八八九
- 七月廿九日我藩奥州出征軍の一部隊東京に到着せしを以て惣督府に申告す……………八九〇
- 七月廿九日我藩奥州出征軍總帥米田虎之助進みて水戸に至る……………八九一
- 七月廿九日本藩末家細川利永居館を肥後の國玉名郡高瀬に定む後高瀬藩と稱す……………八九一
- 七月廿九日官軍新潟を平定す……………八九二
- 七月廿九日官軍再び長岡城を抜く……………八九五
- 七月廿九日官軍二本松福島二城を抜く然して兵數寡少爲めに福島城を去て二本松を守る……………八九七
- 七月某日米價騰貴して諸民困窮に陥らむことを察し府縣の吏員は豫防策を講究して建議すへしとの旨を達せらる……………八九八
- 七月某日仙臺追討總督府は天兵に反抗せし諸侯も悔悟歸順せは寛恕せらるへく農商等は關係なければ各安堵して家業を營むへき旨を達す……………八九九
- 七月某日仙臺追討總督府は賊兵の爲めに燒失せられ或は亂妨せられたる村々には今秋の租税を全免し或は半減すへき旨を達す……………九〇〇

改訂肥後藩國事史料 卷八目次終

改訂 肥後藩國事史料 卷八

明治元<sup>戊辰</sup>年正月十九日我藩兵士の東海道鎮撫總督に隨ひ桑名へ進軍するものに對し軍規風規を嚴守すへき旨を令す

〔一新録自筆狀〕

（明治元年辰正月桑名出張之節同廿日水口驛より之來簡之内）  
今度出張之儀之諸藩一同之行軍ニ而愈以御國威相輝キ候様との儀之一統申迄茂無之候得共小者躰之内ニハ無辨之者も有之間ニ之苛察之仕方等爲有之様子ニ相聞第一御外聞ニ係候事ニ付兩躰之家來小者ハ申ニ不及自他之無差別口論ケ間敷儀且宿驛村々等之勿論於何方も亂妨躰之儀無之様主人々々より屹々示方有之候様此段御物頭并副士に御通達御組且澤村八之進組出張之面々に茂可被有御達候以上

正月十九日

永屋猪兵衛

下津縫殿殿

右之通一統に及達候事

正月十九日日本藩備頭清水數馬が引率せる藩兵一大隊今明兩日に亘りて京都に到着す

〔溝口孤雲羈旅中勤勞稜書〕

一御國より被差登候一大隊人數十九日廿日追々ニ着京隊長清水數馬

〔一新録自筆狀〕

(正月廿日發溝口三宅兩人より通報の稟書)  
同廿日

一 一番手御人數昨夜今朝ニ懸追々ニ致着候事

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數 從元治元年 至明治元年二月 坂本彦衛調の内)  
同月(正)廿日

一去ル三日以來京攝間變動ノ飛報國許へ相達一番手備頭清水數馬以下急速出發昨今追々京着此人數七百内外ト云今ニ  
いたり不詳(今とは明治十年十  
二月のことなり)

正月十九日日本藩溝口孤雲津田山三郎先に備前藩士の外國人殺害に關する償金談判の不調につき  
外交事務總督より詰問せられたるに答ふ

〔一新録自筆狀〕

(正月廿日發溝口三宅兩人より通報の稟書)

同十九日

一 今夜四時分孤雲井津田山三郎大政館官カ本ノマより御呼出ニ付罷出候處宇和島老侯且後藤象次郎杯も兵庫より歸京夷人殺害之一  
條償金之談判整兼下手人差出之方ニ相決候段御下問ニ付存寄無之旨申達候事

但初發行列を切候夷人を致殺害候處傍ニ居候夷人とも遁去候間夫を追懸灼發是ニ因而も死傷有之其末英館へ大炮も  
打込候由全縣備之今日ニいたり候而も攘夷國論之由也

正月某日我藩長崎警衛として物頭二人輕卒四十人を出張せしむ

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數 從元治元年 至明治元年二月 坂本彦衛調の内)

同月(元年  
正月)

一 長崎爲警衛物頭二人足輕四十人至急出張

正月十九日徳川慶喜萬石以上の大名及び交代寄合を營中に招きて自己恭順の誠意徹上に關する  
盡力を依頼す我藩留守居澤村脩藏は老中板倉勝靜等に對し今日に及びては兵端の開けたる所以  
を明瞭に辯解せずしては謝罪の道立ち難しと進言せしにより板倉等は關門行違之始末書を澤村  
に交付したり

〔關應三年正月より  
江戸返達御用狀扣〕

大目付様御廻狀并御覺書寫

酒井雅樂頭殿御覺書寫一通相達候間被得其意無遅滞早々順達留より戸川伊豆守方に可被相返候以上

正月十八日

大目付

松平陸奥守殿 細川越中守殿 上杉彈正大弼殿

松平備前守殿 松平肥前守殿 亀井隱岐守殿

右留守居

覺

在府 万石以上

同 交 替 寄 合

右明十九日四時西丸に罷出候様可被達候尤病氣幼少并在邑之面々者重役罷出候様可被達候事

正月十八日

〔密書輯書〕

自著子爵細川利永履歴大略

一慶應四年正月十九日達ニ付登城西丸仮殿休息所請カ、ニ於テ慶喜公ニ調ス上段近ク招キ親ク諭示セラレタリ此時迄モ柳席諸侯上意ト稱

此時十人ニハ過サリシ交代寄合共二十七名ナリ相濟テ退引落涙止メ兼タリ

右ノ節示サレタル柳席ニ退キテ銘々覺ヘタル廉ヲ誌シ左ノ通ノ論ナリ

此度京攝騷擾關門行違ヨリ事起リ候事情ハ一同承知ノ通有之候處朝敵ノ名ヲ申唱候哉ニモ灰カニ相聞ヘ何分右様ニ相成候テハ誠意モ届兼殘念心痛ノ至此上猶更誠意恭順ノ道ヲ以行違ノ儀幾重ニモ申上候心得斯ク形勢ニ立至候モ全ク不肖薄徳ノ致所祖宗ヘ對シ實ニ申譯無之ニ二百年來一同ニモ盡力致吳候段ハ満足ニ存候此上共ニ盡力致吳候様何分ニモ頼ム

〔一新録自筆狀、江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

慶應三年正月より  
昨十九日申談儀有之候間在國在邑之面々ハ重役之家來登人宛西丸に罷出候様大目附より御通達有之候ニ付私罷出候處於御座間御休息所内府公御直ト御目通被仰付被仰聞候御意之趣方今時體之儀一同にも追々承知相成且相達候筋茂有之候通近年失體之事而已多且宇内之形勢國內之情實洞察いたし候處此儘ニ而之何分皇國之御爲ニ相成不申事と存し祖宗以來繼承之政權茂奉歸 朝廷萬事天下之公議を盡し奉保護 朝廷候心得ニ而猶將軍職茂奉辭罷在候處舊臘九日盡天下公議候と申筋ニも無之如是大御變革被仰出何分旗下之者共鎖撫方致心配候付一ト先煎靜之爲下阪いたし居候處尾張大

納言松平大藏大輔を以上洛可致旨再應御内諭を蒙り候付當月三日上洛可致と先供之者關門迄罷越候處無據行違より兵端相聞はのかニ承れハ其後朝敵杯と申唱有之候山左候而之從來誠意を以奉事 朝廷候素意ト大ニ相違いたし祖宗ニ對候而茂難相濟誠以殘念之至存候此上ハ猶更恭順を盡シ從來之素意相貫候様いたし度何卒對 朝廷聊たり共他念無之段一同より申立候様いたし度相頼候との御意ニ御座候

右之通御意ニ付關門行違と申儀篤斗承知不仕候而ハ京都表に申上候筋も付兼候付御老中に御逢相願候處板倉伊賀守殿稻葉兵部少輔殿御出席ニ付關門御行違より無據兵端相聞候儀從是兵端御開被成候次第ニハ無之と申御事ニ御座候得共如是兵端相聞候上ハ箇様々々之御次第より御開被成候と申儀分明之御辨解無之候而之 朝廷に御謝罪之筋相立申聞敷と申上候處右ハ尤之次第ニ付右關門行違之始末書取大藏大輔迄御差越ニ相成居候御書付有之候間相渡可申との事ニ而一旦御退座ニ相成無程御出席御渡ニ相成候御書付寫差上申候

正月廿日

澤 村 脩 藏

去卯十二月十二日旗下之者共鎖撫之爲下阪ハムし居候處舊臘中より尾越士三老公履々上洛之儀申越尾越に御内諭有之候辭官并政務御入用途之儀も夫々周旋を以運も付候姿ニ付此上は京地之御模様大藏大輔より申越次第御上京御座候積尤當節柄之儀御戒心も有之候付御上京之節之兵隊御召連不被成候而之臣子之者安心も不仕儀ニ付其段も三家より朝廷に内々可申立置旨申談承知ニ而歸京ニ相成申候去ながら御上京之節一時ニ大兵御召連相成候而ハ彼是物議も可生漸々先供之兵隊被繰出候方見聞も格別ニ有之間敷と正月三日先供之兵隊出一隊ハ二條城に練込一隊之伏見に練込候積ニ而阪地出立翌四日伏見鳥羽兩道ニ懸り大目附瀧川播磨守に 奏聞狀持參爲致四塚關門まで相越候處詰合之際瀧土内府公上京之 勅命無之故先供通行不相成候段申斷候故段々懸合候内兼而設置候哉伏兵左右より起り及地發候付是より發炮戰爭と相成伏見之方も先供兵隊着船いたし候處一應之應對も無之彼より發炮ニ及兩所とも不意を被打怪我人夥敷夫より互ニ勝敗有之追すかり打懸候ニ付切上口無之尤 聲殺之下ニ而干戈相動候而之兼而之内府公御趣意ニ茂相

明治元年

五

違いたし候故戰爭先に書取を以相戒被遣候間兵士之面々ハ一時之機ニ乘し候共右様之儀之決而有之間敷被存候得とも兼々鎮靜方心配被致候壯年之者共一段心痛被罷在候儀ニ而素より兵事を被好候御旨意ニ無之全く尾越公等より之内話も有之堂上方よりも三公に御頼之儀も有之爲天下正義御建言被遊候思召ニ有之候事右様之次第ニ相成候事を乞ふ

〔一新録探索報告〕

以飛札得貴意候 皇朝一新拒 王命候逆徒天誅ニ漏レ候者深 花公之御憂念ニ候惣して天草之逆徒巢穴之地尤并政之其敷處臣等不肖不顧微賤之身を辱奉 花公之證書戮力決進昨十八日天草渡海いたし不差置逆徒を攘ひ姦人を退一時窮民之塗炭を救候之聊奉報 花公之眷恩ニ候處奪掠等之所存ニ之毛頭無御座候依之此後土地鎮撫人心折合之所置仰貴藩正義御應援處候早々御人數等被差向ケ哀レ從來之并政除キ下民安堵之御所置被下置候ハ、無此上大慶ニ付早々御應援之程所希候此段以飛札如此御座候恐々謹言

正月十九日

兒 玉 備 後 介  
結 城 下 總 之 助

佐々木 三四郎 様  
大山 壯太郎 様  
吉井 源馬 様

正月廿日仁和寺宮嘉彰親王諸外國との條約は舊幕府の制に遵據すべく且つ自身外國掛總督を命せられたる旨各國使節に通報せらる

〔一新録皇令、王政復古帳〕

益田藤彦が相違候兵庫表探索書

今般 天皇自ら條約被取結候就而ハ以來是迄之通之條約惣而遵守可致旨蒙 勅命候且又拙者儀外國掛り總督ニ而外ニ三條前中納言東久世前少將伊達伊豫守等石之副ニ相成候間此段爲御知申入候以上

正月廿日

二 品 親 王 嘉 彰

正月廿日北陸道鎮撫總督高倉永祐全副總督四條隆平京師を發す安藝肥前若狹等の兵之に隨行す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

(正月廿四日御留居より御右筆頭へ通達の一節)

高倉 前 中 將 様(永祐)  
四條 前 侍 從 様(隆平)

〔防長回天史第六編上〕

右北陸道に勅使として去ル廿日御下向ニ相成藝州侯若州侯之人數付添罷越候由(以下正月廿一日に登載す)

二十日二卿(高倉) 隆辭シ其日大津ニ次ス藝州兵肥前兵若州兵之ニ從フ肥後藩津田山三郎藝藩小林柔吉參謀タリ

正月廿日我藩在京吏員は延岡藩士の依頼により該藩の入京禁止を宥免せらるべく周旋せし旨を藩地に報す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

正月廿日河口、村上、松本(濠作)より扣書二月二日着

延岡藩於大坂野田口固として人數差出候付而者官軍ニ向發炮有之たる哉ニ御疑懸り入京被止御違有之彼藩士大ニ致心

配兼而御依頼之譯を以て冤罪申被候儀段々懇談ニ付御留守居心配ニ相成居候事ニ御座候以上

正月廿日森藩主久留島伊豫守の使者門屋七郎右衛門熊本に來たり豊後國日田陣屋警衛に關する件を協議す

〔文久三年八月以來 橋初來使一件〕

正月廿二日

森より之御使者門屋七郎右衛門と申者一昨廿日參着即夕。旅宿安東角之允眞鍋市郎左衛門應對被仰付候右御使者より差出候口上手扣并御答振寫一通差出候事

口上手控

日田表人心動揺仕候付爲押人數差出候處同所陣屋明退守之者一人茂無之候付爲 朝廷守衛罷在候此後自然異變之儀も有之候節は御藩初隣端に出勢相頼俱爲 朝廷盡力仕度此旨急札を以朝廷に御届申上置候右付爲亂暴防禦先堺木書改置候得共何分小藩之儀ニ付手廻り兼候間如何様共思召次第無御腹臆被仰聞可被下候此段可然御含置被下度御重役様に重役共より申上候

本藩答書

日田表人心動揺付而爲押人數被指出候處同所陣屋明退守之者茂無之候付爲 朝廷御守衛ニ相成居候由此後自然異變も有之節は御隣端に出勢御頼俱ニ被成御盡力度旨 朝廷に御届被成置候由就右委細被仰合之趣於此方素より御同意之筋候其上日田表之儀は舊來依幕命警衛向之儀兼而相心得居候處廢幕之今日ニ至候而者王土之内主宰も無之事ニ付若亂暴等も難計聊守衛之人數指出置早速 朝廷に奉伺置候趣も有之候間御近藩御同心之向々は何方たり共公平ニ申談御相請持之心得を以共々力を盡せ其地之人民鎮撫いたし候様出向之者共に茂申付置候付諸事無御伏臆被仰談度此段及御答

候様被申付候

正月廿二日

正月廿一日東山道鎮撫總督岩倉具定京都を發す大垣藩兵之に隨ふ

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

〔正月二十日高倉中將等京都出發の續き〕

岩倉 侍 從 様(具)

右東山道に勅使として去ル廿一日御下向ニ相成大垣侯之人數付添罷越候由

右之通嶽上ケ御本陣弓矢八郎右衛門方知せ來候付此段相達申候以上

正月廿四日

御留守 居中(津田山三郎 青地源右衛門)

御右筆 頭 衆 中

正月廿一日久我建通大和國鎮臺を命せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

〔二月六日齋河口離兵衛持參之品々として正月廿六日附疊に添附せるもの、内〕

久我中納言

今般爲大和國鎮臺下向被仰付候ニ付而者近々下向被致候此旨相達候事

正月

〔全書〕

〔二月四日京發村上松本より同十四日着の内〕

青地 源右衛門 様

春日 讚 岐 守

明治 元年

九

津田山三郎様  
池邊 裕右衛門様

森 但馬守  
春日伯耆守

以手紙得御意候然者中納言様(久我中)昨日大和國可爲鎮臺被仰出候仍爲御知如此御座候已上  
正月廿二日

正月廿一日外國事務總督東久世通禧は徳川慶喜征討に關し外國政府は局外中立を守り彼を援助せざるやう英國公使に照會す

〔一新録皇令、王政復古帳〕

以手紙致啓上候然者今般徳川慶喜致反逆候ニ付仁和寺二品親王へ征討將軍被命征討相成居候間右ニ付貴國政府ニ於而ハ何方ニも偏頗無之管ニ付徳川慶喜又ハ其命を承る大名之兵卒を遣送し又ハ武器軍艦を輸入し又ハ貴國之指揮官兵卒を貸し候族ハ總而彼之兵力を助け候儀有之間敷候間此旨各國臣民へ御申達被下其政府より御取締可被下候此段御懸合申候已上

正月廿一日

東久世前少將

正月廿一日外國事務總督東久世通禧は各國公使に對し外人を殺害せし備前藩士處分に關する要求を容るべき旨を答ふ

〔一新録皇令〕

千八百六十八年第六月九日出六ヶ國公使より之貴書致披見候然之備前家來之義御申立之通所置可致旨今朝別紙之通申越候間左様御承知可被下候尤政府より訖書之儀ハ追而可差出候此段御返答如此御座候以上

正月廿一日

東久世前少將

別紙左之通各國公使より備前家來發一條ニ付御所置之儀ハ尤之義ニ付彼等如申立被聞召御所置可相成候間此段早々各國公使共へ御達可被下候事

正月廿日

伊達 三條

東久世殿

正月廿一日日本藩溝口孤雲は英國人ゴロウルより徳川慶喜保護斡旋を請ふ書を得て之を上參與に提出す

〔一新録自筆狀、王政復古帳〕

正月廿一日

一英之カラハ當時兵庫に罷在孤雲に書翰差贈度由ニ而首藤敬助に届方相頼其節口上ニ者今般之變動付而軍艦等差向候儀者決而無之乍然徳川公大權指上られ候者地球上之公法ニ相協候事ニ付征伐之一條者被止候様是非々々各國申合 朝廷に致歎願候旨と申候由右之書狀者素より横文字ニ而一切相分不申先ッ封之儘外國事務總督宇和島侯へ差出候處倭解書出來別紙寫之通ニ付猶土之後藤象次郎へ托上之參與衆へ差出候事

溝口君に呈ス  
足下に神速拜話を望の折柄足下在阪之由傳聞し喜悅不斜候隨而足下ニ希望いたし度儀有之候即今一橋君之多才多能更ニ加害すへからざる人ニ有之尤新政府之御設ハ可有之候共諸侯より殺害無之様盡力有之度此段薩摩長州并土佐之家老衆に傳説有之度深く祈願いたし候



西洋千八百六十八年二月九日

トーマス、ビー、ゴロウル花押

正月廿一日日本藩留守居澤村脩藏等江戸城に赴きて平山圖書頭に面し慶喜の誠意徹上を圖る爲め先其決心行動の實を問はむと欲し推問を試み其答を得て京都藩邸に通報す

〔一新録自筆狀、王政復古帳〕

正月廿一日於西丸平山圖書頭殿に脩藏司馬助(志方)伺取候御沙汰之大意

板倉伊賀守殿に罷出候處御不快ニ而御逢被成兼候間御城に罷出候而平山殿に御對談仕候様被仰聞候

一昨十九日上様より御沙汰之旨ニ付而者不取敢志方司馬助を以京都表に相達候旨ニ御座候處今般之一條何も御恭順を被盡從來之御誠意御立貫被爲在と之御趣意ニ候得ハ第一御恭順之御實跡相顯れ不申候而之折角京都に罷越候詮もなく於彼地右京大夫周旋之手續立兼候ニ付御恭順之御實跡奉伺度左候得ハ第一上様御下阪後兩度御奏 聞狀初者舉正除奸云々後者松平修理大夫家來奸臣御引渡ニ相成候様左なくてハ誅戮を加ル云々之旨ニ候得之從來之御誠意ハ見も角も其委 朝命御抗し被成候様ニ相見夫故敷此節之御一舉ニ付而 朝廷より御布告狀ニも反狀明白或ハ歸國被 仰付候會桑を先鋒云々之御文言も有之其責不得止御儀敷とも奉恐察候右之次第ニ御座候處兩度之御奏 聞狀矢張御立貫おらせらる尊慮ニ候哉左候而者御恭順を被爲盡とハ難申御恭順を被爲盡候御趣意ニ御座候ハ、丸而御取消之尊慮ニ被爲在候哉奉伺候

一會桑二藩之儀者兎角其責も強有之候間心外ニハ候得共二藩歸國被爲命屹度在所に相預居られ候様尤桑者在所柄ニ付強而歸國被仰付候譯ニも至兼可申候會津在所に引拂候ハ、御防戰之御覺悟無之御恭順之御實跡ニ相成可申如何之御模様ニ被爲在候哉奉伺候

一此御御勘氣被爲蒙修御次第ニ而者重キ御謹慎中之處若説ニハ追々佛人登城いたし既ニ一昨日脩藏西丸に罷出候時分も

佛人見受候間甚以懸念仕候士豪佛と御交際之儀付而者被是不宜唱も不少殊ニ民部大輔様彼地御在留も被爲在候趣ニ付旁以天下之嫌疑も強有之候處此度御歸城後頻々登城いたし候而之世上之唱尤之儀敷と奉存候間以來之屹度登城御停止ニ相成無餘儀時分之御役々様御役宅ニ而御應接ニ相成候様有御座度奉存候

一此節町職人共歩兵御取立ニ相成候との事専ら風説有之承繕候處全其御取調之由左候ハ、外見ニ而は此節御防戰之手當と外相見不申御恭順之御實跡相顯候様との旨ニ之相違いたし候間何卒直ニ御取止ニ相成候様有之度右等之儀以後如何之御運ニ相成候哉奉伺候

右之件々篤斗承知不仕候而は右京大夫より申立候次第相立申間敷奉伺候段演述仕候處圖書頭殿至極尤成懸念忌諱をも不願誠以誠實なる心底ニ付篤斗上様に奉伺追而沙汰可致候間暫時扣居候様ニとの旨ニ付扣居候處圖書頭殿再御呼出ニ而御口達左之通

一兩人申出之趣上様重疊御満足被爲在候間いた下々ニハ御布告も無之以後之御運ニ候得共兩人懇切之誠意ニ被爲對向後御覺悟之處申達候様との御沙汰其旨ハ此度之一條 朝廷に御恭順之御實跡と申ハ御退隱被爲在御跡ニ之可然御方を御相續御願ニ相成候御覺悟ニ有之候

一駿府に是迄御手當ニ相成候御人數も御解放其外街道々々之番卒等も解放ニ相成候様向々に御達ニ相成候事

一會桑之儀會之是迄ニ歸國願出候事も有之候間紀州表に残り之兵士歸府之上ハ追々御暇被下候尊慮桑之儀之場所柄ニ付先ツ此儘ニ被差置候尊慮

一佛登城之儀者連年御雇之教師此節御歸城ニ付拜謁願出候ニ付無據御免有之今一人之ミンストルニ而御歸城之後頻りと登城願出候付不得止御免許此後容易登城ハいたす間敷援兵御頼杯と申事ハ決而無之全體萬國公法國內之變動ニハ外國より應援之儀者決而不致規則ニ付關東にも薩長にも佛トモ英ニ而モ兼而交際ノ因ニよつて加勢等難相成尤 皇國と各國との銜楯ニ候ハ、援兵もいたし候得共國內之事變ニハ助力ハいたさる公法之筋ニ付此一條は重疊致安心候様ニ

との尊慮

一兵卒御取立之儀之此節新ニ御取起ニ而はなく兼而御募之御趣意ニ候得共尤と申筋ニ相聞候間御取消之儀向々に相違候様可致尤俄ニ御募リニ成リ而も無用之事ニも有之候間早々御停止ニ可相成事  
右之尊慮ニ被爲在候間兩人申談能々取成有之度との旨ニ付委細奉畏左様御座候得之兩度御奏 聞狀之丸而御取消ニ被爲在候哉と猶奉伺候處勿論退隱被爲在所謂染衣之姿と被爲成候御決意之上ハ何も御冰解之儀之御憐察申上候様ニとの旨ニ付奉畏候と御受申上候處随分共爲 皇國盡力いたされたしとの噂有之候事

正月二十一日

澤村 脩藏  
志方 司馬助

正月廿一日天草出張本藩物頭宮部瑤七郎等同島の民心動搖するにつき警備の爲め衛兵を増遣せられんことを藩政府に要求す

〔一新録自筆狀〕

天草出張物頭より之報告

覺

一昨十九日早打ヲ以相連置候通ニ御座候處一昨夜使者として御陣屋に罷越重役之人に相申度段御門番之者へ申入候付御營門外へ扣へさせ置候而御陣屋近邊正連寺ニ而致應接候處口上之趣者一通ニ而別紙之通申越候間俱々鎮靜方等談判申度段者内意ニ存候へとも此儀者國許急便を以役所に致通議候上及談判可申と返答仕置申候此儀如何申向候哉奉伺候然處此許御警衛御少人數ニ而村々人氣不安心之由不怪動搖仕何様ニも相應之御人數片時早く被差出候様奉願候左候得者人氣茂安心仕元締村田角左衛門列并庄屋ども方も當所之儀も何事も御依頼申上度御人數事歎願仕何程御人數參候而茂此許ニ而取賄可申段申出候右之次第御座候間天草中御領内同様之心得ニ相成可申人氣御座候付一刻茂早ク御人數

被差出度奉存候今度京都大變ニ付而者御人數御繰合せ何程ニ可有御座哉と奉存候得共前條之次第御座候故返々茂急速之御取計奉願候尤書面ニ而者貫通不仕儀も御座候間態ト以早打古賀大榮差越申候ニ付是方委細之儀者御聞取可被下候此段宜被及御參談可被下候以上

正月廿一日

町市郎右衛門  
宮部 瑤七郎

御奉行 兼 中

正月某日我藩天草警衛として物頭一組を派遣す

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人數 從元治元年 至明治元年二月 坂本彦衛調の内〕

同月(元年)

一天草爲警衛物頭一人足輕二十人同前(至急) 出張

正月廿一日尾張藩は其藩臣の舊幕援護の策を企てたるものを誅す

〔王政復古帳〕

(正月廿四日下津永屋か桑名より報告せる聞取書抄略)

一前大納言様此中清洲に御滯之處去ル廿日名護屋ニ御歸着右御供ニ而罷下候内廿日廿一日兩日ニ死刑被仰付候面々左之通

大番頭渡邊信左衛門 番頭柳原勘解山 用人石川新丞 外二十五人

付札 本文廿一日五人誅戮と迄相聞候内猶名前等相分左之通

明治元年

淺井四郎兵衛 江原鍋吉 中山虎五郎 天野小藤次 御書物奉行 御書物奉行 御書物奉行 武平町  
右といつてもまはり首之由ニ而右之事情ハ相分兼候得とも勳幕方之面々と申蒼説承り候由 塚田覺四郎 安井長十郎 寺尾竹之助 馬場某

尾州前大納言様御着即日被仰出之御書付寫  
今般朝命茂有之姦臣主謀之者共不審之輩誅戮等夫々處置申付候而者誤而右黨與入候者有之候共歸順致候輩決而其罪を  
苛責不致候間一統深ク此意ヲ相辨心を安し大義ニ心を盡候様可致候事

〔一新録探索報告〕

(前略)

一先度尾州公御歸國之儀之於御國許竹腰始其外賊徒共元千代世子を奉し今度徳川氏之一舉ニ援應之企有之趣御國元より  
報知御座候由ニ而直様右之情實 朝廷に御申出翌十六日御隙願直ニ御歸國然處御着城之翌日ニ夫々最早右之企相成居  
候勢ニ付不取敢御着城即日ニ夫々御裁斷左之通被御行候ト申事ニ御座候

尾州御附御免三位附

竹腰 兵部少輔

年來奸曲之面々所置有之候  
朝命ニ依而死を賜者也

渡邊新右衛門

榑原勘解由

石川内蔵丞

志不正ニ付死を賜者也

安井長十郎

塚田惣四郎

馬場 一郎右衛門

心得方不宜候ニ付死を賜者也

成瀬嘉兵衛

竹野新右衛門

松原新七

横井孫右衛門

澤井小右衛門

横井左直

井紋三郎

永登居半地

鈴木嘉十郎

大道寺主水

六十間初三郎

成瀬豊前守

鈴木丹波守

本杉線兵衛

加藤五郎右衛門

荒井敏吉

正月廿一日尾張藩世子徳川元千代藩主慶勝に代りて上京の途に就く

〔王政復古帳〕

(正月廿四日清水永屋等桑名より報告の聞取書の内)

一元千代様は者前大納言様御交代として御上京ニ而名護屋表廿一日御發駕御途中も極御急キ今廿四日草津御泊之よし候  
事

正月廿二日東海道鎮撫總督伊勢四日市に到る

〔安津免久佐〕

辰二月七日着

勢州四日市驛方奉啓上候谷御機嫌能被遊御捕奉大悅候然者私儀兩鎮撫使御供仕昨廿二日當驛着此處暫御滯陣と相見申  
候

此方様御人數都合四百人余玉葉箱持人足迄ニハ千人程ニ而御兩卿御守衛御供立ニ而日々軍行其行裝氣色言語圖畫ニ茂  
難及誠ニ勇々敷有様ニ而道中ハ見物之人民貴賤群集水口驛方此方々ハ宿所々々も官軍御用宿ト札を打御代官多羅尾織  
之助此節禁避候 兩卿御迎御案内ニ相成申候御先手ハ井伊家之人數ト云を始として伊勢路之諸家之人數先鋒として  
出張後陣ハ因州等餘計之人數引續行軍ニ相成誠ニ珍敷御用ニ被召仕太慶此事ニ御座候只今通ニ候ハ桑名も此儘降參

之方ニ片付可申歟何之取沙汰も無之一兩日中ニハ黑白相分可申此度出張御備組ハ惣而烈敷入マリ様ニ而皆必死武勇を顯御國威を輝候ハ此時と申趣ニ而衆力一致何事も權柄ケ間敷懸合等ハ無之私共別而大仕合ニ御座候委細ハ後便ニ讓可申上右迄早略申上候以上

正月廿三日

正之助(御勅定所物書 小山正之助)

父 上 様(獨禮段 小山宮太)

正月廿二日大坂及び兵庫に鎮臺を置かる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

(二月六日濱河口權兵衛持參之品々として正月廿六日附書に添附せるものゝ内)

東久世前少將

被免參謀兵庫港鎮臺被仰付候間此旨相達候事

正月

醍醐大納言

參與職内國事務掛大坂鎮臺被仰付候間此旨相達候事

但攝泉兼勤之事

正月

宇和島少將

外國事務總督兼大坂鎮臺被仰付候間此旨相達候事

正月

〔鶴鳴餘韻宗城公御事蹟〕

明治元戊辰 公年五十一 正月三日(云々中略)同廿二日大阪鐘臺外國事務兼職被仰付同廿四日思召有之金壹萬五千兩下賜同廿七日改大阪鐘臺爲大阪裁判所副總督二月二日大阪に赴く

正月廿二日長岡護美上京の命あり

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

今廿二日太政官代に御呼出ニ付後藤彈助代動として罷出候處別紙御書付一通徳大寺様被成御渡候此段相達申候以上

正月廿二日

御留守居中

御右筆頭兼中

細川越中守舍弟

長岡良之助

被爲在 御用候間早々可致上京被 仰出候事

正月廿二日我藩溝口孤雲、由良洞水徴士を命せらる

〔一新録自筆狀〕

(慶應四年田中八郎兵衛持越稷書)

全(正月)廿二日

(前略)

一孤雲得太郎徴士被仰付可爲刑法事務掛旨被仰出候 得太郎ハ廿三日也

一由良洞水徴士被仰付候

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

今廿二日太政官代に御呼出ニ付秋吉又助代勤として罷出候處別紙御書付一通西四汁様方被成御渡候此段相達申候以上

正月廿二日

御留守居中

卷込 御右筆頭衆中

由良洞水(長谷川二右衛門變名)

右徴士被仰付候事

正月

〔慶應三年王政復古帳〕(熊本縣廳所藏)

可爲徴士被 仰出候事

溝口孤雲

可爲刑法掛被 仰出候事

溝口孤雲

右徴士被 仰付候事

由良洞水

正月

正月廿二日我藩徴士津田山三郎海陸軍務懸を命せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

正月廿二日於太政官代徳大寺様御渡

津田山三郎

可爲海陸軍務懸被 仰出候事

〔一新録自筆狀〕

(慶應四年田中八郎兵衛持越稜書)

同廿三日

一海陸軍事務惣督薩肥長三藩組合ニ可被仰付哉之御模様岩倉様より極密山三郎へ御内話有之候由之事

但本文之譯ニ因り山三郎へ昨日海陸軍事務掛被仰付候由

〔全書〕

慶應四年正月廿八日京發田中八郎兵衛早打ニ而同年二月六日着持越、評議稜書

一海陸軍總督薩肥長三藩に可被仰付哉之御模様ニ付右被爲蒙仰候ハ、屹々御差入御請可被仰上との事

但此節ハ洋外萬國ニ皇威を被示候御趣意ト被考陸軍海軍共壹万石ニ幾人ト被定六十餘州ニ御割賦有之軍艦も日本全州ニ而何十艘ト被定是ハ周圍之海國ニ御割賦有之候趣ニ付夫を指揮管轄則惣督之任と相見於武門者無此上御任ニ候處萬一御斷ニも相成候ハ、肥前筑前等へ被仰付ニ而茂可有之左候へハ廿而其指揮を不被受而ハ難相成扱又右付而之諸入費も勿論惣督方辨へト申譯ニ可相成様も無之况三藩御組合ニ相成候上ハ兵威も士氣も我不劣と振立自然ト御國躰も丈夫ニ相成可申旁本文之通ニ御座候右惣督ハ良之助様は被仰付答之由ニ候事

正月廿二日本藩政府は書を在京老臣溝口孤雲等に贈り京地の近狀を問ひ且つ長崎日田等の形勢を起す

〔一新録自筆狀、自筆狀並稜書〕

慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄

以手紙申達候京攝間大變動浪華落城等之次第長崎より報告之末歩御小姓津野田助之允御地より早打ニ而着去ル七日八日迄之處之確報を得最前之風説よりは些寛なる様ニ而第一國下動搖體之儀之無之由先以奉恐悅候内府公ニ之會桑を率ヒ七日ニ御立退華城は燒失之由爾來如何之光景ニ相運候哉被是懸念之次第ニ而屈指其後之御報知を相待申計ニ御座候

一 右學動付而ハ長崎領臺も立退跡ニ之出崎之各藩士申合市中取締外國交際等差寄之處は衆議を以取計居候由右領臺ニ一  
 且土州之國旗を建候由之處公平衆議之趣意ニ相反し候仕形ニ付同藩に及懸合候處激徒共之所業ニ而も可有之と迷惑之  
 體ニ而直ニ國旗ハ引候由尤薩州より人數二百計も邸内に繰込候由是以各藩ニ付答候位之事ニ而先各別之異狀之有之間  
 敷候得共詰込までニ而之餘り御人少ニ有之少シは兵力を被添候方可然と五拾挺頭柏木文右衛門組共至急ニ出崎之及達  
 申候

一 久留米御預所豊前四日市亂暴之次第之別紙探索之通ニ而日田にも可相迫風聞且大阪之變報等ニ付而窪田縣令にも陣屋  
 立退家族等引連熊本へ可被入込趣ニ相聞候付入江次郎太郎を途中參懸被指越條理を以說得ニ及せ引返ニ者相成候得と  
 も其儘歸營ハ何程ニ有之たる哉日田表之儀今日ニ至各藩申合守衛之譯ニ付縣令之進退等御國一藩ニ依頼之儀者斷ニ及  
 せ候事ニ御座候

一 爰ニ煩敷儀之花山院前中將殿御内と唱内 勅を奉し九州鎮撫として豊前へ被渡候由ニ而天草日田等之人心を煽動いた  
 し候趣相聞全く浪士體詐偽虚喝之所行と之被考候付夫々御手當も被仰付答ニ候とも眞偽之境之爲念 朝廷に御伺取至  
 急ニ被仰越度存候則右布告書等差進入御披見申候

一 豊後森より使節參着應接之趣別紙書取并日田天草等出張之面々心得之儀御示之書付等も爲御存指進申候實ニ東西多難  
 片時も油斷難成萬般之御警備筋等専ら御指揮ニ相成居申候事ニ御座候於御地之別而非密切迫之御處置筋等多端打重若  
 殿様御配慮之中上候迄も無之御役々御心勞之程深々察入申候乍慮外此上猶更御勉勵所希ニ御座候右助之尤を早打ニ而  
 差返候付右之趣勿々申縮候不悉(別紙書取は正月廿日の薩藩使者の口上手扣及び本藩よりの答書、)  
 又書付は正月十九日の條日田天草等の警備隊長に令達したる書なり)

正月廿二日

御 中 老  
御 家 老

溝口 孤雲殿

三宅 藤右衛門殿

正月廿二日日本藩偵吏金栗量平等豊後國日田に出張し該地の騷擾事件を探りて之を玉名郡吏員に  
 報告す

〔一新録探索報告〕

辰正月廿四日

中上覺

御近領之模様等探索として差出置候金栗量平列昨廿三日日田表差立候雇飛脚今廿四日午刻比爰元着仕於同所見聞之趣  
 御注進書別紙一通早打御達申上候以上

慶應四年正月廿四日

多田 隈丈左衛門

玉名

御 郡 代 衆 中

從日田隈町以飛脚御注進仕候、、扱此度變亂之儀聞取候次第左ニ稜々一ツ書を以申上候

一 十九日七ツ半比より府中驛出立晚四ツ比ニ吉井驛に着仕候處久留米御人數吉井より壹里半先熊之上と申處迄繰出ニ相  
 成候處日田御郡代十七日夕方より行衛不相分由ニ而森勢入替候ニ付日田町々大騷働い、し候哉ニ而引返ニ相成吉井驛  
 大混雜ニ而漸ク及深更宿を取申候事

一 (前略)廿日書過より吉井宿出立仕無差支日田表に暮六ツ半比ニ到着仕候(中略)

一 廿一日朝御宿陣照蓮寺に罷出御物頭中村佐助様御列に懸御日向又御用達日隈彦三郎に及面談聞取候趣左之通

一 上方變働ニ付而窪田殿より御圖表に御固御人數之儀御領越ニ相成居候内四日市變亂之一條御注進ニ相成候處内牧御郡  
 代衆より御取計ニ而御城下表御人數間ニ合兼可申御見込ニ而小國御家人五拾人余御差出ニ相成日田御陣屋御警衛い、

明治 元年

し居候處大坂落城之様子相聞小國御家人より窪田殿に是迄ハ對公邊御警衛致居候得共公邊右之通ニ而之警衛御斷申出候由尤所柄之警衛いふし可申と隈町寺院之様引取申候ニ付窪田殿十七日夕方より津江境大野村之様落行ニ相成申候由御備手五拾人余中村殿御列十四日發足十八日隈町照蓮寺に御着陣(下略)

一 森領上馬場と申所日田御陣屋より八九丁離候所に森勢四百余人参居右御陣屋諸道具等取片付居候内夫方共少々紛込右窪田殿退去ニ相成候跡に直ニ多人數込入御藏等ニ之封印いふし候由右久留島家之壹萬石余之領主ニ而惣勢貳百人ふらでハ無之山大造之人數定而薩長之人數も入込居可申哉之見込ニ而御座候事

一 昨今久留島家より市中に相觸候趣ニハ一兩日中ニ花山院宮當地爲支配御下向ニ相成候筈ニ而追々先勢等も入込候ニ付動亂等いふし不申様申聞候由惣勢六百人も可有之との事同人より承申候事

一 筑前御物頭白石七右衛門荒木定と中村佐助様御列と日隈宅ニ而面會ニ相成候由ニ而西海道之御國と筑前に守衛被 仰付候由 朝廷より之御書見せられ候ニ付寫取度段申向ニ相成候處御國表にハ筑前より御使者参り候事ニ付近日御國表より御差圖可有之と申右之御書之貸不申中村殿御咄ニ相成日隈よりも同様之事ニ御座候事

一 去ル十九日府中驛より申上候書狀ニ久留米勢八百余りと申上候處實之六百人計ニ而未吉井宿に滞留ニ相成居候事

一 右同斷筑前勢之千五六百と申事同國境志波把木久木宮と申三ヶ所に御固ニ相成居申候併前條申上候白石七右衛門列より申出之趣ニ而御座候哉昨廿一日日出表に三百人計繰込ニ相成候由日隈より承申候事

右之通ニ而當地之儀花山院宮當地爲御支配御入込之よし御國筑前には前段之通被爲蒙仰候儀實事ニ御座候得之森藩より御兩國に連ニ引渡可申哉於爰切迫之時宜ニ之至中間敷哉と風説專ニ而甚安勞仕居申候尤筑藩之別紙之通人數ハ操込申候得共未森藩に懸合等いたし候儀之承付不申且又四日市之儀一二里先之惣而海岸ニ而何と歟申所に七十間計之蒸氣船懸り居候由ニ而人數之増減不斷打狂候由至而煩敷趣ニ而既ニ日田表より探索之たゞ農兵之内被差出置候處貳人被生捕今以歸り不申彼方へハ参り候而者宜カル間敷段中村佐助殿より被申聞候付差扣居申候右ニ付而一兩日滞留花山院宮

來着を相待見可申哉豐前路より黒崎の方へ罷出可申哉と未決兼居中候然處大雪ニ而山中雪深之由當地より何方に參候ニも山越ニ御座候得之甚以困入申候先右之段再應以飛札御注進仕候間宜ク被成御達可被下候以上

正月廿二日晚認

御當番衆様

大頭 池内 清太 夫

上下拾五人

馬 壹 疋

組之もの貳拾人

足輕物頭 白石 十右衛門

荒 木 定

上下七人

足輕 三人

横目 壹人

下 壹人

醫師 壹人

右豆田裏友田村兵林寺宿陣

玉藥持 百人

足輕頭 貳人

足輕 三拾人

指揮役 壹人

炮術方 八人

玉藥持 五拾人

御郡奉行

神 吉 禧 三 太

上 下

同 附役

齋 藤 五 三 郎

明治元年

二五

右同所渡村長善寺宿陣 安 永 六 郎

右者昨二十一日筑前勢千五六百之内三百人余日田豆田町に操込に相成候分

正月廿三日人を暗殺する者は嚴刑に處する旨布達せらる

〔王政復古帳〕

慶應四年正月廿五日御留守の達有之候參與御役所々の御書付紀州櫻葉の邊邇來候御狀

近來於處々致暗殺候内ニハ其罪狀相認死骸ニ添有之候も不少何とニ陰謀等憤り候而之所業ニ可有之全体不埒之者共者得斗吟味之上刑典を以嚴重之御裁許被仰付事ニ付大政第一新之折柄猶更御爲筋を心掛公然と可申出處共儀無之私ニ致殺害候者朝廷を不憚致方ニ付右等之者有之於而ハ吟味之上屹度嚴刑ニ可被處候間心得違無之様可致事

正月廿三日

參與役所

當り扣略

紀州様初連名にて家來中と有之也

(我藩の外紀州、加賀、仙臺、筑前、因幡、備前、伊賀七藩家來中宛)

〔一新録自筆狀〕

慶應四年田中八郎兵衛持越稜書 全廿二日

一近來又々暗殺流行一夜ニ五人茂六人茂處々ニ有之候由依之別紙寫之通三條大橋ニ懸札被仰付候是ハ刑法事務之受ニ而此方より草稿出申候

正月廿三日大和國鎮臺久我建通任地へ發向するを以て我藩に守衛兵を出すへしとの命あり

〔王政日新録〕(熊本縣)

(熊本縣)

御用之儀有之候間唯今早々大政官代に御參可有之候事

正月廿三日

細川右京大夫殿

追而御所勞被相助御參可有之候事

細川右京大夫

今般爲大和國鎮臺久我中納言下向被 仰出候付爲守衛人數百人可差出御沙汰候事

正月

〔一新録自筆狀〕

(慶應四年正月廿八日京發田中八郎兵衛早打ニ而持越評議稜書の内)

一久我様大和御鎮撫被蒙仰候付御警衛之御人數此方様は被仰付候付御人數百人林新九郎引廻ニ而可被差出と内評議相決候事

但久我様も春日讚岐守被差越御依頼ニ相成來月五日比御發途之管之山右ハ和州鎮臺ニ而御人數ハ不入譯ニ候へ共此砌ニ付少御警備有之追而者漸々被減候御模様ニ御座候

正月廿三日日本藩奉行木村得太郎徴士刑法掛を命せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

正月廿三日於御所御仮建岩倉侍從様より御渡

木村得太郎



可爲徵士被 仰出候事  
右一通

木村得太郎

可爲刑法掛被 仰出候事  
右一通

正月廿三日日本藩廣田貞右衛門岡松辰吾に刑法書調方を命す

〔一新録自筆狀〕

〔戊辰正月廿七日京發他筆狀溝口三宅より家老申老當り〕

廣田貞右衛門  
岡松辰吾

右者暫滯京被仰付今度若殿様刑法事務總督被爲蒙仰候付御刑書しらへ御用掛被仰付旨  
右之通去ル廿三日及達候

正月廿三日桑名藩世子松平萬之助開城して官軍に歸順す

〔淺井鼎泉記錄〕

明治元年正月七日慶喜公大坂發し關東に向て退去せらる依りて更に出張の御人數増加せらる候隊長ニは下津縫殿御奉行ニハ永屋伊平被命然處無程大垣藩ハ歸順し桑名藩も相次て降伏も同藩の世子ハ御國の手に依りて降伏の中入り依りて惣師橋本柳原比兩卿へ申出降伏の手順及終ハる

〔安津免久佐〕

去ル廿二日四日市着陣之段ハ昨日之御便ニ申上候通ニ御座候處左之通

一同廿三日申ノ下刻井伊家之人數を始として大村備前等之軍勢桑名之方に繰出ニ相成御國御人數者惣而御本陣前通りニ

三町之處列をふし并居御本陣門内ハ御番方等御支關内ハ御番頭以下左右ニ座列をふし九曜御挑灯大小馬上挑灯等如白  
豐誠ニ嚴重之備立ニ相成居候處戊ノ下刻頃桑名之世子當年十三才爲伏罪御出ニ相成御行列之次第先御國物見役歩行ニ而案  
内次々因州之人數銃隊一組重士とも次ニ彦根之人數百人計り其中ニ右世子振袖ニ麻上下御着用ニ而歩行御身付纒五六  
人長髮麻上下ニ而御供ハムし右行列至而徐步靜整是迄之御本陣門前ニ而世子御身付とも大小拔捨無刀ニ而臣下ハ白砂  
ニ平伏幼君ハ式臺ニ平伏ニ相成居候處ニ兩卿御支關迄出方ニ相成身付海枝武次方御頭を上ケらる候様ニト申上少シ御  
頭を上ケニ相成候處ニ而御書付を渡ニ相成其儘御菩提所に御引取御愼ニ相成居候由但今晚幼君主從爲國家伏罪囚人ト御成  
候御之御人數等皆鐵の袖  
を漉さぬものは無之候事

一右御歸座之上今度鳥羽伏見ニ而關東方先鋒にて相働候桑名人數之内其儘城下に立歸居候藩士拾三人捕方として御國御  
物頭以下役々百人餘被差越右ハ當驛近村ニ御沙汰を相待居候趣ニ而在家之内ニ相揃居候處ニ御物頭より兩頭撫使より  
御沙汰之趣申渡ニ相成御氣ノ毒千萬ながら御法ニ付繩を打可申段申述ニ相成候處奉畏入候段返答右之聊手向之氣色等  
茂無之尋常ニ囚人ト相成其儘拾三人ハ只管切齒落涙のミニ而何之言葉も無之其儘因州勢ニ引渡同藩御預ニ相成候事但  
文拾三人ハ爲關東主君一時憤怒ニ堪兼元忠義之一心より藤長を打ント先鋒いたし反而朝敵重料之綱  
ニ懸リ候儀誠ニ可憐事ニ而捕使之面々もケ構成ル無術捕手ニハ又トハ出合ヌ様ニト皆落涙ニ相成候事  
一今日ハ當驛御出馬ニ而桑名城御受取之御模様ニ候處御延引被仰出未タ進退之模様相分不申候事但廿四日〔下略〕  
右之段迄申上候以上

正月廿四日

正之助(山小)

父 上様

正月某日參與大久保利通遷都の議を上る

〔王政復古帳〕

明治元年

今日之如キ大變態ハ開闢以來未曾テ聞サル所ナリ然ルニ尋常定格ヲ以豈是ニ應セラルヘキヤ今一戰官軍之勝利ト成リ百賊東走ストイヘル巢穴鎮定ニ至ラス各國交際永續ノ法立タス列藩離叛之方面定ラズ人心恟々百事紛紜トシテ復古ノ鴻業未其半ニ至ラス纒ニ其端ヲ開タルモノト言ヘシ然レハ朝廷上ニ於テ一時ノ勝利ヲ恃永久治安ノ思ヲナサレ候テハ則北條ノ跡ニ足利ヲ生シ前姦去テ後姦來ルノ覆轍ヲ踏マセラレ候ハ必然タルヘシ依テ深ク皇圖ヲ注目シ觸視スル所ノ形跡ニ拘ラス廣ク宇内ノ大勢ヲ洞察シ玉ヒ數百年來一塊シタル因循ノ腐臭ヲ一新シ官武ノ別ヲ放棄シ國內同心合體一天ノ主ト申シ奉ルモノハ斯ク迄ニ有カタヒモノ下蒼生トイヘルモノハ斯ク迄ニ頼モシヒモノト上下一貫天下萬人感動泣涕イタシ候程ノ御實行舉リ候事今日急務ノ最モ急ナルヘシ是迄之通主上ト申シ奉ルモノハ玉籙ノ内ニ在シ人間ニ替ラセ玉フ様ニ纒ニ限リタル公卿方ノ外拜シ奉ルモノ出来ヌヤフナル御サマニテハ民ノ父母タル天賦ノ御職ニハ垂戻シタル譯ナレハ此御根本道理適當ノ御職掌定ツテ初テ内國事務ノ法起ルヘシ右ノ根本推窮シテ大變革セラルヘキハ遷都ノ典ヲ舉ケラル、ニアルヘシ如何ニトナレハ弊習トイヘル理ニアラスシテ勢ニアリ勢ハ觸視スル所ノ形跡ニ歸スヘシ今其形跡上ノ一二ヲ論センニ主上ノ在ス處ヲ雲上トイヒ公卿方ヲ雲上人ト唱ヘ龍顏ハ拜シ難キモノト思ヒ玉體ハ寸地ヲ踏玉ハサルモノト餘リニ推尊奉リテ自ラ分外ニ尊大高貴ナルモノ、ヤフニ思食サセラレ終ニ上下隔絶シテ其形今日ノ弊習トナリシモノナリ敬上愛下ハ人倫ノ大綱ニシテ論ナキコトナカラ過レハ君道ヲ失ハシメ臣道ヲ失ハシムルノ害アルヘシ仁徳帝ノ時ヲ天下萬世稱讚奉ルハ外ナラス即今外國ニ於テモ帝王從者一二ヲ率シテ國中ヲ歩キ萬民ヲ撫育スルハ實ニ君道ヲ行フモノト謂ヘシ然レハ更始一新王政復古ノ今日ニ當リ本朝ノ聖時ニ則ラセ外國ノ美政ヲ歴スルノ大英斷ヲ以舉ケ玉フヘキハ遷都ニアルヘシ是ヲ一新ノ機會ニシテ易簡輕便ヲ本ニシ數種ノ大弊拔キ民ノ父母タル天賦ノ君道ヲ履行セラレ命令一タヒ下リテ天下慄動スル所ノ大基礎ヲ立推及シ玉フニアラサレハ皇威ヲ海外ニ輝シ萬國ニ御對立アラセラレ候事叶フベカラス遷都之地ハ浪華ニ如クヘカラス暫ク行在ヲ被定治亂ノ體ヲ一途ニ居ヘ大ニ爲スコト有ヘシ外國交際ノ道富國強兵ノ術攻守ノ大權ヲ取り海陸軍ヲ起ス等ノコトニ於テ地形適當ナルヘシ尙其局々

ノ論フルヘケレハ贅セス

右内國事務ノ大根本ニシテ今日寸寸杜モ置クヘカラサル急務ト奉存候此儀行レテ内政ノ軌立チ百日ノ基本始テ舉ルヘシ若眼前些少ノ故障ヲ顧念シ他日ニ讓リ玉ハ、行ハルヘキノ機ヲ失シ皇國ノ大事去ト云ヘシ仰願ハ大活眼ヲ以一斷シテ卒急御施行アランコトヲ祈萬禱奉リ候死罪

正月

大久保一藏

正月廿三日夜大坂遷都の可否につき我藩に諮問せらる翌日世子喜廷遷都の時宜に適せざるべき旨を奉答す

〔一新録自筆狀〕

(慶應四年正月廿八日京發田中八郎兵衛早打ニ而同年二月六日蕭持越、評議書の内)

一浪華に遷都之儀御下問ニ付進而王化を被敷候上ハ可然候得共即今人心恟々之折柄御取起ハ宜ル間敷猶精々御廟議被爲在度との趣御留守居被差出口上を以御答被仰上候事下ニ付札本文之通候處遷都之儀官家方之内ニハ重疊御案勞之可有之候如何共御盡力ニ可相成と久我續々青地源右衛門を被召至密御相談之上奉覽候處別紙之通御書付御差出ニ相成申候事

但正月廿三日夜御下問翌廿四日巳刻迄御請と申事ニ付右之期限迄ニ匆匆御答被仰上候全轉王政復古ト相成天下之候伯參集外國之往復も打混何分當時之皇居ニ而ハ難立行第一主上自ら御艱苦を被爲嘗月御雲客も屹ト氣取を被替巨礮大艦之運用方宇内之事情も得斗合點ニ相成不申而ハ逆も萬機御一新之御趣意ノ速ニ貫兼一統之耳目も改り申間敷況而外國ニ皇威を被輝候儀ハ猶更之事ニ付至而御簡易之御假建御經營ニ而可被爲入との趣ニ致傳承候へ共内實ハ何程ニ可有之哉傍ら春日講岐守方至密承候事も有之甚以致懸念候得共大非常之御事柄研究之間合も無之先ツ本文之通御請被仰上候事ニ御座候

〔林新九郎日録〕

明治元年

一同(正)廿五日 晴陰交 (中略)一昨日朝廷ニ而遷都之儀差起昨日太夫ノ前ニ而右之得失ヲ談合遷都之儀可然候得共人心恟々之折柄ニ付宜敷間敷云々口上青地申述然處中山大納言存寄ニ而被差延候由云々

〔王政復古帳〕

正月廿四日太政官代に御留守居代松尾形助罷出候處長谷三位様より左之御書付被成御渡候由にて御留守居より達有之候事

細川 右京大夫

自今被免候事

正月廿四日宇和島藩林玖十郎徴士并に參與を命せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

宇和島藩之由

林 玖 十 郎

右今般徴士 被仰付候事

正月

林 玖 十 郎

右今般下參與海陸軍務掛等被 仰付候事

正月

備前藩之由

海陸軍務掛被 仰付候事

正月

土 倉 修 理 助

其藩末分

稻 波 丹 波 介

内國事務掛被 仰付候事

右之通御沙汰候仍申入候御回覽可返給候也

正月廿四日

參 與

尾張大納言殿

土佐前少將殿

薩摩少將殿

安藝少將殿

細川右京大夫殿

正月廿四日我藩番頭下津縫殿奉行永屋猪兵衛は桑名藩歸順開城の状況を在京重臣に報告す

〔王政復古帳〕

從四日市驛態と早打御飛脚差立申候昨晝迄之儀之雇飛脚を以申達候通候處昨日桑名世子膳所に御預同藩家來之内召捕候儀ニ付別紙稜書一通且尾州表に被差越候歩御使番嘶之趣附取書一通外ニ諸藩人數附一通岡崎侯より之御受書寫一通差越申候間孤雲殿三宅藤右衛門方にも早々御差出候様存候以上

正月二十四日

永 屋 猪 兵 衛

明治元年

御奉行衆中

下津縫殿

桑名世子萬之助様初家老四人四日市に被罷出被仰付之趣且淀伏見邊ニ而暴動ニおよひ候而々十三人被召捕候始末左之通

一去ル廿一日兩脚龜山通行之節桑家老酒井孫八郎外ニ一人同道同所に罷出此節御進發之御模様承り越中守以下一藩奉對 天朝暴動ニ及び終ニ朝敵之名を蒙り世子萬之助を初一藩中重疊恐懼罷在幾重ニも謝罪之儀龜山を以御託申出候由ニ付兩脚四日市御著驛之上世子を初家老并淀伏見邊ニ而錦旗に暴發之もの共昨廿三日夜五ツ時を限罷出候様被 仰渡置候間孫八郎列ハ直ニ歸藩致し候由然るニ昨廿三日葉津村庄屋伊藤何某と申もの宅に世子を初家老以下供之者參着ニ相成且錦旗暴發之者十三人共罷越左候而猶又中河原町法專寺に御入夫より暮六半時頃家老松平帶刀三輪權右衛門吉村又右衛門酒井孫八郎四人之供ニ而 御本陣に被罷出同所白洲門御入之上直ニ脱刀御歳十三歳振り袖御上下着家老四人は其以前より脱刀ニ而居門戸之直ニ閉堅メ別紙圖面之通座配ニ而萬之助様敷臺ニ平伏之上兩脚衆より左之通被仰渡

御口達振

松平越中儀 天朝ニ對し惡逆不道之仕方申迄もない紙面之趣御受を中せ

被仰渡之寫

一本城掃除いたし 朝廷に可奉差上。事候イ

一帯刀之者不殘寺院に引退恭順可罷在候事

右之通御口達御書附御渡相濟候上萬之助様初御引取龜山藩之人數よりは迄始末警固いたし最前之法專寺迄護送之上膳所本田侯に御預ニ相成候間同藩人數より直ニ受取同寺を堅く相守居候由尤龜山よりハ最前酒井孫八郎依頼之事ニ付始末警備等取計申候事



一家老四人之内松平帶刀酒井孫八郎兩人之右之通御請相濟候付御書附之趣城中掃除且帶刀之者寺院退除恭順等之示諭も有之候間兩脚に伺濟之上直ニ歸藩致し候尤來ル廿七日を限御書附而之通取計候様若同日迄遲延ニおよひ候ハ、廿八日之直ニ桑城乗取と申御決定ニ相成居候家老之内一人ハ恭順示諭之ため相殘一人之實病氣ニて右兩人共此節罷出不申由之事

但昨夜被仰渡等相濟候上之直ニ今廿四日城受取として進軍之御内定之處城中掃除且寺院退居等之手都合も有之旁兩三日之御宥儀爲被仰付ニ而可有之と相考申候事

一右之通一ト先御手敷相濟候上錦旗に暴發之もの共十三人召捕方之儀一端因州に被仰付候處同藩重役兩人より申立之趣之此節右召捕之儀之不容易事ニ而自然取逃し等もいたし候而之不相濟事ニ付御斷申上度段申入候由ニ而此上之御藩なら而ハ仕應せ出來兼可申と參謀よりも内命有之則左之通被仰付候

肥後

松平越中家來奉敵官軍候別紙名前之者共召捕因藩に可相渡候事

右之通被仰付候間縫殿組を初御物頭組共大筒手等に及指揮別紙手分手賦之通相定め龜山藩を案内として夜九ツ半時當驛押出し葉津村に至り村内五ヶ所ニ罷在候間一同押寄せ十三人共手もなく召捕いづれも尋常ニ縛ニ付敵ながらも袂を濡候程ニ爲有之様子ニ承り候十三人一同相揃因州藩に引渡曉七ツ半時分一同引取申候

一向後之御運ひも事故なく桑城鎮撫之上ハ萬之助様初召捕候もの共ニ至迄御刑斷且關東に之御所置等を初得斗 朝命御伺之御模様ニ承り候へ之暫クハ桑名に相滞候方歟と見込申候事

右之通ニ御座候以上

正月廿四日

下津縫殿  
永屋猪兵衛

(白洲圖面略す)

覺

桑名藩 田中新右衛門 河村 此面  
 右申渡御物頭 副士  
 小篠彦右衛門 牛島勇之進  
 差添 繩締  
 小篠保右衛門 渡邊岡之允  
 繩締 介添  
 井川彌次兵衛 高橋記一郎  
 介添  
 鹿子木彌左衛門 上月捨之進  
 介添  
 刀受取役外樣足輕 刀受取役在御家人  
 平田左一郎 松岡三右衛門  
 桑名藩 神山武吉 吉村毅三郎  
 右申渡御物頭 副士  
 八木田小右衛門 吉津敬三郎  
 外固後藤多兵衛副士 繩締  
 橋本源十郎 志方長平  
 繩締 介添  
 井川熊次郎 木原猪右衛門

介添  
 入江彈右衛門 友岡彌太郎  
 介添 刀受取役外樣足輕  
 續時雄杉 又彦  
 刀受取役外樣足輕  
 松岡五七郎  
 桑名藩 南條金吾 勝身貫一郎  
 右申渡御物頭 繩締  
 神足十郎助 森田角彌  
 繩締 介添  
 高橋作之允 田中九郎兵衛  
 介添  
 荒木善右衛門 町熊之助  
 介添 全上  
 中島內藏助 吉川壽右衛門  
 刀受取役外樣足輕 全上  
 永井理兵衛 兒島齋宮  
 桑名藩 星野勘七郎  
 右申渡

大組 澤村三平次 繩締  
 繩締 介添  
 内藤信之允 古閑作十郎  
 介添  
 永原次郎助 米良左七郎  
 介添  
 飯田忠之允 刀受取役諸役人段  
 在御家人 上塚記勝  
 右同  
 桑名藩 樋口 葭穂 加藤 範藏 規  
 右申渡  
 御物頭助勤 繩締  
 東 太郎平 吉川熊之允  
 繩締 介添  
 魚住彦三郎 長鹽平格  
 介添  
 中島次兵衛 廣吉健太郎  
 介添 刀受取役足輕

小山岩熊 山田常助  
 右同  
 山田典吾  
 桑名藩 戸田庄橘 榛葉權亮  
 澁澤吉右衛門  
 右申渡  
 御物頭助勤 繩締  
 藤崎彌右衛門 波々伯部九郎助  
 繩締  
 池部彌五八 東左内  
 介添  
 西 繁五郎 岩瀬只雄  
 介添  
 小田野鉄太郎 草刈作之允  
 介添  
 紫山四郎作 小野要助  
 刀受取役外樣足輕 刀受取役外樣足輕  
 田添壽格 福島榮之允  
 右同

嘉悦新

以上

召捕人十三人

田中新右衛門 河村 此面  
神山 武吉 吉村 穀三郎

南條 金吾 勝身 貫一郎  
星野 勘七郎 兒島 齋宮  
樋口 葭穂 加藤 規  
戸田 庄橋 榎葉 權亮  
瀧津 吉右衛門

〔全書〕

(前記下津永屋の報告書に添付せしものなり)

郷導

龜山 百五十人之賦

先鋒

大村 五十七人

備前 二百九十五人

佐土原 六十六人

彦根 四百四十人

水口 百五十人之賦  
膳所 百九十九人

本陣

肥後 三百二十五人

後陣

因州 四百十人

惣ノ 二千五十二人

以上

正月廿四日土佐藩兵高松城を徇ふ

〔一新録探索報告〕

(探索者不明、報告の一節、高松降伏の日附は近世史料編纂例に據る)

一松山高松討征之儀土藩へ被仰付同藩早速兵を向候處高松之速ニ降服謝罪實功之爲家老用人兩人之首を持五條(爲)公御

陣營室津へ持出候よし松山ハ未伏罪之遺未分明相立土州盡力致吳候よし

但土州之 朝廷ニ命を受兵を出し干戈を不用口説ニ而下ス説也其後長州出兵致し兎も角も兵力を以一時ニ相殲スニ  
議論を立兩藩甚翻語致併土之 朝命を受長之私ニ兵を出し兵力を用候之、則私戦ニ相成勿論既往之私怨ハ万々難盡  
候へ共王命於てハ干戈を不動して歸順なさしむるか 朝廷之要旨と愚考す

正月廿五日醍醐忠順東園基敬參與を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

醍醐 大納言  
東園 中將

參與御役被 仰付

正月廿五日

正月廿五日本藩士山田五次郎安場一平徴士、内國掛を命せらる

〔一新録自筆狀〕

(戊辰正月廿七日京發他筆狀添付御書の一節)

同廿五日

一安場一平山田五次郎徴士被 仰付可爲内國事務懸旨被仰出候

(同書狀添付の別紙五通の内)

正月廿五日於大政官代石山右兵衛權介様方御渡

山田 五次郎  
安場 一平

右衛士内國掛被 仰付候事

正月廿五日我藩偵吏兵庫港にて外國人より探知せし情況を在京重臣に通報す

〔一新録探索報告〕

兵庫表事情正月廿五日夜ニ入書ス

- 一 東久世様夷人御談判ニ而開港之儀者是迄之通り相心得候様御達ニ相成候事
- 一 關東ニ應授仕候模様一切相見不申既ニ昨日賊内亂治候迄者双方ニ於而兵器軍糧等軍用ニ預候品賣買致間敷段ミニストルより布告仕候

此一條は萬國之公法ニ從ふ也と英之通辯官ダウシン申聞候公法ノ證據ハ別紙ニ有

一 英之ミニストル「ブアクス」英商「カラバ」は談話之節帝之政府を好候哉幕府之政府を好候哉ト兩人共ニ私に詰問仕候を以相考候ニ全ク彼等ニ於而も内地人心之向背を察し去就を定メ可中心底ト被伺候事

一 外國醫生一人通辯官有名之「サトフ」と申ものと兩人上京之覺悟ニ而妥許發足仕候尤手負療治之爲と申候事

一 備前より砲發仕候異人ハ存之外淺手ニ而漸々平癒死ニ至程ニ者無之由縱令死ニ至不申とも殺害之積ニ而打懸候事故士分之者豈人ト是非々々解死人ニ受取度段申立居候事

一 備前人之所置ハ股たる事も不承候事

一 右之一條之只今最中 朝廷伺ニ相成居候段薩ノ岩下佐ニ右衛門申聞候事

一 久世様昨日當所御退港ニ相成候事

一 兵庫神戸兩所之取締之惣而薩長より仕候而只今通ニ而之十分人望を得候委ニ相見申候外國取扱之儀一旦之薩岩下佐ニ右衛門薩寺島陶藏土中島作太郎長伊藤俊助へ被 仰付候處今朝岩下噂ニ中々以自身共世話ニ而行届候儀ニ而ハ無之候付久世様に奉願兵庫一ヶ所之惣括ニ引除長州之神戶之惣括外國事務ハ伊藤俊助裁決ニ預り共ニ一ヶ所定受持候由大坂

之取締ハ後藤象次郎ニ致委任宇和島茂同様ニ候へとも一切世話行届不申途餘程不足之體ニ相見申候是等之儀ハ未明白ニ情實を得不申候得共全土和二藩ハ中心之薩長同腹トハ相見不申考察仕候事  
右之條々ハ諸藩並英之ミニストルを始各國之異人共より承及候綱領ニテ御座候鎖細委曲之件々ニ渡候而ハ夷人共ニおゐても各夫々之持論有之候へ共御參考ニ奉備候丈之儀も無御座態と不申上候尙廣ク見聞を盡し事情を得候上上京を以言上可仕候已上

右者首藤敬助探案生書取と相見候

正月廿五日長州藩兵隊豊前國四日市に至り遂に御許山の暴徒を掃蕩す

〔慶應二年八月以後 京都大坂長崎探索書〕

姫會庄屋方手ニ入候書付

- 去ル十四日夜半過四日市御陣屋に鉄炮打込夫々同村庄屋處右衛門宅へ亂入家財等不殘焼失貯之金子之奪取候よし
- 一 東御坊ニ而鐘打出し候間右を爲可靜表門方參見候處一切門を不閉只々鐘をつき候間無據亂入放火いたし候由
- 一 久留米御奉行御若黨接戦之上討死いたし候由
- 一 御陣屋門番即死之由
- 一 四日市放火鷄鳴比相濟久留米陣へ大炮三挺奪取人歩へ爲牽字佐町通ニ三拾人程法鏡寺鳥越通ニ四拾人程押通り御許山に楯籠り翌々十六日中スカ御藏所御米を公私之人馬まで御許山字佐迄日々爲付出候事
- 一 花山院様十八日夜字の鳥へ御着船十九日字佐御許山に御着陣之由ニ而餘程騒動いたし候處右御家ニ而無之長州様御勢之由
- 一 廿五日右長州御人數四日市へ着候而宇佐御出勢々色々御談判詰り宇佐ニ而和融之由ニ而同所會所ニ而面會いたし候處

花山院方申譯難立候付平野四郎切腹右ニ付長州人討取即時ニ佐田内記兵衛討取追々四日市方長勢相募御許山に押寄暮六時比攻落し五時比本陣石垣坊西ノ坊焼拂引取候  
一廿四日殘黨可籠と長兵方成就坊焼拂候事

獄門

右四日市高札場にまらし有之候

廿五日

右獄門壹人相増名前

廿六日

今朝承候處昨夜久留米カ七人御先立四日市御着南之口屋林平宅に御止宿跡勢百五拾人程或百人共申麻生迄昨夜御着之山此度浮浪上共口ニ正義を唱盜賊之所業せし御許山へ立籠頼へ長州之名を借り今度村々出張退治いたし候條人夫其外登山無用たるをし若手傳等いたす者ハ同罪たるをたもの也

正月

右之通張紙字佐四日市中須賀所高札場に張有之よし

正月廿五日豊後在勤我藩郡代飯田熊之助堀内源之允御許山暴徒落去の件を在藩同僚に通報す

豊後御預所出張之御郡代飯田山浮浪落去ニ付而之報寫

前略尾本山屯集之徒種々之流説有之去ル廿日比花山院御使者として杵築日出ニ被差越夫より別府陣營ニ罷越候との取沙汰有之山横灘筋古市村庄屋新之取カ早打高松へ申越別府方殊之外人氣動揺いたし候且其御薩州蒸氣船佐賀關に碇泊頭成敷別府に敷入港日田に罷越候との術説も有之自然者應接をいふし可申哉と私共兩人共ニ別府へ相詰居申候處薩

出 張 中

柴 田 直 三 郎 十九才

平 野 四 郎 二十一才  
佐 田 内 記 兵 衛 三十三才位

船者青島之様ニ乗出尾本山使者之杵築府内迄ニ而引取別府へ者罷越不申然處廿一日之夜高松御陣屋北向へ登丁計隔居候百姓家へ線香を余計ニ束ネ火ヲ付屋根ニ指有之殆と燃付候を所之者見當取消候由別府へ注進有之賊徒之潛伏茂難量且京都へ飛船差立之儀等被是心配筋は有之候間去ル廿二日カ引分レ熊之助儀者高松へ相詰源之允儀ハ別府へ相談録々守株仕候乍俾御休意被成下候様奉願候然處尾本山賊徒落去之模様昨夜追々聞込候次第荒々別紙ニ一ツ書を以言上仕候未タ確報者得不申候へとも兎哉角御心遣可被成下と奉存候間先御安心之たま奉報告候其後猶處々より知せ來候趣大概相替不申候賊徒者孰茂別府出張所を避候而由布院筋より球珠日田兩郡ニ懸雪類候模様ニ相見申候日田出張之御物頭中右事變之儀ニ付最前茂取遣いたし候間尾本山落去之模様心組ニ茂相成可申奉存候間此元カ荒々可申遣奉存候取紛右錄上迄草略如是御座候以上

正月廿五日

堀 内 源 之 允 也  
飯 田 熊 之 助 也

御 郡 代 宛

猶々一昨日粗録上仕候薩人鶴崎に入込居其末三佐へ罷越當時竹田表へ御招ニ相成專國事論判いたし候由右者松山左内ト申仁之由ニ御座候同人者尾本山屯集之徒花山院義集ニて茂可有之哉之見込と唱竹田表より茂御使者被差越候筈と敷承申候同御領御人敷上京之筈ニ而既ニ乗船ニ相成居候處本山左内説ニ者當分御懸留ニ相成方可然との事ニ而竹田茂猶豫ニ相成候哉今朝迄ハ川口ニ繫船いたし居候由ニ承申候如何成子細ニ候哉手續を以内密聞繕候様手配置申候一昨日野津原瑞嚴寺住持より薩人之論判木村四郎助迄申置候段申上置候處右寺號ハ私聞誤ニ而過瑞寺ニ而御座候此住持ハ何ぞ遺意之筋も無之様ニ相見唯々當方之爲と存込候より申出候事と相見申候下略

聞取書

一長州奇兵隊渡海宇佐大宮司方ニ而馬城峰に引合頭分五人廿三日應接賊徒將机ニ懸初之程奇兵隊平伏應對之中賊徒將机

明治元年

四三



下伏候處登人を討果四人逃出候を登人裏手之溝ニ切込三人者逃去同夜中馬城峰大炮之響火手夥敷立石より茂人數  
繰出日由より茂西鹿島越へ出張之由長髮落人夥之者同夜頭成ニ止宿廿四日五ツ時分出立行向相分不申候由之事府内役  
人立石  
ニて  
聞取

一昨廿四日由布院筋村々に浮浪躰之者多ク入込候段列府へ致注進候間犬塚孫一郎毛利劍定詰并野津原手之内に五拾人引  
連右方角へ繰出潜伏之者も有之候ハ、一應々接之上押捕若手向いたし候ハ、討留候様申付横瀨筋ニ茂雪頼可申哉窮鼠  
之心遣茂有之候間別府へ者高松より猶人數三十人急連繰出置候事

一毛利莫并定詰之内飯塚哲太列五六人立石其外所々に物見ニ遣置候得とも今朝迄ハ登人茂罷歸不申尤飯塚哲太よりハ久  
留米長州より馬城峰に仕懸候由注進いたし候事

一日出藩重役が池部貫太と申仁を態ト別府へ差遣一昨夕長奇兵隊馬城峰に責上賊徒敗北之由承候段相知らせ候事

一馬城峰賊徒長之報國隊と唱花山院官軍召募之趣申聞中津勢疑惑之由ニ而長州へ懸合ニおよひ候由右使者と行違ニ奇  
兵隊出兵馬城峰ニ責懸候由府内之探索

一日出藩池部貫太噂ニ賊徒ハ元長之報國隊之ものニ而府所ニ不遇ニ而渡海四日市亂妨馬城山ニ櫛籠候由其砌奇兵隊之内  
が弱年之者六七人強而連越決而相歸シ不申却而無禮を働候付人數差向候由之事

但弱年之者之公家衆ニ偽紛いたし候たま召連たるよやとの風説

右之通ニ而馬城峰賊徒退散ニ之相違有之間敷此元が差立置候外聞之者罷歸候ハ、彌以懺儀相分可申退散之賊徒所々  
潜伏猶又嘯集茂難量候間支配地之分者精々駆出可申隣軍諸藩へ茂其趣ハ申談可仕と奉存候事

正月廿五日

飯田 堀内

正月廿五日肥前藩故の如く長崎警衛を命せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

慶應四年正月上旬

（三月十一日道家松野村上松本より送附の内）

一若殿様に御知せ以奉札左之通

鍋島肥前守様

正月廿五日大政官代に御重臣御呼出ニ而長崎表御警衛従前之通被 仰出候段三條大納言様方御書付を以被仰渡候由

正月廿五日尾張藩世子徳川元千代着京す

〔一新録自筆狀〕

（慶應四年田中八郎兵衛持越様書）

同廿六日

一徳川元千代様昨日御上京

但尾州老候去ル十五日京發清洲に暫御滞廿日名護屋ニ御着爲御代元千代様御出之由也

正月廿六日三條家より我藩に對し苞互私謁の禁令出たるを以て爾後音物贈與を謝絶する旨の通  
報あり

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三條様より之紙而卷込共寫

三條様より丹羽豊前守を以、、然者別紙之通被仰出御座候付以來御音物等若被爲在候共其乍御失禮御斷可被成候間  
此段爲御心得可申入置旨ニ御座候仍得御意度如斯御座候以上

明治元年

四五

正月廿六日

寫

苞直私謁之儀者古賢之誠モ有之誰彼度所知ニ候得共弊政御一洗之今日從前之類風ヲ襲ヒ賄賂ヲ以役人に及囑託候輩於有之者固不可然事ニ候自然右様之儀被行候而者自ラ依怙最負之取計ニ度及無偏無党公平之御政道ヲ破ニモ立至り可申大事候間以來金幣者勿論瑣屑之音物タリテ堅可爲停止萬一不悞法令密々ニ練受候者有之其儀相知レ候ハ、双方共乾度可被及御沙汰候事

正月廿六日日本藩世子喜延は大坂遷都の議に關し更に意見書を捧呈す

〔王政復古帳、京都井江戶返達御用狀扣、尊攘録諸家建白並御屆等〕

正月廿六日岩倉樓に實地持參之御書付寫

遷都之御一條御下問ニ付而者勿々之際深く研究も屆兼候得共人心恟々之折柄態々御取起之不可然段御答申上置候處其後御廟議如何相運候哉猶精々勘考仕候得之實ニ大非常之御事柄何分案勞ニ堪不申仰願之即今之動搖今少御鎮撫之上衆望之所歸を以御取堅被爲在度奉懇願候此段猶申上候以上

正月廿六日

細川 右京大夫

正月廿六日滋野井公壽の隨身山本太宰小笠原大和等美濃國にて暴行せしを以て誅戮せらる

〔嘉永年間以降記録を印〕

〔番外三 池田書類、八木田小右衛門狀拔書〕

一同廿五日 滋野井侍從公壽轉元幽閉之人ニ而方今之事體傍觀ニ不忍列國之義徒を察候趣ニ而去ル六日京師脱走美濃松尾寺に走り同所より歎願之書被差出候處 勅免ニ相成中山道之先鋒被 仰付置候然處今朝滋野井同伴之綾小路侍從俊

重卿當時大連署之書翰隨身荒木藤一と申者持參ニ而橋本柳原卿に差出今日迄ハ所勞風邪ニ付參向成兼候趣申來候處夕七比桑名問屋より四日市問屋に滋野井卿人數三百計通候ニ付膳部之手當致候様申來候段中越候ニ付兩卿並參謀江田

武次長木も甚不審ニ而自然ハ浮浪之惡徒等計策も難計且敵地より參向ニ付嚴備致居候處幕比滋野井卿隨身川北眞一郎江田と申者先ニ參候段申入候ニ付橋本卿雜掌より小右衛門に應接致吳候様頼ニ付逢候而今朝之書翰と齟齬致候趣の詰問候處滋野井家ニハ其邊之儀一向存不申と甚不審之弊ニ付小右衛門申候ハ得斗相考候ヘハ所勞ハ綾小路卿ニ而同命を蒙候人ニ付連署ニ認められ候と被考候併今晩御參向之儀ハ最早備向も申付置候間出先之者より御出懸リニ相成候共御通し申間敷候間早々御引返し其段仰通明朝早々今朝之書翰ハ間違候段御よりを御もとし候而御出可然と申向候處同意ニ而川北歸り滋野井卿ハ海雲寺と申寺に引歸され候

廿六日昨日之趣ニ付今日者滋野井卿參向無相違浮浪引卒且敵地より被參候事ニ付嚴重ニ備を固メ待居候處參謀海江田武次卿ニ迎茂是より追返し候と申儀ハ一旦 勅免之公卿ニ付成兼可申去とて直に兩卿と會合ハ議合兼候其譯ハ烏合之兵を既集官軍と標旗を張動 王正兵之意ニ合不申候間一先其趣及議論可申と相決待居候處七ツ半比本陣に被參候然處右隨身之出頭山本太宰小笠原大和小野幡之助川北眞一郎玉川熊彦と申者長島河内守様に參り種々難題申懸人數□□を乞二萬兩之獻金を募候得共小身ニ而任心底不申三百兩差出候處押而歎願書を認させ是迄幕府隨從爲謝罪獻金致候段書面を好ミ其金持參本陣に參り其外暴掠一々惡事皆五人之者より出候段分明ニ付滋野井ハ石藥師に退陣被申付右五人ハ行列ニ後レ參り候ニ付見張を出置問屋に茂申付參候ハ、本陣より御用有之候間罷出候様申付置候處先ニ小笠原大和參り候間海江田より惡事之段申聞滋野井卿隨身を放錠意ニ依而繩を懸候段申渡吉川熊之允荒木善右衛門長鹽平格擲取申候其次ニ太宰參り右同斷ニ付太田角之允渡置彌兵衛山代丈之助片山傳四郎古賀作十郎東太郎平召捕申候而夜八時比御瀧河原ニ而因州に引渡兩人共刎首申候檢使神足十郎助小右衛門兩人相勸申候不思儀なる處ニ而井手口檢使相勸申候玉川川北之肥前大村藩より召捕本陣に引付候處其儘因州に預ニ相成申候

廿七日夜四ツ比龜山藩より太宰列之殘黨小村雲遊齋赤木小太郎鈴木主馬三人を生捕本陣に引付候處、鷓鳴比昨日生捕之川北平川都合五人御瀨河原ニ而刎首檢使小篠彦右衛門後藤太兵衛雲遊齋刑場ニ臨辭世前後聞出シ不申候

〔一新録白筆狀〕

慶應四年正月廿七日桑名出張下津水屋より京師へ之報告

一昨廿五日雇飛脚を以て御通議置候出張御物頭中より馬御買入之儀向後彌關東御鎮撫として押詰之御模様ニ付而急ニ被差越被下候様猶又達出ニ相成候間早々御取計有之候様  
一步御使番歩御小姓之内三遠尾州等を初諸藩に急成御用有之兩脚衆より 御所に急成御用有之甲斐武一郎并先日玉藥才料ニ而被差越候外様足輕差添早打を以て被差立候ニ付申達候  
桑城御受取之儀先日得貴意候通彌以恭順掃除等も相濟候由ニ而明日五時當驛御出馬一ト先本陣へ御入之上桑城御受取之御模様御座候

手を分兩脚衆より被差越候付而今六七人程不被差越候而之如何體ニ茂御人配り六ヶ敷他所御使者等之儀者外手ニ而者御用柄不馴之稜茂有之委細之儀ニ甲斐武一郎より可申達候間御小姓頭にも御唱合至急ニ被差越候様  
一滋井樺綾小路様當驛へ御出兩脚衆に御達被成度との御直書參候處猶又御不快ニ而御出難被成と申儀申參居候處其内滋井様ニ之桑名より廿四日ニ御出之段同所宿驛より知せ來り人數も餘計御引率之由ニ付前條御直書之趣と始終齟齬いたし候付旁一昨々晩之處御入込押止ニ相成尙又昨日伺ニよつて晝九ツ時分當驛御本陣へ御出ニ相成候處此節敵地より御出之儀段々御押詰ニ相成候處御一言も無之其上御身附主本之者ども御尋之處山本太宰以下五人之名前御書記ニ相成候付差寄御供ニ而罷越候太宰大和之兩人參謀宅に呼出し詰問ニおよひ候由之處既増山河内守様御領永島に參り官軍之名を假り金錢等掠取之次第等稜々糺明いたし候付右兩人は別紙之通此方様手に召捕因州に御引渡之上即夜當驛川原ニおゐて刎首被仰付小野幡之助と申もの一人いまた御手ニ入兼玉川河喜多以下今晚召捕候小林列之桑名邊に残り追々ニ入

込候を被召捕都合五人之糺明之上猶又今晚刎首被仰付答之模様承り委細之儀者事濟之上猶相達可申候  
右者急御用之便宜ニ御座候間何茂委曲ニ不能要用迄稜書を以申達候事ニ御座候以上

正月廿七日

永屋猪兵衛  
下津籠殿

京都詰御奉行衆中

浮浪兩人四日市驛於御本陣召捕

浮浪 小笠原大和

右召捕候節出張之面々

繩之役 吉川熊之允

介添 荒木善右衛門

介添 長鹽平格

浮浪 山本太宰

右同斷

見締 東太郎平

介添 渡邊彌兵衛

介添 古閑作十郎

繩之役 片山傳四郎

介添 山代丈之助

四日市宿於御瀨河原右浮浪兩人刎首

明治元年

以上  
正月  
龜山石川宗十郎様御人數より正月廿七日演陰ニ護送して本陣に來ル

浮浪 小林雲遊齋  
赤城小太郎

四九

檢使 八木田小右衛門

檢使 神足十郎助

太刀取 因州藩

浮浪 玉川熊彦

右兩人從大村藩召捕御本陣へ差出因州藩に引渡

河喜多眞一郎

檢使 小篠彦右衛門

後藤多兵衛

佐々木司馬

五〇

滋井様御身附ニ居候主本之名前御尋ニ付御同方様より御書記ニ相成候由左之通

山本 太宰

小笠原大和  
小野幡之助  
玉川 熊彦  
河喜多真一郎

正月廿六日本藩偵吏首藤敬助大坂にて探知せる中國四國征討軍の情況を通報す

〔一新録探索報告〕

聞取書

一當地御帶座ニ相成居候征討將軍様より被出候御號令京師の方と相違之稜々有之其事ハ伊豫松山讃州高松御追討之儀於京都土州に御委任ニ相成錦旗を茂賜り候當地ニ而之四條様は中國四國御征討被 仰付薩長土藝御附添去ル十八日御發途同日西宮十九日兵庫廿日明石同廿三日姫路城に御入廿四日四國に御渡海直ニ松山に御懸り之山右等之次第土州ニ而之不平を鳴らし居申候事

一宮様ニも頃日來從 朝廷一ト先御歸京之段被仰下候得共于今御歸京無之如何之譯敷定而薩長杯自由之致し能キ爲メ御引留メ申上候モノと見込申候向も御座候

一讃州高松ハ土州より出兵致し置候處降伏仕候由依之四條様之直ニ松山ニ御懸り申事ニ御座候

一當地町人ニも大家十軒ニ之從 朝廷御用金調達之儀被 仰出其次通り之豪家十軒ニ之 征討將軍様より御用金十萬兩

差上候様被 仰付候由

一備前勢中國處々横行幕領諸藏等盡ク封印いたし候由

一備後福山ニ之長州より人數差向少々之砲撃も致シ終ニ降伏致候由是之未タ從 朝廷何之御沙汰も無之内之事ニ御座候

右之通ニ聞取申候以上

正月廿六日

首 藤 敬 助

正月廿六日我藩鶴崎番代大河原次郎九郎は杵築藩の報知を添付し御許山屯集浪士等の狀況を藩政府に申報す

〔一新録自筆狀〕

豊前馬城峯に橋籠居候浪士之儀ニ付立石表より之來狀相添杵築御家司より別紙之通申越候間御家老中にも御達書被下候以上

正月廿六日

大河原次郎九郎

御奉行業中

以飛札致啓上候然之別紙之通立石表より申越其後同所に差遣置候探索之者より申越候は長人四日市西之坊へ着陳之上奇兵隊よりヲモト山へ使者を以下山之儀申遣候處壹人騎馬ニ而下山四日市へ相越候處奇兵隊と談判之上ヲモト山へ引取又候五人下山致し猶奇兵隊と手強議論および即座ニ貳人首を刎候處外三人ハヲモトへ逃登候よし右始末立石之者儘見届罷歸候處間もなく奇兵隊ヲモトへ攻登燒打ニ致候様子ニ而昨廿三日夜五時頃彼峯ニあたり火比手相見地蔵峠之方へ凡十四五人落行候段注進有之即刻立石より一番手御繰出山浦並町口峠御手配り相成候段申越候尤右奇兵隊ハヲモト山を相守り候哉又四日市之方へ引候哉其邊ハ不申越候右之段不取敢爲御知申候猶此上相替候儀も候ハ、早速爲御知可申候右之段爲可得御意如斯御座候恐惶謹言

正月廿四日

坂 西 武 兵 衛  
中 根 源 右 衛 門

明治元年

五一

大河原次郎九郎様

加藤孫太夫

以飛札致啓上候然之兼而御聞及ニも可有御座馬城峯へ先日より籠居候もの共へ昨日長州勢押來豊前四日市へ罷越即刻馬城峯之浪士と數度應接有之今七時より小筒ニ而打合候よし依之物見之者差遣候處長州十分之勝利之旨届有之候間近邊迄少々御出勢相成候此上如何體之變事も難計候間右之段不取敢爲御知申上候恐惶謹言

正月廿三日

三重多仲  
山田民彌

加藤中根坂西宛

正月廿六日薩摩藩士等天草郡に來たり寺院及び庄屋等に對し地方鎮撫の爲め出兵せし由を告げ更に申達すへき件あるを以て陣所に出頭すへき旨を達す

〔一新録探索報告〕

今般上方表變動ニ付郡代引拂ニ相成浮浪輩狼藉およひ候間へ有之鎮靜方として出兵いたし右ニ付申達儀有之候條來月朔日頃無相違當所陣屋に可罷出候若病氣又は幼年ニ而難罷出者は名代印鑑可致持參候此段觸達候以上但銘々印鑑無失念可被持參候

辰正月廿六日

薩州

染川五郎左衛門  
安田泰助  
園田與藤次

寺院 大庄屋 遠見 山方  
庄屋 年寄 唐人通事

正月廿六日土佐藩兵松山城を徇ふ

〔一新録自筆狀〕

〔二月廿八日京都發良之助様御直書中巻込〕

宇和島藩松根内藏談話中要録(抄)

松山征伐ヤして同人(根)も出立長土宇之よし然處長州ハ宿怨有之候事ニ付土州ハ一日早ク出立取扱松山降參之よし尤蒸氣船ハ伏罪中ハ入不申ト長州ハ借用いたし候よし長州ハ軍艦五艘英ニ注文のよし富國ト被察候

〔編者曰、土州ハ一日早ク出立とあるは長州兵よりも土州兵の方一日早く出發せるなるへし、次の防長回天史の文を参照すへし〕

〔防長回天史第六編上〕

明治元年春期ノ大勢及ヒ毛利氏其二(抄略)

大阪城既ニ陥リ中國四國征討總督四條前侍從(調)同軍監五條卿(調)明石ニ至ル我軍ニ令シ先鋒トシテ伊豫松山ヲ討タシム此ニ於テ堅川大和杉孫七郎等ハ片上海濱ヨリ伊豫三津ケ濱ニ航シ陣營ヲ布ク(中略)松山藩ノ軍艦一隻五ヶ島ニ泊ス艦ハ幕府ヨリ杉孫七郎等五十餘人輕騎三隻ニ乗シテ之ニ通ル艦上人ナシ杉等乃チ艦ニ入り搜索シ松山藩士以下水夫七十餘人潛テ船底ニ在リ杉等遂ニ之ヲ奪フ此艦ハ後チニ華陽艦ト號セシモノナリ我軍進ンテ松山ニ入り松山侯ニ道後村常信寺ニ接見ス是ヨリ先キ土州藩松山征討ノ朝命ヲ受ケ松山藩ニ説ク所アリ我軍(長州)松山ニ入ルニ先ツコトニ日此月二十松山藩既ニ土藩ニ答フルニ領地ヲ奉還シ天裁ヲ待ツヘキノ意ヲ以テセリ我軍ノ松山ニ入ルヤ藩主松平定昭寺院ニ盤居シ書ヲ以テ恭順謹言ノ意ヲ表シ副フルニ老臣ノ書ヲ以テス

明治元年

此度以朝命兵馬被差向候旨奉恐入候於定昭聊 朝命違背王師ニ抗拒仕候心底毛頭無御座候既ニ所領差上寺院ニ蟄居仕謹テ奉待天裁候間異心無之條御察了被成下 朝廷向御執奏被下度奉存候誠恐惶謹言

二月

松平定昭

我軍乃チ退テ三津ヶ濱ニ屯シ書テ朝廷ニ上リ狀ヲ稟ス既ニシテ朝廷土藩ニ命シテ松山城地ヲ監セシム我軍因テ相踵テ歸藩ス此ニ於テ乎内海ノ沿岸復々朝敵ナシ

正月廿七日太政官代を二條城に移さる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

〔二月四日京發村上松本より同十四日着の内〕

一太政官代是迄被用九條家候得共從明廿七日以二條城太政官代ニ被用候事

一參與役所同城内ニ被設候間惣而是迄通取扱候事

正月廿六日

〔全書〕

〔二月四日京發有吉外五名より同十四日着の内〕

是迄以學習院金穀出納所並會計事務掛裁判所ニ被用候處從今廿七日二條城内ニ被設候間惣而是迄之通取扱候事

正月廿七日

正月廿七日松平氏を稱する者は其本姓に復せしめ又宮門警衛追討出兵を命せられたる者には旗幕挑灯等菊花御紋章を使用せしめらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

今廿七日内國事務懸リ御呼出ニ付大政所に罷出候處非藏人松室信濃を以別紙二通御渡ニ相成筑前中談西海道筋御觸

ニ相成候様被申渡候付例之通廻章を以差廻置候此段相達申候以上

正月廿七日

御留守居中

御右筆頭兼中

徳川慶喜反逆ニ付而者松平之苗字ヲ稱シ居候族者向後大小名共連ニ各本姓ニ復シ候様可仕御沙汰候事別紙

今般御制度御改正ニ付諸藩 宮門警衛被 仰付置候銘々旗幕並挑灯等ニ至迄菊御紋相用候様可仕 御沙汰候事

但追討被 仰付置候諸藩出兵之面々以來一隊ニ一流宛菊御紋御旗被下候間於家々可相調候左候而家之紋相用候儀ハ可爲是迄之通候

〔一新録自筆狀〕

〔慶應四辰二月四日京發御用狀付稟書講口三宅より〕

正月廿八日

一宮門御警衛被 仰付置候銘々旗挑灯等ニ至迄菊御紋相用候様且追討被 仰付置候諸藩出兵之面々之一隊ニ一流宛菊御紋御旗被下置旨及松平之苗字茂木姓ニ復候様昨夕御沙汰

正月廿七日日本藩世子喜廷大政官代に出勤し撰述せる刑法柱礎を進達す是日岩倉具視太坂巡狩あるへき旨を喜廷に告ぐ

〔一新録自筆狀〕

(慶應四年正月廿八日京發田中八郎兵衛早打ニ而同年二月六日藩持越評議校書之内)  
一 刑法事務總督被爲蒙仰候付而之事

但一旦ハ他之御分職ニ御願替之思召被爲在候得共實ニ御家御相應之御職掌ニ付其儘御勤上之方ニ相決既ニ廣田貞右衛門岡松辰吾に御用懸被仰付柱礎大略之まらべ一冊出來今日大政官代に被差上候右寫ハ追而差出可申候

〔坂本彦兵衛日記〕

正月廿七日

一 刑法概略しらへ一冊出來今日上ル

〔林新九郎日録〕

一同(正)廿七日雨、世子二條城に大政官被移候後初而御出勤幕御歸館

三職分部等紛々創業ノ是非未可知刑法事孤雲太夫初木村裁決有之タル由也

一同(正)廿八日暖陰、世子已ノ刻御供揃ニ而二條に御出勤也遷都之儀巡狩トシテ大坂に暫行在右之趣昨日世子に岩倉公御申有之タル由也

正月廿七日日本藩志方司馬助徳川慶喜の我藩主慶順父子に與へて謝罪の求解を依頼したる書を携へ江戸より京都壬生の藩邸に到る

〔一新録自筆狀〕

(慶應四年田中八郎兵衛持越校書の内)

同(正)廿七日

一 今曉江戸表より志方司馬助着徳川家も謝罪之方ニ相運候由則別紙書付之通ニ候へ共今日之形勢ニ相成候而之縛ニ付候

共死ニ入候とも 朝廷之御差圖次第と申御差入ニ而兩山之内に御立退御眞位之稜目立不申候而ハ逆茂御寛宥之筋ニハ相運問敷と囁合候事

(別紙)

一 翰拜者然者去ル三日先供之兵隊鳥羽伏水兩道より入京之處薩藩上差留應接中伏兵一時ニ起り發砲及候ニ付兩所とも無餘儀應砲怪我人等多人数有之實ニ意外之次第ニ而不料奉驚 宸襟人民を損傷いたし兼々之素意ニも相負候間斷然大坂城を尾越兩家に預兵隊を爲引揚候全く一時供先之爭鬭傳會して或之朝敵之惡名を負しむる哉ニも承り實ニ意外恐敷之至ニ付畢竟金城を弃て赤心を表し候得共何分近來事々素心に負き候事のみニ而且多病ニ相成事務取扱兼候間退隱いたし候積何卒是迄之御厚誼不相替御盡力被下 朝廷を始列藩にも御説諭前文意外之汚名相雪き候様此上ニも御鼎力千萬拜囑する所ニ御座候書不盡言萬而幣

正月

慶

喜

越 中 守 殿

右 京 大 夫 殿

〔林新九郎日録〕

一同(正)廿九日雨、世子已ノ下刻方二條に御出務志方司馬江戸方持參之御直書披露澤少將九州鎮撫として出張ニ付御直書も中島嘉右付添して出立

正月廿七日我藩舊幕領地にして從來管轄若くは警備せし所の豊後國四郡及び肥後天草豊後日田等の處置に關し朝廷に稟申し即日指令を受く

〔一新録自筆狀、京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳、時勢雜録〕

正月廿七日左之伺書參與御役所に御留守居持參相伺候處即日御差圖有之(京都並江戸返達御用)  
(狀扣に此の口書あり)  
 徳川慶喜領地之内ニ而豊後國速水郡大分郡直入郡國東郡村々之儀昨年越中守に相預政事向私領同様取計非常之節者防禦筋を茂致指揮候様依頼仕且又肥後國之内天草郡并豊後國日田表之儀者前々より非常警衛筋越中守に永任仕候付相應之人數差出置申候處此節ニ至候而者朝敵之領地を致守衛候形ニ相成候間早々引揚可申處此以後右領地者 朝廷之御料ニ歸入可仕候間追而御取扱筋相定候迄者猶更守衛之人數差出置鎮靜方指揮可仕哉又者引揚可申哉不蒙 朝命候而者甚以疑惑仕候段越中守申付越候間急ニ御差圖被成下候様奉願候以上

正月廿七日

細川越中守内

青地源右衛門

御付札  
追而御沙汰可有之候付當分是迄之通可心得候事

(別紙)

日田代官并役人共疾致退散候得者子細無御座候得共矢張是迄之通代官所に罷在萬一盜賊躰之もの逆賊之從隸と申を以追討杯を名とし却而狼藉を働候様之儀も難量其節鎮撫ニ取懸り候得者逆賊ニ荷蒙之形ニ相成致傍觀候得者盜賊ニ助力之筋ニ相當甚以處置六ヶ敷當惑仕候事

假令徳川之役人たりとも謹無御沙汰を相待之躰候ハ、其分ニ指揮可申候又追討之官軍と稱候共盜賊狼藉之姿候ハ、早々及鎮撫可然候事

正月廿七日

右兩通書之内相伺置候處夕刻徳大寺様御付紙御渡御口上ニ而も御付番之趨ニ被仰渡候事

(王政復古帳に右一行の通書あり)

〔一新録自筆狀〕

(慶應四正月廿八日京發田中八郎兵衛早打ニ而同年二月六日着持越評議書)

一豊後豊前御預所を始日田天草に御人數被差出置候儀徳川家より指揮之儘ニ而ハ不安意ニ付申談居候内御國より申來候趣も有之候付別紙書付寫二通之通今日參與御役所に相達差急候段委細内意申達置候付今夕迄ニハ御差圖可有之左候ハハ大坂迄早打を以差越答候事

正月廿七日

正月廿八日朝議あり關東親征に決す此日征討將軍嘉彰親王大坂より歸京せらる

〔王政復古帳〕

慶應四ノ二月二日參與御役所御呼出後藤彈助罷出候處非藏人松室伊勢を以御渡之御書付寫一通御留守居方相達

東征御進軍可被爲在付大御軍議被仰出候依之去廿八日將軍宮御歸洛被爲在候此段申達候事

二月二日

〔防長回天史第六編上〕

二十八日太政官代ニ於テ朝議アリ關東親征ヲ決定ス此日將軍宮歸洛ス

正月廿八日我藩徳川慶喜追討につきての諮問に答ふ但し我藩は海軍未熟なるを以て陸路より進軍を命せられたき旨を陳す

〔一新録自筆狀〕

(慶應四辰二月四日京發御用狀添付様書溝口三宅より)

正月廿八日

明治元年



一徳川家御追討付而之海陸より大軍可被進哉否之儀昨日御下問ニ付今朝於 御前評議を擬追討被 仰出候上之素より其儘被差置候而可相濟様も無之候間大軍被進候方ニ可有之然處此方様之海軍之御不案内ニ付可相成之陸路之進軍ニ被仰付候様有御座度と相決其趣今日於大政官被 仰上候事

但本文之通ニ之候得共徳川家之舊誼御忘ニ可相成様も無之候間一刻後稜目を被立謝罪之筋ニ相運候様志方司馬助關東ニ被差返内分御盡力之儀も此節評議相決

正月廿八日我藩世子喜廷家臣安場一平山田五次郎が徴士を免せられむことを請願す

〔一新録白筆狀〕

慶應四ノ正月廿八日

安場 一平  
山田 五次郎

右兩人過る廿五日徴士被仰付難有仕合奉存候然處先達而以來溝口孤雲津田山三郎木村得太郎追々ニ同様被仰付置候上横井平四郎山良洞水に茂御沙汰之通ニ而孰成未熟之者共家内而已多人數被召仕候而者大概諸藩之匂配成有之甚以心痛仕候間乍恐一平五次郎儀者徴士被免被下候様奉願候且又向後家内より被召仕候節者前以内分被仰聞候様有御座度此段茂任序申上置候以上

正月廿八日

細川 右京 大夫

徴士被免旨御口上ニ而御沙汰有之候事

正月廿八日九州鎮撫總督澤宣嘉明日を以て京師を發し長崎に赴かんとす我藩中島嘉左衛門外一名を之に隨行せしむ

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀〕

澤前 主水 正

九州鎮撫總督被仰付候間爲心得申達候事

但九州諸藩廻達候事

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

正月廿九日村上松本様書二月十二日達

澤前主水正様九州鎮撫總督被仰付候段之御用狀之通ニ而昨晚右御書付御渡相成今廿九日京地御發途ニ申候事ニ付今早朝志垣傳内を澤様に被差越彼是之御模様御聞合ニ相成候處今日愈御發足ニ而大坂よりハ薩州肥前兩國之内より蒸氣船に被爲召長崎に御木陣被居候由尤御警衛ハ大村様に被仰付御人數御付添申候由依而從 此方様茂中島加左衛門ニ歩御小姓一人被爲附候管ニ而右御船ニ乗組候義御懸合ニおよひ申候處彼方様ニ之被成御太慶候得共他藩之船ニ御乗組之事ニ付此元ニ而ハ乗組出來候哉否御見込出來兼候との旨ニ而何様ニも今日右兩人早打ニ大坂に罷下於彼方聞合乗組出來兼候方ニ候ハ、別船早打ニ而御國に言上之爲下り相成候方ニ相成乗組出來候ハ、兩人之内一人ハ長崎着之上御國に早打罷越申ニ而可有御座候

一主水正様長崎に御木陣御居候ハ、御國よりハ別段御用爲承御使者ニ而も被差出方ニ可有之との此許御役々囑合ニ而勿論其御許ニ而御話合も可有之候得共爲念御申向申候方可然と木村得太郎等ニ付此段得貴意申候得斗可被仰談と存候以上

猶々急速之出立ニ付此段要用迄勿々頓首

〔一新録自筆狀〕

〔慶應四辰二月四日京發御用狀添付稔書溝口三宅より〕

正月廿八日

一九州鎮撫總督澤前主水正様に被 仰付明廿九日御進發之段夜四時分御達〔自筆狀並稔書には明廿九日の傍に二月三日ニ成ル〕との記入あり

正月廿九日

一澤様に肥前之大艦より先ツ長崎へ御越之山相分候積り御國に茂御出之事ニ付爲御用聞中鳥嘉左衛門外ニ歩御小姓一人被差添旨及違費過出立

俱孤雲より馬城峯之方心遣之旨委細申達候處澤様先ツ花山院御説得之上長崎へ御越と追而相決候由

〔防長回天史第六編上〕

明治元年春期ノ大勢及ヒ毛利氏〔抄略〕

開港地ノ事方ニ 朝廷ノ關心スル所タルノ時ニ際シ長崎ノ稟申至ル會々澤宜嘉卿既ニ長州ヨリ歸テ京師ニ在リ乃チ卿ヲ以テ參與兼九州鎮撫總督外國事務總督ト爲シ正月二 十五日井上聞多ヲ外國官判事ト爲シ其參謀ヲ兼ネシメ二十 八日尋テ長崎裁判所ヲ置キ二月 朔日卿ヲ以裁判所監督ヲ兼ネ井上聞多ヲ長崎裁判所判事ト爲シ幾モナク二人共ニ任地ニ就ク

正月廿八日東海道鎮撫總督橋本實梁等桑名城に入る

〔一新録自筆狀〕

〔慶應四辰二月四日京發御用狀添付稔書溝口三宅より〕

同〔二〕日

一桑名より之飛搬到來先月廿八日同所落城之次第別紙稔書之通ニ候且又右之通致落着候上者 勅使も一ト先御凱陣之御

模様と申來ル

稔書

一正月廿七月初夜迄之件々者四日市驛より甲斐武一郎外ニ足輕壹人兩脚衆より之御用ニ而差立候節稔書を以申越之通ニ御座候滋井様隨從浮浪浪本人山本太宰小笠原大和死刑之儀は最前得御意候通ニ而廿六七日兩日ニ被召捕候玉川熊彦河喜多眞一郎小林雲遊齋赤城小太郎佐々木司馬五人之者共武一郎出立後夜九ツ時過山本小笠原同様四日市驛中河原ニおゐて刎首被仰付檢使之前夜之趣を以小篠彦右衛門後藤多兵衛被仰付足輕引率被罷越太刀取之儀者因州水口藩より取計手間なく先々仕置相濟雲遊齋列之廿七日薄陰ニ連越即夜直ニ右之通被仰付不怪急決之事ニ御座候事

但小林列三人之罪狀之稔子細ニ承り不申候へとも山本小笠原同様之者ニ而其上龜山より捕方之節段々手向いたし手統を負せ官軍ニ對し彌以惡逆不道之致方旁直ニ被誅候由尤此節錦旗之塵所右體浮浪之もの共名義を假暴行之聞へ有之候而者官軍之御威武を穢し難相濟依而御果斷ニ出爲中儀と相考申候事

一同廿八日朝六ツ半時之御供揃ニ而五ツ時過四日市御出馬無程桑名領へ御入込之處村々も軒別門戸を締無辨之小前々々迄も何と歎しほノと相見申候とんたに暫く御小休小向村ニ而御晝休に相成同所より先物見を懸一體之模様見繕せ申候上九ツ時過同所御出馬漸々押詰御城下ニ至り候處勿論店々締切一統雁を掛軒別戸口ニ下座いたし老弱男女一際愁眉之體ニ而孰茂涙を含め四五歳之小兒ニ至る迄數萬人之者共聲を呑み只々きよろ々々いたし戦慄恐縮之體ニ而問ニ之袂を濡し涕泣之者も不少見聞ニ堪兼候程ニ御座候尤御城下御入込之頃より先手之諸藩一同城ニ押詰一順大小砲を打懸本丸之櫓へ火を懸落城之體を表し候由兩脚衆二之由輪御通行之砌黒烟空を焦し市中も彌以恐縮之體ニ候へ共町役人と相見委く制し鎮撫之模様ニ相見申候左候而一端本陣へ御立寄之上雜具等之殘し置御軍列次第之通大手口より繰込候處龜山之御人數門々を堅メ二之丸に參り候處家老を初メ大身之屋敷々々左右ニ並居門戸窓々悉く閉塞キ一體掃除茂行届元より藩士一人茂残り居候者無之淋しき有様ニ而猶堀を越し城門ニ入候得者諸藩之人數左右ニ相堅猶又本丸に乗付候

明治元年

六三

處天守跡と相見候廣キ有之其左右先手後陣之全軍各隊伍を不亂整々堂々と居り敷向ふ成る櫓一ヶ所大略下夕火ニ相成居右燒場之際まで此方様一手軍列之儘押詰御旗を進メ兩脚衆を初縫殿も火之口迄乗寄せ暫く御馬を被立諸軍靜り入たる處ニ揚貝を立此時七時軍列擁引ニ猶本之通引揚城乗取之光骨夫々相濟御本陣を取堅メ驛々之通旅宿へ落着候事  
一御城内女中方は去ル廿三日之夜萬之助様四日市へ御發途之跡ニ而御菩提寺正源寺と申寺へ御立除御家中近在八ヶ寺に引分ケ退除いたし候由之事

- 但府中寺院通行見へ懸り之内ふとん荷物等餘計ニ見受候事
- 一府中は元より市在共桑藩帶刀之人者壹人茂見受不申實ニ深愼之體ニ相見候事
- 一市中之體內輪家財等之取片付表分見へ懸に少々宛程々之賣品のミ出置候ものと相見候事
- 一先ツ今日中之當所へ御滯と申儀昨夜被仰出一統にも布告いたし置候事
- 一昨日之合詞鶴龜と被究置候事
- 右之通何之異情茂無之鎮靜ニ赴候事

下 津 籠 殿  
永 屋 猪 兵 衛

正月廿八日

正月廿八日在京我藩重臣等は志方司馬助か齋したる徳川慶喜の本藩主父子に贈れる親書に接し協議して慶喜が謝罪の實效を見はし死生只朝命に従ふとの決心を以て惣督府へ歎願すべく勸告すへしとて志方を江戸へ返すに決す

〔溝口孤雲羈旅中勤勞稜書〕

一徳川家追討付而ハ海陸より大軍可被進哉ト御下問ニ付追討被仰出候上ハ勿論大軍可被進尤我藩ハ海軍不案内ニ付可相

成ハ陸より進軍被仰付度と御答書上候 廿八日也

俱本文之通候處近日(昨日)志方司馬助江戸より着慶喜公より御直書到來先供行遠より斯ク成行候間是迄之厚誼朝廷向宜敷との儀被仰越候付其儀ハ重疊心懸候へとも一ト通之事ニ而ハ迎も御赦有ニ相運ヒ中間敷依之縛ニ就候共死ニ就候共素より 朝命通御心得と申御差入ニ而兩山之内様へ御引籠御儀其餘夫ニ應屹と御謝罪ノ稜目ヲ被立候上一刻茂大惣督之方に御歎願有之候様於江戸盡力之儀司馬助に委細申含差返ス

正月廿九日花山院家理の募に應したる者の行爲を査察し不逞の輩は九州鎮撫惣督に申告すへしとの命あり

〔一新録自筆狀、王政復古帳〕

肥 後 に

九州筋浮浪有志之輩元花山院家理之募ニ應シ所々屯集不法亂妨之所業茂有之趣相聞以之外之儀ニ候固り勤王正義之士トシテ貨財ヲ奪人民ヲ苦メ候事決而有之間敷事ニ候得者篤ト吟味ヲ遂右等狼藉之輩ニ於而者嚴重所置ヲ加エ九州鎮撫總督に可申出候事

右之正月廿九日大政官代ニおゐて御渡(王政復古帳)に此奥書あり

〔一新録自筆狀〕

(慶應四年二月四日京發御用狀添付稜書溝口三宅より)

正月廿八日

一豊後馬城峰へ在陣之元花山院正三位ハ以前三條實美卿より御内談之趣茂有之岩倉様より孤雲に至密御噂萬一盜賊之取扱ニ茂及候而者意外之混雜引起可申と早打ニ而秋吉又助大坂に被差越右之趣田中八郎兵衛へ申通候

明治元年

正月廿九日

一花山院家理寡ニ應屯集之浮浪とも取締候付而御書付渡ル  
但中島嘉右衛門持下

正月廿九日日本藩政府は藩主慶順の時局に對する決心及び藩議確立の要領を在京重臣に通報す

〔慶應三年十月ヨリ  
翌明治元年閏四月迄 自筆狀并稜書、一新録自筆狀〕

以別紙申達候去十二日若殿様依召御參 内議定御褒詞被爲蒙仰候由奉恐悅候就而者彌以御配慮之御儀奉恐入候將又從橋本邊戰爭之末徳川家ニ御東退御追討之儀御下向茂有之候付而之御評議之上御請相濟大津口御固之御人數茂御繰出有之候由且邸内之形勢等茂委細鎌田平十郎古閑富次に追々御含被遣候趣致承知乍恐若殿様御配慮深恐入各御苦辛體察いたし候御國議之次第之前便申達候通之儀ニ而今日之紛擾如斯相成候共從來尊王之御誠意彌以御感發朝家共ニ御存亡被爲在對天下御名節榮然と相立候外無他事被遊御決定爲皇國屹度御盡力可被爲在思召ニ候就而之徳川氏上洛前隊軍裝ニ而押登爭亂を開候一條者其罪を可被糺儀勿論ニ候へ共直チニ御征討被仰出候儀之餘り御刻薄之次第ニ而益天下之紛亂と相成外夷之術中ニ陥り候之眼前ニ付仰願之先 勅使被差下徳川氏之罪を被爲問是非由直を被分候上御處置被爲在度趣御誠意を以懇々切々可被仰立と被遊御決定候間此旨若殿様に御申上右之御趣意萬事致徹底候様御盡力可有之旨御沙汰ニ付此度大變動之飛報ニ付而者雲上日々御登城夜分迄御滯座公子之申上ニ不及休焉殿日勤豐前守殿ニも數日滯留御廟議ニ被列御内外萬般御商議を被爲盡就中會慮之御根軸之富強充備之御趣意ニ而御手許を初冗官或は閑務之役々を被廢減御軍備其他時勢有用之向へ可被遊御培養思召ニ付先御方々様御附御用人並所々殿を被廢此外官府一般最中廢減まらべ被仰付置候付頓而夫々御施行之筈ニ候右之次第ニ付御役々之艱陟等者斷然御沙汰ニ相成一體之人氣茂振勵之勢ニ相見誠以難有此機會を不失御基本御確定之儀執茂盡力申談居候事ニ御座候猶鎌田平十郎に申含置候趣茂有之候間御聞取候様存候以上

正月廿九日

御 家 老  
御 中 老

溝口 孤雲殿

三宅 藤右衛門殿

正月廿九日我藩備頭郡夷則へ兵を率ゐて急き上京すへき旨を命す

〔御國往來狀扣〕

二月十七日着(京都に此狀の着せし日なり)

以別紙申達候郡夷則共出京被 仰付置候付至急ニ被遊御差立旨今日御直ニ御沙汰被爲在候此段爲可申達如是御座候以上

正月廿九日

御 中 老  
御 家 老

溝口 孤雲殿

三宅 藤右衛門殿

正月廿九日日本藩政府は時勢に鑑み從來の衣服制度を廢止する旨を藩内に布達す

〔明治元年  
機密間日記〕

戰國之今日ニ相成候而之軍務之手當專要ニ而一統奢美ニ流候譯茂無之事ニ付衣服之制度之被指止御目見諸御禮を始公私之吉凶共羽織袴着用茂勝手次第且火事羽織之可爲無用旨被仰出候條奉得其意同役に通達組々に茂可被達候以上

正月廿九日

奉 行 所

明治元年

六七

月番御備頭也  
溝口 藏 人 殿

正月某日鳥津久光は賊魁徳川慶喜等を誅伐し宸襟を奉安し且つ大義名分に暗くして賊に黨し王師に抗するものは天誅を加ふべく彼の親族姻戚たりとも自訴の意を發して反正歸順するものは舊惡を咎めず王師に召加へらるへしとの旨を列藩の將卒百姓に告ぐ

〔安津免久佐〕

慶應四戊辰正月鳥津中將布告文

天ニ無二日地ニ無二王是天地の大經萬世の通義也往時 皇國衰弱の弊ニ乘シ徳川氏兵馬の權を掌握せしが以來王室愈不振其漸終ニ至尊徒ニ虚器を擁し玉ふのみ萬姓をして 天朝有る事を不令知近代ニ至りてハ畏クも奉輕蔑 朝威の罪枚擧するニ迫ららず天下の人々切齒悲憤する所就中西洋異邦ニ對し自ラ日本大君と號し異邦の人亦日本大君ト稱すをハ甘して是を受ケ君臣上下の名分地を拂ふニ至まり 朝廷厚く寛典ニ處せらるゝといへども動もせずハ上を欺下を誣の奸跡多く今の徳川慶喜事飽まで 天恩を蒙りたる身として日頃ニ至り王政復古の大典を怨望し陰ニ禍心を包藏し松平肥後松平越中等其凶儀を助ケ天下の亂魁と成り既ニ本月三日暗ニ大坂を發して干戈を王畿ニ動し恐多も奉襲 鳳國の逆謀顯然たるニより即尾越薩長土藝其外誠忠有志之諸侯勤王之義兵を以て賊徒を鳥羽ニ破り伏水之賊陣を討チ官軍大ニ勝利を得て賊の將卒敗走し淀河を経て大坂ニ北ケ行を追撃したり 新天子神聖徵武ニましましノ、速ニ斧鉞の任を仁和寺親王ニ下賜り征東大將軍 宣下ありて諸參謀副將各々 勅命を奉戴シ同九日大坂城を攻拔キ逆賊を追散シ黨與等悉く伏誅シ或逃隱をたり官軍山崎の賊關を破り八幡山ニ據り大坂落城の後ハ接海ハ勿論城市共官軍堅固ニ守り翌十日ニ至りてハ東賊一人も不見落去せり 天兵の向ふ所枯たるを推クらく彼の親從たる井伊藤堂科葉等の輩を初悉く送歎歸順して官軍ニ屬せり爾後賊魁徳川慶喜松平肥後松平越中身首之所在を不知トいへども天網疎として不漏の理

本をハ自然東轉ニ附へき者也卒士の濱王土ニ非るハ無く普天の下王臣ニあらざるハふし誰る今日 天朝多難の際ニ當りて王家ニ勤めざるへき仍而遍く列藩有志の將士四民萬姓ニ布告ス早く賊魁徳川慶喜松平肥後同越中等を誅伐し天地不容の罪を正し 上奉安 宸襟下萬民塗炭の苦を解た 皇國の全軀を鎮靜すべし若今日ニ至り名分大義ニ暗く謀りて王師を拒ミ逆敵ニ私黨する者ハ怨天誅を可加假令徳川慶喜等の親族姻戚たり共大義を守り勤王之志ある者ハ其實効を顯し可奉報 天恩一旦逆賊ニ誅誤せらるる當たりとも自新の意を發し反正歸順之輩ハ不録舊惡王師の内ニ可召加ニ付速ニ去就を決し盡力竭忠共ニ可翼戴 王室首鼠兩端を抱て疑儀猶豫するの族者邪正曲直判然たる 天裁あるを覚者也

正月

鳥津中將

正月某日舊幕府閣老小笠原長行は近畿關西の諸侯各其封地に歸り朝旨を遵奉し士民を安堵せしむへしとの旨を大目付をして傳達せしむ

〔一新録探索報告〕

二月十二日從江戸藩之蒙坂館四部持參之書付

水戸様書之内

二月二日

一大目付戸川伊豆守に小笠原登岐守申渡諸向に相違候書付寫

別紙之通御沙汰ニ付銘々柔地に相越度面々ハ伺ニ不及前廣届申聞候上罷越候而度不苦候  
右之趣近畿關西ニ知行有之面々に可被達候事

正月

別紙

祖宗以來今日ニ至迄各抽忠勤候段感謝之至ニ候然ニ余薄徳不行届不料も近日之形勢ニ立至り近畿關西ニ知行所有之

明治元年

六九

面々ハ自然 朝廷ヲ御沙汰之品も有之候趣ニ付關東に罷在候ハ、采地ニも難を難澁可及誠以愍然之至ニ候銘々存寄次第采地に罷越 朝命遵奉土民安堵相成候様處置可致候左候へハ 朝廷に對し恭順之旨意も相立人民も干戈之禍ニ罹らす尊王之素心ニ相叶候間聊無懸念銘々采地に可相越候尤既采邑御引揚相成り候もの共ハ如何様ニも扶助いたし可被遣候間可得其意旨御沙汰候事

二月朔日東山道鎮撫總督岩倉大夫同副總督岩倉八千丸大垣に至り駐營す

〔防長回天史第六編上〕

官軍東征(抄略)

東山道ニ在リテハ岩倉兄弟鎮撫正副總督トシテ正月二十一日陛辭シ錦旗ヲ奉シテ途ニ上リ(中略)二月朔大垣ニ至リ木營ヲ置ク

二月朔日薩藩士天草島に至り浮浪の浪藉を鎮靜すへき旨を告げ且つ將來薩藩に隨從して違背せずとの證書を島内町年寄村庄屋遠見及び山方役等より提出せしむ

〔一新録自筆狀〕

天草一島之儀者是迄徳川支配ニ而候處今般王政御復古被 仰出未主宰無之折柄浮浪輩共及浪藉候間有之鎮靜方として可致出兵候付人心安堵聊不及疑惑 朝廷之御沙汰可奉待候事

辰二月朔日

薩州 陳營

證文

此度王政御復古被 仰出 舊來之幕役業。離散相成天草孤島失依頼候折柄浪藉體之者數拾人致 侵入無據。御教

助奉願候處御鎮撫方として。速ニ御出勢。被成下。一島人心致安堵 天朝之御沙汰可奉待旨被仰諭御芳情之至定以難有仕合奉存候依之。朝廷より御沙汰迄御當家様に隨從何篇御下知之旨。違背仕間敷候爲其一札差上申候處如件 慶應四年戊辰

二月三日

天草郡

山方役人中  
遠見番人中

拾貳人連名印

大庄屋中  
町年寄中

合九拾人連名印

薩州様

御役人中様

右朱書之通薩藩請書之案文遺候由(原文朱筆)

(編者按、蓋薩人より朱筆の通の案文を渡したるを島民服せず墨書の通訂正して提出せしもの也且又「」にて示せる所は案文になし)

二月某日徳川慶喜は謝罪狀を越前藩に贈りて朝廷に上達せむことを依頼す

〔海舟日誌〕

二月朔日

此頃御謝罪狀京師へ被差遣越前家を以て上達猶 後宮よりも女中衆上京之事あり

相續已來乍不及勤王之道心を盡し罷在候得共非才薄徳事々不行届加之近日之事端奉驚 宸機候次第に立到り深奉恐

明治元年

七一

入候に付謹愼罷在伏而奉仰 朝裁候此段御 奏問被成下候様奉願候以上  
二月

二月二日中院通富三條實美權大納言に任せらる是日二條齊敬藤氏長者を辭し九條道孝之に代る  
〔京都并江戸返達御用狀扣〕

二月二日

中院中納言殿  
三條前中納言殿

同日

九條左大臣殿

右任權大納言

同日

二條前左大臣殿

右爲藤氏長者  
右之通久我様書記方爲知來申候以上

二月十二日

御留守居中

右辭藤氏長者

二月二日神祇制度寮裁判所惣督及び顧問事務掛等任命ありし旨の布達あり  
〔京都并江戸返達御用狀扣、王政日新錄〕(熊本縣 肥後所藏)

近衛新前左大臣

神祇事務總督

應司前右大臣

改大阪領臺

爲同所裁判所惣督

久我大納言

制度寮事務惣督

醍醐大納言

改大和國領臺  
爲同所領撫惣督

爲内國事務掛

東久世前少將

惣裁局顧問

右之通被 仰出候廻覽可返給候也

二月二日

參 與

改兵庫領臺

宇和島少將

尾張大納言殿

越前宰相殿

土佐少將殿

薩摩少將殿

安藝少將殿

宇和島少將殿

細川右京太夫殿

爲同所裁判所副惣督

澤前主水正

九州領撫惣督兼

長崎裁判所惣督

小松帶刀

二月二日九州領撫總督澤宣嘉に長崎裁判所總督を兼ねしめ長崎警衛を大村藩に命せらる

〔三條實美公年譜〕

二月朔長崎裁判所ヲ置キ二日宣嘉ヲ以テ裁判所總督ヲ兼ネ往テ其地ヲ領セシメ大村藩ニ令シ市中ヲ警衛シ總督ノ指揮ヲ受ケシム

長崎表取締勤方市中警衛向并不法亂行之輩取締等總督指揮次第相勤可申事

大村丹後守

長崎表取締被仰出候間九州領撫總督申談取締方行届候様盡力可致候事

大村丹後守

明治元年

七三

二月二日我藩世子喜廷太政官代行幸供奉の命を拜す

〔一新録自筆狀、王政復古帳〕

追而卯刻無遅々可令參 朝給候也

明三日太政官代 行幸供奉被仰下候仍早々申入候也

二月二日

細川 右京大夫殿

追心得書一紙入見參候也

御衣體衣冠

公物  
或直衣  
差務の事

供 侍兩人  
下部兩人

麻上下  
不及香  
雨具用意

主從獨辨用意の事

御道筋

南門ヲ東堀町通ヲ二條二條通ヲ二條城に被爲成候事

俊

政

二月二日朝廷我藩をして延岡藩主に上京の命を傳達せしめらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

二月四日村上松本よ 二月十四日着

(前略)

一内藤備後守様御家來於出先輕舉之取計ニ及候末彼方御家來於此方様に歎願有之候間若殿様に奉伺候上段々周旋有之候

處一昨二日參與御役所へ御呼出ニ而此方様に之御達書御渡有之候間備後守様衆に申達御請書出候付猶取次昨三日參與御役所に被指出候事御座候以上

二月二日參與御役所に御呼出御渡之御書付寫

細川 越中 守に

内藤備後守家來之者歎願之趣於出先輕卒之取計ニ及候家來之者之爲相恒置キ自分儀之早々上京可有之旨備後守に可相達候事

二月

二月二日肥前藩主鍋島直大召命に應し京都警衛の爲め着京す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

(二月四日京發村上松本より同十四日着罷)

一鍋島肥前守様より、肥前守様御事御用有之被爲 召扱又正月より三月迄爲御警衛去月七日御國許御發途之末今二日御着京被成候此段越中守様右京大夫様に爲御知せ宜得貴意候旨肥前守様被仰付如此御座候已上

二月二日

二月二日中津藩島津祐太郎は書を在京我藩重臣に贈りて我藩の救解に依り該藩の嫌疑解除出兵の命を蒙るに至りしを陳謝す

〔一新録自筆狀、自筆狀并稜書〕

御厚配を以御出勞之 御沙汰ニ相成安心仕候御用向有之歸國仕候間委細大膳大夫様に可申上候尙又大目附役武藤吉次郎と申者出京仕候間何角右之者より御指圖可相伺被仰示被下候様奉願候以上

明治元年

七五





二月二日

中津藩

機密間ニテ付札

島津祐太郎

九州内ニ而筑前唐津中津は御疑惑之藩ニ而中津よりハ追々王生邸へ内意敷願之末本文之通相運候事

〔溝口孤雲羈旅中勤勞稜書〕

一中津藩ハ御疑惑之内ニ而御まらへも有之筈之處世子より御内意被仰入置候趣有之此節出兵被仰付一藩雀躍之由

二月二日先に外國人を砲撃したる備前藩家老日置帶力等處罰せらる

〔王政復古帳、一新録皇令〕

備前少將に

家來

日置帶刀

神戸通行之節行列へ立障り候由ニテ英人に兵刃を加に刺へ逃去り候亞佛人并ニ公使及砲發理非之應對不及如何ニも妄動之所爲不届之至候即今更始御一新國事多端之折柄深被爲惱宸襟就中外國御交際之儀ハ御國體ニ相拘候重大之事件ニ付字内之法ニ基不損皇威至當之筋御履行可被遊思召之處御時節柄をも不奉願返而御恥辱を醸候儀重疊不容易罪科ニ付發砲號令之者各國見證ヲ受可致割腹旨被仰付候事  
但罪科人辨明三日カ五ケ日を限兵庫表に致護送外國事務懸り之者に可申出候事  
右一紙

去月十一日神戸通行之初外國人に兵刃ヲ加發砲ニ及候儀ニ付公法を以御所置可相成候者御達之通ニ候即今不可謂多端

日置帶刀

之御時節些少之事件を以御安危相拘大害ヲ醸出別而如何之至ニ付公論決定留斷之上發砲號令之者罪科ニ被處候間早々可差出被仰付候條皇國之大事ヲ體任し可奉安宸襟候事

備前少將に

家來

日置帶刀

神戸通行之節從卒共外國人ニ對暴發不容易所業ニ付被所罪科候全同人下知不行届之事ニ被思召候間謹愼方致置候様被仰下候事

備前 澤井宇兵衛 津田吉左衛門

國元より之使者 池田靱負

〔一新録自筆狀〕

〔慶應四辰二月四日京發御用狀添付稜書溝口三宅より〕

同(月)三日

一備前家老日置帶刀供内より夷人致殺害候一條發砲號令之もの割腹帶刀之柄被 仰付旨被仰出候

二月二日我藩安場一平山田五次郎徴士を免せらる

〔坂本彦兵衛記録〕

二月二日

一安場一平山田五次郎徴士被免

但兩人共御斷ニ因る也

明治元年

二月二日本藩備頭郡夷則兵を率ゐて上京の途に就く

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數 從元治元年 至明治元年二月 坂本彦衛調の内)  
同日(二)

一二番手家老郡夷則組共一備當月二日ヨリ追々ニ國元出發ノ處京地ハ最早平穩ノ趣相聞途中ヨリ引返ス此人數不詳  
二月三日天皇二條城に臨幸あり討幕の大詔を煥發し給ふ

〔王政復古帳、一新録自筆狀、京都并江戸返達御用狀控〕

今度慶喜以下賊徒等江戸城に遁れ谷暴逆を恣ニし四海鼎沸萬民塗炭ニ墮むとするに忍ひ給はず 徹斷を以御親征被仰  
出候就而考御人撰を以被置大總督候間其旨相心得畿内七道大小藩各軍旅用意可有之候不日軍議御決定可被仰出御趣旨  
可有之候間御沙汰次第奉命馳集るべく候宜諸軍戮力一同勉勵可盡忠戰旨被仰出候事

二月三日

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

二月四日有吉青地村上井上津田松本より 同十四日着

早打御飛脚立候間致啓達候、

一主上昨三日二條城太政官代に被遊御親臨候付若殿様御供奉被仰付候段前夕坊城侍從様より御達ニ付昨晚七半時之御供  
揃ニ而一ト先一條様に被爲入夫より御衣冠ニ而御參内太政官に行幸之御勤着御後御座前ニ而御拜被爲在議定所に出御  
若殿様御始三職御役々下ノ參與共一同御列座之上御親征之儀勅命總裁様被仰渡御退座追而猶又玉座前に被爲召御菓子  
御頂戴於御庭御乘馬御覽茂被爲在畢而夕刻還幸之御供奉御勤濟之上於御所參與衆を以天機御伺被爲濟猶又一條様被に

爲入御召替夜五半時過被遊御歸座候(下略)

〔防長回天史第六編上〕

官軍東征(抄略)

明治元年二月三日天皇親シク太政官代ニ臨ミ討幕ノ大詔ヲ煥發シ行在所ヲ大阪ニ置キ以テ親征ノ實ヲ明カニシ尙水戰  
争ノ經過ニ依リテハ關東ニ親幸アランコトヲ期シ官軍進發ノ部署ヲ定ム

(詔書)(前掲の詔書と同)

(部署)

親征大總督府

|      |   |   |   |   |   |   |   |
|------|---|---|---|---|---|---|---|
| 大總督  | 有 | 橋 | 川 | 熾 | 仁 | 親 | 王 |
| 參謀   | 正 | 親 | 町 | 中 | 將 | 重 | 公 |
| 同    | 西 | 四 | 辻 | 大 | 夫 | 菜 | 公 |
| 同    | 西 | 郷 | 吉 | 之 | 助 |   |   |
| 同    | 林 |   | 玖 | 十 | 郎 |   |   |
| 錦旗奉行 | 總 | 波 | 三 | 位 |   |   |   |
| 同    | 河 | 鱒 | 大 | 夫 |   |   |   |

(以下錦旗持手、東海、東山、北陸各道、奥羽鎮撫使及び海軍總督府等の人名列記しあれとも次の二月十四日の條に掲げて此には省略す  
此征討軍ニ出兵スヘキ先鋒警衛等ノ 各藩ハ先ツ左ノ五十有餘ノ諸侯トシ此以外ノ侯伯モ將來方向確定シタルモノハ漸  
次征討軍中ニ加入セラルヘキモノトス

|        |        |         |        |        |        |
|--------|--------|---------|--------|--------|--------|
| 德川元千代  | 紀伊中納言  | 加賀宰相    | 阿波宰相   | 黒田宰相   | 毛利大膳大夫 |
| 細川越中守  | 島津修理大夫 | 池田因幡守   | 池田主税   | 藤堂和泉守  | 池田信濃守  |
| 池田丹波守  | 有馬中務太輔 | 淺野安藝守   | 山内土佐守  | 鍋島肥前守  | 伊達遠江守  |
| 溝口誠之進  | 島津淡路守  | 井伊掃部頭   | 徳川下總守  | 榑原式部大夫 | 分部若狹守  |
| 酒井下野守  | 加藤能登守  | 中川修理大夫  | 藤堂佐渡守  | 大村丹後守  | 大關肥前守  |
| 市橋主税大輔 | 谷大膳亮   | 小笠原豊千代丸 | 諏訪因幡守  | 戸田丹後守  | 酒井若狹守  |
| 大給和泉守  | 石川宗十郎  | 戸田助三郎   | 水野出羽守  | 西尾隠岐守  | 内藤金一郎  |
| 三宅備後守  | 結城佐渡守  | 井上河内守   | 青山久米之助 | 土肥大炊頭  | 太田宗次郎  |
| 永井肥前   | 安藤理三郎  | 増山對馬守   | 稻垣若狹守  | 内藤豊後守  | 九鬼長門守  |

堀 石見守  
合五十七大小名

蓋シ官軍ハ東海東山北陸三道ヨリ進テ江戸ヲ攻メントシ之ヲ總轄スルニ大總督ヲ以テシ諸道ノ總督ヲシテ兵ヲ率キテ先ツ發セシメ大總督之ニ繼クニ在リ奥羽ノ地ハ別ニ鎮撫使ヲ以テ之ヲ鎮定スルノ廟議タリ海軍ハ殆ント有名無實ノモノナリ

〔林新九郎日録〕

一同(二)三日晴、二條行幸世子供奉命セラル予二條に御先ニ參ル行幸ノ道途男女如山二條追手ヨリ拜見聲ハ葱華ト唱廉ヲ透シテ玉體ヲ拜ス今日ノ行幸是カ非カ歎息ニ堪ス下參與ノ諸藩士得意ノ體實可惡

〔一新録自筆狀〕

慶應四年日記後書

同(二)三日

一二條大政官代に 行幸東征軍議被 仰付候此後月中數度 親臨被爲在旨候  
若殿様仕奉被 仰付候官家武家共供廻侍二人下部二人主従獨辨當

二月三日議定中山忠能正親町三條實愛輔弼拜命の旨を達せらる

〔王政日新録(熊本縣總所藏) 京都并江戸返達御用狀扣〕

中山 前大納言  
正親町三條前大納言

自今可爲輔弼被 仰出候事  
但總裁局出仕之事

二月三日大坂裁判所總督を任命し舊幕時代の城代町奉行等の事務を管掌せしめらるゝ旨廻達あり

〔一新録皇令〕

慶應四年辰  
二月三日伊達伊豫守様内山田七右衛門より廻章を以  
申越候寫

大坂裁判所總督  
醍醐大納言殿

明治元年

右之通被 仰出候廻覽返却可有之候也

二月三日

尾州様御初

但醍醐殿之來ル五日着可相成事

外國事務總督  
大坂裁判所副總督

宇和島少將殿

右之通被蒙 勅命在坂相成候故是迄徳川氏之節城代町  
奉行等に被届候事件之可被相達候事

二月三日九州鎮撫總督澤宣嘉京都を發して長崎へ向ふ

〔一新録自筆狀〕

（慶應四年二月四日京發御用狀添付綾書溝口三宅より）

二月朔日

一九州鎮撫深様之先花山院説得之上長崎に御越々昨夕相決候由

但孤雲より御内意申入候ニ因而是如

下二付札

本文之通候處主水正様之昨日也

御發京有之且又豊後の方ハ穩之様子ニ相聞候由ニ而御立寄無之直ニ長崎へ御越

々申儀今日於大政官相分候事

二月四日

二月三日延岡藩在京吏員は我藩より其藩主の上京藩士の謹慎に關する朝旨を傳達せしに對し請書を提出す

〔王政復古帳〕

備後守先供之人數於大阪表輕卒之取計ニおよひ歎願之趣被聞召右取計候家來之者ハ爲相愼置主人儀之早々上京可仕旨御沙汰之趣難有奉畏候急ニ在所表に相達可申候此段貴藩迄御請申上候以上

二月三日

内藤備後守内

池内善藏

二月三日日本藩老臣連署して書を在京重臣に贈り藩世子喜廷の示命を奉する旨を陳へ且つ藩議所決の要領を通報す

〔慶應三年十月ヨリ明治元年閏四月迄 自筆狀 並 稜 書、一新録自筆狀〕

從若殿様被成下尊書謹而預戴之仕候御登京御即下より不測之變動乍恐御中外之御配慮深奉恐入候實地之勢ニ被爲臨候而ハ 勅旨被遊御遊奉候外御他事も不被爲在斷然今日之御運ニ被爲到候旨尊慮之御次第等鎌田平十郎へも被爲仰含候趣共謹而奉拜承難有奉存上候右ニ付而之太守様尊慮之御旨趣も御同然之御筋に而委曲平十郎に被爲仰含候通之御事御座候將又富強充備之御處置筋彌以差入相勤可申旨降命之趣奉畏候右一條付而之此砌猶御出格之思召被爲在冗官虚飾等を被除非常之御改革を以専ら有用之向ニ御力を被盡候御覺悟ニ相成其他御國內御警戒筋も一層充實之御手賦嚴く盡力仕候儀ニ御座候此旨御請可然様御執啓願存候恐惶謹言（喜廷の直書）見當らす

二月三日

長岡帯刀

溝口孤雲様

實名判

三宅藤右衛門様

（外有吉、小笠原、郡、木村、尾藤連署今之を略す）

二月四日我藩在京重臣は先に江戸より徳川慶喜の藩主慶順及び世子喜廷に對する救解書を持參せし留守居助役志方司馬助を京都より江戸へ返し慶喜に其の恭順謝罪の實行を示すべく忠言せしめんとす

〔一新録自筆狀〕

（慶應四年二月四日京發御用狀添付綾書溝口三宅より）

同四日（二月）

一志方司馬助今夕江戸に被差返候付委細中含書付相渡

明治元年

〔全書〕

戊辰春

京擬變動後慶喜公東歸之上 若殿様に御直書被進候ニ付而之評議書於京師出來也

一今般之一條ニ付而之態々御直書被進御書而之趣且司馬助申達候通候得共此許ニ而之既ニ 御親征被 仰出就而之畿内七道大小藩各軍旅之用意茂 御沙汰有之候由ニ付御書狀ハ 朝廷ニ被差上候得共乍御心外御返書ニ難被及段司馬助より申達候而如何

畢而司馬助一己存付ニ而但書之通申出候而之如何可有之哉

但初發伏見鳥羽ニ而手を被出候前後之境ハ極々末之事ニ而根元 朝廷に奏 聞之書付諸侯伯へ檄文之通候得之何様御上京之上兵革を以御處置之御覺悟ニ相違之無之況前ニ御内諭有之候會柔を殊更ニ先手ニ被差出炮器戎裝を以關門ニ相迫且戰爭中日月之錦旗を被差出候後も坂城より頻々人數繰出及炮撃候末御自身ニ之眞之御恭順ニ而聊御異事無之只先供之行違より如是相成との御申譯之相立申間敷候

一實之御謝罪之思召ニ候ハ、一刻茂御城御立退兩山之内杯ニ御置居有之最前御届兼之次第幾重ニも被奉恐入此上之如何様とも 朝廷より御差圖之通御心得之御覺悟ニ而重々御宥有之其儀 日光宮様敷 和宮様御取次ニ而只管御留被仰上且徳川之家名相應ニ被立下候様との儀茂御歎願ニ相成候ハ、御有恕之筋ニも可相運哉何様御謝罪深ク候へハ 天譴淺相成御謝罪候へ之 天譴重相成候儀自然之道理ト被考申候

二月四日我藩末家細川利永上京遅延せしを以て更に急使を江戸に派して上京を促すへき旨留守居役をして參與役所へ上申せしむ

〔京都并返達御用狀扣、一新録自筆狀、自筆狀并稜書〕

參與御役所に

末家細川若狭守儀速ニ上京可仕旨頃日被仰出候付御請之儀者其初同人重役之者より申上置候通御座候然處若狭守儀未上京之程合も相分不申敵地中居住罷在候得者自然者關門拒絕等之煩を以遅延仕候哉も難計奉存候依之越中守家來志方司馬助ト申者此節江戸表に差下若狭守早々上京仕候様申遣越中守家來江戸表に差置候者共も速ニ引揚候様申遣候旨ニ御座候此段無乾度申上置候間御聞置可被成下候以上

細川越中守内

二月四日

青地源右衛門

〔一新録自筆狀〕

〔慶應四辰二月四日京發御用狀添付稜書滿口三宅より〕

同四日

一細川若狭守殿早々上京且御家來引揚西カ之儀志方司馬助を以江戸へ被 仰遣段御届

二月四日在京本藩重臣は花山院の募に應したる徒輩の取締及び關東親征に關する件等を藩政府に通報す

〔一新録自筆狀〕

〔慶應四辰二月四日京發御用狀但他筆也同十四日着〕

別紙を以申達候豐後尾木山に在陳有之候花山院ト申人 勅使之躰ニ申唱就而甚以取扱當惑之由にて 朝廷に窺之儀御預所御郡代より早打差立申來候處其儀之此許ニ而も重疊懸念いたし疾窺取之趣田中八郎兵衛持下且澤前主水正様九州鎮撫被 仰付猶花山院募ニ應候浮浪取締之儀 此方様に御書付相渡夫等之中島嘉左衛門主水正様御用聞として被差添

候節持下候右之趣御郡代に返事仕出爲念寫も不殘差遣候事ニ御座候且又昨三日二條大政官代に 行幸東征御軍議被仰付左候而被爲在 御親征候付五畿七道之大小藩各軍旅之致用意候様今日被 仰出候愈以大造之御運ニ相成候得共關東御謝詞之筋ニ却而是より釀成可申哉追而模様ニ應是より急報可申達候間夫迄之間之決而御人數等御動無之様存候右之外例之稜書差進候間右書面ニ而夫々御承知可有之候鶴崎より之早打差返候付荒々如是御座候以上

二月四日

三宅 藤 右 衛 門  
溝 口 孤 雲

帶刀 將監 美濃  
夷則 男吏 金左衛門 殿宛

〔王政復古帳〕

御中越之通致承知候本文花山院と敷申人馬城峰に在陣不穩舉動も有之趣此元にも粗相聞就而ハ御處置筋共六ヶ敷可有之と重疊囃合先月廿七日一ノ印之通覽書出來 御所に差出御急時之儀奉願候處即夕御付札を以御差圖有之候付田中八郎兵衛翌廿八日曉天より出立之節致持參候跡ニ而晝比ニ至り花山院之先年脱走ニ相成候由右之人にハ三條實美公より何敷内論ニ相成候事も有之趣ニ相聞笑止なるものト長谷様より孤雲殿に密語有之左様之筋ニ候ハ、容易ニ盜賊體之取扱いたし候而ハ如何成混雜引起候も難量ト早打ニ而秋吉又助を大阪迄差下其趣八郎兵衛ニ申通置候然處澤前主水正様九州鎮撫惣督被仰付廿九日より御進發と申儀前夜相分候付早速御模様承繕候處差寄之長崎に御越と申事ニ付孤雲殿カ付札

本文之通候處主水正様ハ昨三日御發京且豊後之穩之様子ニ相聞候ニ付直ニ長崎に御越と申儀今日晝頃相分り候於太政官其御筋に御内意被申入候處花山院御説得之上長崎に御越と相決且又御同方募ニ應屯集之浮浪共御取締之儀付而三ノ印御書付相渡候間中島嘉左衛門ニ持參致せ主水正様爲御用聞一同被差下候事ニ御座候八郎兵衛も主水正様も火

繼ニ而渡海ニ付此返辭相達候迄ニ之疾ク右之次第も相分居可申候得共爲念書寫せ差進候事ニ御座候御書面之趣之勿論御家老衆にも相達候處嚙々御心配可有之何事も惣督に御窺候而御國辱御國害ニ不相成様御取計被成候様との旨ニ御座候當表も不相替種々繁雜不能委曲候以上(本書に添付せし別紙數葉既に正月廿七日の條青地源右衛門の名にて提出せし何及び指令書等なり照看すへし)

二月四日

(此書は正月廿三日付小川次郎助飯田熊之助堀内源之允より在京木村得太郎永屋猪兵衛淺井新九郎宛に贈りたる書の返報なり狀主は木村得太郎なるへし此時永屋淺井は共に京都を發して東下したればなり)

二月四日日本藩政府は書を在京重臣に與へて徳川慶喜に謝罪恭順の實を挙げしめ朝廷に寛大の處置に出でさせられむことを望むへき公正なる我藩議を貫徹せしむるには多少の兵力を要すへしとて備組第二番手を上京せしむへしとの旨を報す

〔一新録自筆狀〕

慶應四二月四日京に發ス御自筆

別紙を以申達候大坂落城後者關東之人數退散いたし京攝之間平穩ニ相成候間二番手御人數之不及出京旨ニ而 御沙汰之趣奉長候然處右御人數一條御國議之次第之委細鎌田平十郎に被爲 仰含置候通之議ニ而夷則共出立之際ニ差臨前段御國議之 御趣意而已ならそ此砌一統之氣合ニ茂係何分御解放之筋ニ運兼且又徳川家ニ而之 君側之奸を可除との名義ニ之候得共 帝京ニ向戎衣砲擊有之たる議之上下之名分必至度難相立事ニ候間其非之屹度謝罪恭順之筋ニ被出候様關東に御説得被爲在其末御寛大之御處置筋 朝廷に之御盡力可被遊議天下之御爲公共正大之御處置ニ可有之左候得之彌兵力も無之候而之御釣合不宜場合も可有之趣之御評議旁最前御治定之通御人數之其儘被差立委細之夷則に被仰含越之御筋茂被爲在候間着京之上猶實地之形勢ニ應公明正大之衆議を盡第一 若殿様思召之旨茂可被爲在候間萬事篤々奉伺候上邸内一致盡力之含ニ御座候條此旨可然様御申越被置候様頼存候以上

明治元年

二月四日

惣

連

名

八八

溝口 殿宛  
三宅

〔京都江戸狀扣〕

以別紙申達候夷則方組共出京被仰付置明日爰許出立之管候此段爲可申達如此御座候以上

二月四日

惣

連

名

溝口 孤雲殿  
三宅 藤右衛門殿

二月五日大和鎮撫總督久我通久出張につき我藩兵百人隨從して京都を發す

〔一新録自筆狀〕

戊辰二月廿日蕭(溝口三宅より二月四日發狀に添付せしものなり)

種書二月五日

一久我中納言様和州爲鎮臺御越ニ付御警衛御人數此方様に被仰付銃兵在御家五十人銃隊組貳拾五人御長柄之者貳拾五人都合百人今朝差添致出張候

但御長柄頭平野太郎左衛門隊長古庄八太義田仙次郎池永一平益田彌彦外ニ鬼塚嘉太郎被差越候是者久我様參謀也

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

二月四日村上松木より二月十四日着

(前略)

一久我前内府様御登居被免御還俗被仰出候御歡之儀ハ被仰付越候通ニ付御使者を以交御肴一折被進候儀取計相濟申候

一中納言様今度補大納言 宣下大和國鎮撫惣督被 仰付明五日御發途ニ付而者 若殿様よりハ御歡被進物も可有之處時 舩柄ニ付不被進段演述素御使者及達申候

此節大納言様を淺井新九郎を御拜借相成候得共木村得太郎ハ徵士被仰付日々大政官出席永屋猪兵衛ハ桑名に出張ニ而 新九郎一人役ニ付御斷相成鬼塚嘉太郎を御貸被進管ニ而御守衛人數百人被指添事御座候(以下略)

〔全書〕

久我大納言様大和鎮撫御惣督として昨五日京地御發途伏見御茶屋御借用御一泊ニ付御屋鋪に御歡御使者可被進處御混 雜ニ茂可被爲在候付直ニ御茶屋に青地源右衛門御使者相勤御見舞として御重詰被進候段御取次に申達相渡申候處被召 出遠方態々御使者見事之御品を茂被進且御茶屋御借用ニ付而之不一ト方御手敷を相懸諸事御可嚙之御取扱被成進厚忝 思召候段御直ニ被仰聞今六日卯半刻無御滯御發途相濟申候此段相達申候以上

二月六日

御留守居中

御右筆頭兼中

二月五日舊幕閣老小笠原長行は我藩外四藩士を江戸城に招きて近日濃信地方に勅使下向と稱し 其舉措甚疑ふべきものあるを以て朝廷に上申して其眞偽を詳らかにし事變を未發に防止するに 盡力せむことを依頼す

〔一新録探索報告〕

辰二月十二日從江戸蕭之雙熊坂四郎持參之書付

明治元年

別紙二通登通ハ藤堂様ニ而出来之書取今夕御呼出都合五藩藝州様藤堂様土州様立花様御屋敷越前様ニ御直書出候由尤御演達之内 勅使御下向御出張迄罷越右之次第を以暫之間御滞在被爲在候様盡力相頼との儀ニ御座候へ共右之何分爰元詰限御請難仕段御断申述候得共不輕御心痛之御様子ニ付自然上州邊迄も御下向ニ相成候ハ、其節ハ今夕御呼出之藩々申談如何様と敷可成丈ハ盡力可仕段申上候處餘程御安心之御様子ニ而乍此上爲 皇國萬民御盡力御頼被成候との御囑ニ相成申候事

澤村脩藏

今五日夜大久保逸翁殿御用談有之候間可罷出旨御目付より通達有之候付西丸へ罷出候處小笠原登岐守殿御逢有之御頼談之趣方今之時體御不都合之次第ハ追々承知ニも相成候通ニ有之候處今度滋野井殿高松殿綾小路殿と申事ニ而濃州信州邊迄親撫使と敷監察使と敷被稱御下向ニ相成御説得之次第ニ是迄徳川家ニ御任せニ相成候土地今般朝敵と相成候上ハ早々御召上ニ相成已來年貢ハ半減ニ被 仰付旨左様可相心得且已後ハ何事も 朝命を相奉し可申との事表分被 仰付候旨之眞之 勅使とも相見へ候へ共御付添ニ諸藩上も無之昨今帯刀と覺しき士三四十人位も御供いたし處々ニ而金銀武器を第一として器物杯餘程御取揚ニ相成候始末何分 勅使之御所行とも相見不申人心甚不服之由關東へ報告有之此儘ニ而江戸近く迄も御下向ニ相成候ハ、旗下並御家人等末々之者共如何成心得違無之とも難受合自然行違有之候而ハ是迄御恭順ニ而御謝罪之詮も無之甚御心痛被成候間尾越二藩各御藩に御頼被仰進候次第 朝廷より御沙汰有之候迄右御下向御扣ニ相成候様有之度各御藩にてハ當時參與御役も被 仰付有之候事ニ付何卒右之次第急連京都に御申上ニ相成候様御周旋之程御頼被成候との御演達ニ御座候間此段急連京都に申越眞之 勅使ニ御座候ハ、御供之面々ニ而右様如何之所行無之様且又偽之 勅使ニ御座候ハ、領主々々には御布告有之御召捕ニ相成候様いつれとも急速 朝命相下不申候而ハ 朝廷御新政之御奉汚 朝命候様之所行有之眞偽難辨處より人心輕侮を生し自然行違之事致出来候而ハ

第一皇國之御爲ニ相成不申關東ニても御恭順之御實跡ニ差障り可申早速此段京地に相達可申との段御請申上退出仕候  
二月五日 澤村脩藏

今五日御目付設樂備中守様々 西御丸に御呼出ニ付罷出候處於柳之間小笠原登岐守様御逢有之近來外夷追々跋扈ニ付御處置柄 王政ニ不相成候半而之行届兼候付共々御盡力被成思召ニ而將軍職御辭退被成候處何等之行違ニ候哉かゝる時勢ニ及候付御恭順被爲在追々京都表に御使御差立ニ相成未何等之御沙汰も無之候内 勅使三海道御下向有之由相聞追々關東近く相成候頃誠精相論置候得共自然末々暴舉相働候而ハ折角御恭順被成候詮も無之深其段之御心痛被成候付右京都に御使者御差出御左右有之候迄其處に 勅使御扣相成候様 御所より御沙汰有之度御盡力有之候様御頼思召候段被仰聞候(澤村脩藏書取)

二月五日我藩士兼坂熊四郎江戸を發して上京するに當り舊幕臣勝安房建白書を草して之を示す

〔一新録自筆狀〕

同(二)十二日

兼坂熊四郎去ル五日夕江戸發昨夜着持參之御用筋書付アリ

〔一新録探索報告〕

小臣是を海外之一知己ニ聞く近日魯西亞首として同盟諸國ニ報告ありと其大趣意ニ之東洋日本の條約ハ徳川氏幕府之職たりし時結ひし所今日ニ至てハ政權 朝廷ニ歸納せりといへとも其國の本身會議一定せし事ありしを不聞一二之候伯倉卒ニ出づるもの尤可疑其條理を究問し其情實を盡し其可討ハ討其可助ハ助くるものハ大國小國を保護し其國の生靈塗炭を救ふ各國條約之大信公義之到る所ふり同志同約の諸國ハ共ニ軍艦を整へ東洋ニ向て其是非を問ハむと其實否ニ至而ハ未タ如何を不知といへとも必其事發せんや必せゞ從古東洋諸國西洋各國之爲ニ蹂躪内附する者比々とし



て皆同属其邦内の小是非ニ相喰終ニ其國家を失ふを不察私を逞くして其極其國を破るゝ不出おま今哉英吉利は兵庫ニあり拂郎察米利堅は横濱ニ居て英の下風を不好魯西亞豈此二國の下ニ附む哉大信を唱て以て我が 皇國を内附せんとす誠ニ其眞意のゑる所是を掌上ニ視るか如し然るを思ハモ侯伯黙止して唯領國を固守せんとするは是を其任といえん哉且勤 王の眞意またいつくゝ在るや百歳ニして公義定る如斯成る者は報國といえむ哉印度支那の轍不遠 朝廷を汚辱し 皇國を内附モ其責何人ニ在る哉況や今百年を不待して小臣其詳解を問ハむとモ希くは私を去り公平至當を以て小臣ニ疑惑を解かむ事を恐惶謹言

二月五日

勝 安 房

右之金坂熊四郎出立之朝見せニ相成候を寫取持參之由

二月六日我藩世子護久親征に依り東海道先鋒を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一筆致啓達候昨六日從參與御役所御呼出ニ付御留守居助勤林新九郎罷出候處今般御親征被仰出候付若殿様東海道御先鋒被仰付候段之御書付一通先鋒出張藩々醫師召連之儀付而之御書付一通征東出張藩々銃隊人數等可書出旨之御書付一通東國中將様より被成御渡候付寫三通差上御請書二通今朝被差出候寫差上申候恐々謹言

二月七日

有 吉 清 助

道家 角 左衛門 殿

以下略

細 川 右 京 大 夫

右今般御親征被仰出候付東海道先鋒被仰付候條國力相當人數差出諸事惣督之指揮を請令勉勵候様御沙汰候事

二月六日

但二月十五日迄桑名に相揃候様被仰付候事

〔溝口孤雲瀨旅中勤勞稜書〕

一二月六日今般御親征被仰出候付 世子君東海道先鋒被仰付國力相當人數差出諸事惣督之指揮を受候様御沙汰主人ハ在京不苦

二月六日征東諸藩其兵員に應し醫師を引率して病院を設置すへきの命あり

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀控〕

先 鋒 出 張 藩 々

此度御親征ニ付各藩人數ニ應シ醫師召連陣營ニ而各醫打寄病院相立療治之手當可致候様可相心得 御沙汰候事

二月

二月六日征東の諸藩は冗員及び不要物品を省き人員砲銃等の數を申告すへしとの命あり

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀控〕

油ニ明後八日已刻迄ニ書付可差出候

征 東 出 張

藩 々 に

一銃隊砲隊之外用捨之事

一隊長司令輔重掛等實地要務之外冗官用捨之事

但其主人は在京不苦候事

一無用之衣類雜具等持參用捨之事

明治 元年

右之通被 仰出候條總督所者勿論太政官代軍務掛に別紙雛形之通早々附出候様 御沙汰候事

月日

海陸軍務局

雛形

一銃隊何人

一右役附何人

一炮何挺

一右司令炮手共何人

一夫方之者何人

以上何百人

右今般何々道爲先鋒出張申付候分前書之通御座候以上

月日

何條何某

二月七日朝廷元幕府郡代窪田治部右衛門支配地の取締を我藩に命せらる

〔一新録自筆狀〕

戊辰二月七日大政官に御呼出御渡之御書付

細川越中守

右肥後國元郡代窪田治部右衛門支配地今般御領と相成候間取締被 仰付候即今形勢ニ付民心方向ヲ失ヒ多端之苦情訴

出御治定之御所置は追而御達可有之候得共差向人民安業貢米等之儀無滞相運候様取計早々太政官代に可申出候事

但取締被 仰付候御領之内年貢殘穀并高辻帳早々取調内國會計兩裁判所に可差出事

一御領所用向爲取扱候役人兩三人在京候様可致事

一聯々亂妨強盜者人民ヲ掠シ困苦ニ迫リ候場所茂有之由相聞候間早々人數差出取領候様被 仰付候  
二月七日征東出兵休泊地を豫定し桑名に會同すへきの命あり

〔一新録自筆狀、王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

肥後

來ル十二日當地出立別紙休泊附通ニ而桑名に會軍可致候事

二月七日

御親征出兵休泊附

四日市休

桑名

京都

東征諸藩攻口之寫

大津休

草津泊

東海道

尾州

藤堂

備前

石部休

水口泊

東山道

彦根

因州

戸田

土山

坂下休

北陸道

越前

若州

關

龜山泊

海軍

薩州

長州

土州

肥州

庄野

石薬師

運送船

筑前

久留米

薩州

二月七日我藩世子護久は東海道先鋒の命其他二令達に對し奉命書を提出す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

今般御親征被仰出候付東海道先鋒被仰付候條國力相當人數差出諸軍總督之指揮を請勉勵仕候様御沙汰之趣奉畏候以上

二月七日

細川右京大夫

先鋒人數二月十五日迄桑名に相揃候様被仰付旨奉畏候以上

明治元年

此度御親征ニ付各藩人數ニ應醫師召連陣營ニ而各醫打寄病院相立療治之手當仕候様可相心得旨御沙汰之趣奉長候以上

二月七日

細川 右京大夫  
細川 右京大夫

二月七日官軍征東につき近江水口藩外十藩主に東海道筋宿驛取締を命せらる

〔王政日新録〕

（二月十一日大政官代にて交付されたる書付）

宿驛取締

|            |                             |                             |
|------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 大津方<br>土山迄 | 加藤能登守 <small>（水近江口）</small> | 大岡越前守 <small>（西大平河）</small> |
| 坂下方<br>桑名迄 | 増山對馬守 <small>（伊長島勢）</small> | 西尾隱岐守 <small>（遠須江）</small>  |
| 宮方<br>荒井迄  | 本多伊豫守 <small>（伊勢戸勢）</small> | 田沼玄蕃頭 <small>（遠相長江）</small> |
|            | 土方彈千代 <small>（伊勢野勢）</small> | 本多紀伊守 <small>（駿田中河）</small> |
|            | 内藤金一郎 <small>（三河母河）</small> | 松平丹波守 <small>（駿田中河）</small> |
|            | 三宅備後守 <small>（三河原河）</small> | 島田中迄                        |
|            |                             | 舞坂方<br>掛川迄                  |
|            |                             | 日坂方<br>金谷迄                  |
|            |                             | 土方<br>彈千代                   |

右今般 御親征ニ付別紙刻付之通驛々官軍通行之節兵食取計宿々警衛人馬繼立世話向被 仰付旨 御沙汰之事

二月七日

二月七日我藩京都留守居役をして護久の改名を參與役所に具申せしむ

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

細川右京大夫名乗之儀護久と相改申候此段申上候様右京大夫申附候以上

細川右京大夫内

二月七日

青地 源 右衛門

二月七日我藩世子護久は松平慶永外三名と連署して目今の急務は宇内の大勢を遠觀し皇國萬世の大基礎を確立せらるゝに在りとの旨趣を建議す

〔尊攘録御建白御國議、尊攘録諸家建白並御届等、王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

臣等謹而按シ候ニ古之能く天下の大事を定め候者ハ必先ツ天下の大勢を觀て緩急機ニ從ひ處置宜を得候故唯功徳の一  
時ニ光被するのみならず萬世不拔の業是ニ於て相立候今や 皇上始て 大統を繼せ給ひ 御政權又一ニ歸し凡百の宿  
弊も更始一新し天下萬姓目を拭ひ治を望むの秋なり即在 朝の百官自ラ奮發し内ハ 皇上の御徳化を輔け奉り外ハ  
皇威を萬國ニ偲張リへ臣子之分を盡さん事を欲す就中今日の急務ハ皇國と外國との交際を講明せすして不叶儀ニ奉存候近  
頃 朝廷始て外國事務の官職を設られ其人を御選舉遊され専ら御力を盡され候ハ天下の人をして方向する處を知らし  
め給はんとの御趣意にて 皇威を萬國ニ赫耀せしめ候ハ此時ニ可有之と不堪感銘奉存候乍併古語も人心不同こと面  
の如しと申候而在上在下の人木々各々區々の議を執て疑念なき事能ハす又或ハ漢土人の如く自ら尊大ニして外國人を  
禽獸の如く蔑視せしかとも終ニは彼ニ打負却而驅使せられ候様ニ成行き候覆轍を踐むニ至るへき歟と其憂慮仕候依而  
熟考仕候處今日之先務は上下協力一和し宇内の形勢を辨し皇國一大革して開業すへき所以の方向を確定すへき儀第一  
と奉存候是迄皇國ハ一方ニ孤立し世界の事情ニ不達只偷安を以て志とし荏苒衰微を致し彼か爲ニ制せらるへき次第ニ  
立至候と外國の他邦ニ航行し業善を包取氣運日々ニ開け政治文明兵食充備し天下ニ縱橫致し候と比較致し見候へハ盛

衰之原由も判然相分り可申哉ニ奉存候元より膺意の重典も無くて不叶儀ニハ候得共控御之術其方を得候へハ遠人も懐き服し候道理にて尤無罪之人を膺懲致し候譯ニハ無之候中古 朝廷ニも玄蕃の官を置せ給ひ鴻臚官を建させらる遠人を 御綏服被成候事も相見へ居其後天正慶長之間ニハ蠻夷共履西國ニ渡來交易致し候若し其來港不致節は大將軍より書簡を<sup>以て促され</sup>遣し催促し猶遲緩ニ及候時ニハ此方より大軍を發し攻撃可及なと申越候儀も有之候處鳥原の一亂以後始て幕府より領國の令有之候乍併漢土和蘭ニ於てハ猶交易差許候得ハ一切ニ外國人は攘ひ斥け候と申譯ニハ更ニ無之處近年攘夷之論盛ニ相起り諸侯之内偶攘斥致候も有之候得共素より一國之力を以て不可爲は論するニ足らず且先年幕府より十年を期して成功を奏し可申杯申上候は陽ニ其名を假り陰に其私を行ひ候詐術にて 先帝日夜御苦慮 被爲遊候御儀とは同年之論ニ無之と奉存候然れハ今日 皇國之衰運を挽回し 皇威を海外ニ耀し候儀ハ萬々一刀兩斷之朝裁を以て井蛙管見之僻論を去り先ツ在廷樞要之御方々より御裕眼ニ被爲成上下同心して交際之道無ニ念開かせられ被か長を取り我か短を補ひ萬世之大基礎相据られ候様奉專禮候仰き願くハ 皇上の御英斷能く天下之大勢を御觀察被爲遊是迄犬羊戎狄と相唱候愚論を去り漢土と齊しく視させられ候 朝典を一定せられ萬國普通之公法を以テ參 朝をも被命候様御贊成被爲在其旨海内に布告して永く億兆之人民をして方向を知しめ給ひ度儀と偏ニ奉懇願候誠恐惶頓首頓首

二月七日

越 前 宰 相  
土 佐 少 將  
薩 摩 少 將  
安 藝 新 少 將  
細 川 右 京 大 夫

(太政官日誌第三及び王政日新錄には此建議文の連署者に長門少將を加へたり)

二月七日我藩奉行淺井新九郎に東海道先鋒隊の改革編成等の事を命す

〔淺井鼎泉記録〕

一十九日賊二十日に御國より一番手清水數馬方の一隊着京す徳川家御追討御先鋒の命下る薩州長州御國因州津の五藩より人數五百人宛先ツ差出候様との事なり依りて直に清水方の一隊に出張被命候處同隊は御國新來の一御備其儘にて有之候間實地に差支の庸不少ニ付諸事改革被仰出御備附御奉行田中八郎兵衛は急に御用有之御國許に被差下候ニ付鼎泉に右の御改革掛被命候旨孤雲翁より内達あり鼎泉固く辭し奉り候處孤雲翁被申候様ハ先般久我公大和御出張ニ付警衛として御人數被差出候時費下の取調にて兵員の裝束用度等凡て相調へ候ニ付此度も同様にと取調可申と鼎泉申候様ハ大和ハ近國にて有之候間萬一不都合の事有之候時ハ直に出張の上相調へ可申心得にて取調候得とも此度ハ遠く關東まで一御備の御人數被差出候事故逆取調のみにては行はれ中間敷誰そ田中跡に可然人物被仰付其者責任を負ふて取調候様有之度と翌日鼎泉田中跡被仰付諸事引除き清水方と申談し御改革の事を取調候様との事なり依りて第一には御人數の内にて隊長兵士共五十歳以上のものは相除候事第二には服装は凡て筒袖に相改候事第三にハ山鹿屋(山鹿屋は前より達な)受負の人夫は流弊あるを以て盡く解放ち御國よりの連人を使用する事と致し又監察にては財津源之進出張被命御横目登人附屬し政府の書記にてハ大森某御勘定書記にては齋土彌一郎水谷某の二人出張被命以上五人と鼎泉と合て六人を政府の出張員と被定時に京攝間の通路全く杜絶し金銀に不足を告ぐ一御備の準備金ハ小倉出張の例に依れば拾貳萬兩の定なりしに即今御勘定に於て其準備なしと申候ニ付御人數の中に五十歳以上の隊長并に兵隊は盡く相除き精兵五百人と被定候次第ニ有之候又服装は皆な筒袖にて毎一人玉藥四十發ツ、を携帶し大砲は二門にて玉藥五十發を持越すことと被定<sup>此間議論々々</sup>是にても尙準備金に不足を告げ申候に付更に連人の員數を減し且賄料を節約し一人に付一日百疋つゝと被定隨て諸手當等も夫々減額せらる依りて差寄右一隊百日分の準備金として大凡貳萬兩と外に別途準備金として五千兩合計貳萬五千兩を持越すことに決すさて愈々京師を發し二月十二日を以て大津驛に舍營し東海

道を一日四里又ハ五里の行程にて通過の都合なり然る處舎營料ハ朝廷の御賄にて有之候間大に御入用を減し實に幸の事にて有之候

二月七日我藩世子護久は征東兵員分配に關し備頭清水數馬に諭示する所あり

〔一新録自筆狀〕

慶應四ノ二月七日

若殿様於京地清水數馬御備頭に御渡之御直書寫

此度 御征討御先鋒蒙 仰相當之人數差出可申旨候處其方手之此許爲守衛被差越置候得共無餘儀右人數關東に差越候様治定いたし候然處右人數内茂此許に爲守衛殘置管ニ候得共一手引分心痛之至候間遠路之事ゆへ此節ニ際無據年之老若を以殘置候間篤斗其旨可申聞候事

二月七日

二月七日日本藩在桑名先發隊長下津縫殿に對し今般出張を命せし清水數馬隊と交替して凱旋すへしとの旨を達す

〔一新録自筆狀〕

戊辰二月廿日着(熊本着なり)

此節之御人數着桑之上是迄出張之下津縫殿以下者凱陣可致旨早打ニ而御使番被差立御下知

以上

二月七日

〔全書〕

(慶應四二月八日京發之早打同廿日蒲溝口三宅より自筆狀一節)

一今般東征付而若殿様御先鋒被爲蒙仰御國力相當之御人數來ル十五日迄桑名に相揃候様御沙汰有之働人數五百人ニ而可宜思召ニ被爲在候處一番手清水數馬一手七百人餘有之餘り多人數ニ付右之内より當表爲御警衛大筒片手大鳥久平門弟共夫ニ御物頭二三三人相共被殘置管御座候左候而此御人數着桑之上是迄出張之下津縫殿以下凱陣被仰付旨今日早打ニ而島庄右衛門御下知ニ相成申候

但二十歳以下五十才以上之是又當地爲御警衛被殘置思召候處例之義論沸騰茂難量依之清水に御直書被下置候事ニ御座候

二月七日日本藩在京步使番安田兵右衛門藤木源右衛門先きに江戸に至り彼地の事情を探り今日京都の重臣に復命す

〔一新録自筆狀〕

前條追懸仕出也(蒲口三宅より二月八日發狀に添付せしもの)

稜書 二月七日夕刻より

- 安田兵右衛門藤木源右衛門 歩御使番正月十日幕時分從江戸歸着如左申出候
- 一御留守居以下之咄合茂大概京地ニ符合
- 一慶喜公御恭順ニ相違者無之御直書被進候後御謝罪之議頻ニ御依頼之御沙汰茂有之候得共御慥之御稜日者夷人御面會且市兵御取起止候迄之由尤鳴物停止御旗本長髪等之議御觸ニ相成管との事
- 一板倉閣老者如御願隠居被仰付御謝罪之議此方に御依頼之由
- 一會津人數者歸國君侯迄者滯府之由
- 一桑名落城後同侯御謝罪頻ニ御依頼之由

一前橋侯依 召上京之筈其節慶喜公御謝罪茂歎願有之筈との事  
二月七日長藩世子毛利廣封召に應じて京師に至る

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

二月五日

池田 信濃 守

同 六日

牧野 豊前 守

同 七日

毛利 長門 守

右者御上京ニ相成候此段相達申候以上

二月七日

御留守居 中

御右筆 頭 衆 中

二月八日先帝の忌辰には諸藩士以上の參候貢獻を停め、服忌の制は從來の例に據り、松平の稱號を廢する旨の令達あり

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

一村上彈助松本彦作方左之通

迫啓今日大政官に御留守御呼出ニ而御渡ニ相成候御書付三通御留守居添書共差上申候 御請之儀之可被仰付越々存候以上

二月八日(本文中三通とある内二通は次の條に掲ぐ)

安田 孫右衛門 殿

河口 權兵衛 殿

一毎月廿九日 先帝御忌日ニ候條諸藩士以上參候貢獻被指止之尤雜人以下之勝手次第たるへき事

一服忌之儀官武一途を以追々御改定可被 仰付筈ニ候得とも先即今之所是迄之通り取行可申事

一以來松平稱號被止本氏可稱之事

但本姓松平唱來候者ハ如舊可相心得事(以下次の條に續く)

二月八日舊幕令に依り管掌せし土地年貢に關する調査書を提出すへきこと及び我藩主に肥後豐後中十藩の觸頭を命する旨の達あり

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(前條の續き)

細川 越 中 守

是迄徳川氏預地之内年貢殘穀並高附帳早々取調内國會計兩局に可被差出候事

二月

(觸下十藩)

細川 若狹 守

細川 豊前 守

相良 遠江 守

中川 修理 大夫

稻葉 右京 亮

松平 中務 大輔

木下 鐵治 郎

松平 左衛門 尉

毛利 伊勢 守

久留 島伊豫 守

一御留守居方左之通

太政官代辨事御役所方御呼出ニ付秋吉又助罷出候處別紙三通并藏人松尾伯耆を以御渡ニ相成且自今十藩觸頭被仰付候

明治 元年

との儀御口達ニ相成申候此段相達申候

二月八日  
御右筆頭衆中

二月八日外國事務總督三條實美より佛國軍艦來航申立の件に關し列藩の公議を盡さしむる爲め重役一人下坂せしむへき命ありしを以て我藩奉行木村得太郎に下坂を命す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

二月十四日京都立候早打御飛脚同廿六日着左之通

(前文略)

一去ル八日太政官代辨事御役所より御呼出ニ付御留守居代として志垣傳内被差出候處今度佛朗西軍艦ニミニストル、ア  
ドミラル杯乗組入港いたし候段兵庫表より之急飛八日ニ相達未彼より之中立筋者不相分候得共正月三日以來之戰爭及  
ひ今度關東御親征被仰出候儀を承知いたし如斯大亂を生候而者皇國之御爲よろしかる間敷依而徳川氏ニ之退隱御跡之  
田安一橋杯之内御立ニ相成候様和義爲媒酌入港いたしたる儀と相見候處彼之中立御採用相成候而者第一御國體條理不  
相立候付於 朝廷列藩公儀一定之筋を以て薩藩徵士小松帶刀岩下佐次右衛門より及談判候筈ニ付大藩重臣之内各一人  
宛乍苦身翌九日朝廷ニ下阪いし諸事惣督東久世前少將様伊達前少將様御差圖を受小松岩下囁台之上談判之節致列席  
候様尤御爲筋ニ付心附候儀者東久世様伊達様は伺出臨現之場所處置いし候様三條大納言様より被仰渡候依之御役々  
評議之上若殿様は奉伺木村得太郎下阪被仰付即晚出立仕候(以下略)

二月十四日

道家角 左衛門殿

右 吉 清 助

二月八日去る六日の令達に依り我藩東海道先鋒の兵員を申告す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

覺

一惣帥

清水 數 馬

一司令砲手共四拾八人  
合五百拾六人

一侍銃隊七拾八人

一大砲輜重持夫百人

一銃隊三百六拾七人

以上六百拾六人

一右役付番頭物頭二拾二人

右今般東海道爲先鋒出張申付候分前條之通御座候以上

一大砲六挺

二月八日

細川 右 京 大夫

二月八日我藩舊幕西國郡代支配地取締の令達に關し疑惑の條項を稟申して指示を受く

〔一新録白筆狀、王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

肥後國元郡代窪田治部右衛門支配所云々と御座候之西國郡代窪田治部右衛門ニ而可有御座と奉存候

御付札 書面之通

一窪田治部右衛門支配地之豊前豊後肥前日向肥後之内天草島茂有之何れ之ヶ所取締被仰付候哉

御付札 窪田治部右衛門支配地肥後國內ニ有之候丈ヶ總而取締被仰付候

一肥後國五ヶ庄那須郡之儀窪田治部右衛門支配有無之儀不分明ニ有之候得共國許に申遣支配地ニ相違無之候ハ、是又取締被仰付ニ而可有之哉

但豊後之内是迄徳川氏より預ヶ來候ヶ所は最前奉伺候通取締被仰付置候儀と相心得居申候

御付札 書面之通可相心得事

明治 元年

二月八日

細川越中守内  
青地源右衛門

二月八日在京本藩老臣は東海道先鋒を命せられたること及び舊幕西國郡代支配地取締に關する件等に就きて藩政府に詳報す

〔自筆狀并稜書〕

別紙を以申達候、

一今般東征付而 若殿様御先鋒被爲蒙 仰御國力相當之御人數來ル十五日迄桑名に相揃候様 御沙汰有之働人數五百人ニ而可宜 思召ニ被爲在候處一番手清水數馬一手七百餘有之に多人数ニ付右之内當表御警衛として大筒片手大島久平門弟共夫ニ御物頭二三組共被殘置答ニ御座候左候而此御人數着桑之上是迄出張之下津縫殿已下ハ凱陣被仰付旨今日早打ニ而島庄右衛門被差越 御下知ニ相成申候

但二十歳已下五十歳已上ハ是又當地御警衛として被殘置思召ニ候處例之義論沸騰も難量依之清水に御直書被下置候事ニ御座候

一此節之出師ハ 朝廷各種々御注文有之萬端簡易無造作之仕法軍用金被渡下候増減等之事も是迄之究ハ取崩現實相當之處を以數馬初に御奉行方及相談何も都合能相運居中候委細ハ追而可申達候

但主人々々ハ在京不苦旨ニ而 若殿様之勿論 御出馬不被爲在候依之御人數も此上被差登候ニ不及候條左様御心得候様存候

右之趣迄荒々如是御座候以上

二月七日

三宅藤右衛門  
溝口孤雲

御家老殿

〔本書に添付せる稜書は二月五日久我大和總撫總督出向の際に揚記したり〕

付札也

本文之通ニ候處先月廿二日早打ニ而被差立候津野田助左衛門今朝着京攝間大變動浪華落城等先月七日八日迄之處御承知之由其後も數度早打等差立置候得共いつを逆風等ニ而致遲着候歟併最早追々ニ着仕たるニ而可有御座と相考申候長崎頭臺日田縣令立退御人數被差出等之儀別而ハ花山院殿豐前へ被渡日田天草等之人心煽動之一條煩敷御座候由其外森より之使節參着之儀續々被仰越候通致承知候嚙々諸事被成御配意候事と致遙察候然處花山院殿事ニ付而之追々得御意置候通ニ付最早少シハ御安心之増ニ至申たる歟と存申候右大略之御報迄付紙を以勿々如此御座候以上

〔一新録自筆狀〕

戊辰二月八日追啓 他筆也

追啓仕候此早打既ニ昨夕差立候答ニ而御用狀茂別紙之通取堅候後ニ平窪田治部右衛門元支配地 御領と相成候付元締等之儀一ノ書付御渡ニ相成右御書付之内疑惑之稜も有之其儘差進候而ハ遠境別而御迷惑之筋茂可有之と咄合早打ハ先ツ今日ニ差延二ノ印通相親候處今夕御付札を以御差圖有之且三ノ印徳川云々之書付茂一同御渡ニ相成彼是致勘考候得之是迄豊後之内御預所并天草島之兩所御取締被 仰付候儀と相見追而之成行ニ兎も角茂何様御武略茂可有之御恩治茂可有之速ニ御處置致徹候様奉懸願候事ニ御座候且又兩御末家及御近境之相良様御列とも都合十藩 此方様に觸頭被仰付旨是又今日被仰渡則四之書付通ニ御座候屹ト御世話も相増候へとも此御愈以附屬之國と相片付候間隨分御撫恤有之候様奉禱候右稜々ニ付而之猶追々可得貴意候へ共先ツ如是御座候以上

二月八日

三宅藤右衛門

明治元年

一〇七



帶刀 將監 美濃 殿  
夷則 男史 金左衛門 殿  
付札

今夜本文之通夫々取堅之後孤雲御小屋へ御留守居方筆役罷越申達候ハ夕刻大政官に御呼出諸藩重役登人宛明曉迄致下坂候様御用筋之佛蘭西軍艦四艘兵庫入港何職申出候趣ニ付列藩公論を以御返答之御切組申事ニ御座候依之木村得太郎今晚方致下坂候管ニ御座候何レニ先日入御披見候英商カラハ書翰之趣ニ而徳川子不可討之義論を發候ニ違ハ右之間敷相考申候

尙々昨夕以來之稜書一通差進申候

二月八日在京本藩吏員内藤貞貞八東海道先鋒隊の改革編成等に就き實弟西田八左衛門に詳報す

〔一新録探索報告〕

慶應四ノ二月八日

内藤貞貞八政府物書ニ實弟西田八左衛門へ之來翰寫

急脚今八日ニ被差延候ニ付追啓本紙之差而見合ニ相成候稜無之候付控略いたし候若殿様思召之旨被爲在是迄之御備立を被遊御取崩御物頭左右二手御番頭左右二手本陣一手小荷駄一手殿二手大筒手一手都合九手ニ御切分白地絹一巾長五尺紺引兩ニ一番二番ト番文字染付一手ニ一本宛御渡之管ニ相決其餘之稜々之別紙稜書之通御評決何方も聊異論無之現實之人數スル御届書寫之通ニ而來ル十二日出張之管御座候

一軍師兩人共被廢

表分ニ 思召之旨被爲在被殘置候との御達

一領一疋 三十人

是又廢物

一兵器ニテハ鎗具足素々廢物也

一池部彌一郎外御用ニ而出張被仰付

一惣師業初連人自僕共不被召連御國被連來候分之悉皆官夫ニ被召上管錢渡を以人夫ニ被召仕戰士玉藥持夫ニ被渡下

一大島手片手被殘置候

一長州勢八十人ニ二人宛之連人也

右之通御座候以上

内藤也

貞 八

二月八日

八 左衛門 門様

一決ス 手捌之事

一決ス 惣宰之見込可被任候

一號令之事

惣宰見込も可有之候得とも金鼓旗旗を廢し貝號令之

相圖

一決 戎服之事

筒袖ニ可被仰付候

御番方以下御家中家來迄御振替を以洋服出來也

一出兵年齢之事

二十歳以上五十歳迄ト可被充置候

一決 大炮之事

佛蘭西雷布類四門

一門ニ百發宛之用意ニ都合四百發之彈藥大藥車

八輛ニ而運送

一連人之事

十人ニ二人宛惣御人數八百人之見直ニテ百六十人

一夫方之事

小荷駄手四十人

一決ス 御幕之事

五張程も可被差出持人之小荷駄手之内より

一無役着座之事

四人之内二人被疊越

一大組之事

此二稜得計惣師へ聞合之管

一御用金之事

一日一人壹步宛ニ惣御人數八百人日數百日分都合

二万金外ニ五千兩用心金ニ二万五千兩

一軍用金渡之事

是迄之座序御役柄知行高ニ因而多少有之候處此節右之充之被廢壹人ニ何程も高を立現ニ出張之人數ニ應可被渡下候

決 御銀裁判兼 大森一人  
御飛脚番五人

決 御勘定手 物書 兩人

決 同附屬 是之不被差越方ニ可有之哉

一政府 浅井殿一人

決 御天守方 (本朱書) 是之不通今八日迄ニ相決候事 (本文中決の字は總て本朱書也)

二月八日備前藩東海道從軍の兵數砲器等を其筋に申告す

〔一新録探索報告〕

東海道出兵

覺

一銃隊 三百五十人

隊長令上共

一輜重隊役之醫師共 七拾人

一大炮 四挺

一右司令炮手共 三拾人

一夫方之者 百貳拾人

二月九日親征行幸御發聲豫定を發布せらる

〔王政復古帳〕

今九日大政官代御呼出ニ付代勤として秋吉又助罷出候處非藏人を以御書付二通御渡ニ相成昨日御達之十藩にも致通

以上五百七拾人

内兵 銀方 四拾人  
大炮持夫 五拾人

右者今般東海道爲先鋒出張申付候分前書之通御座候以上

備前少將内

二月八日 澤井 宇兵衛

達候様被仰渡候此段御達仕候以上

二月九日

津田 山三郎  
青地 源右衛門

溝口 孤雲殿

三宅 藤右衛門殿

御親征行幸可爲當月下旬被仰出候事

二月九日

追而日限更御沙汰候事

二月九日親征につき諸道宿驛の取締及び東海東山兩道休泊宿驛の兵糧設備に關する件を合達せらる

〔王政復帳〕

慶應四年二月九日大政官御呼出非藏人松尾豊前を以御渡ニ相成候御書付寫別紙之通御留守居相達

諸道宿驛取締

一京都を出先陣迄別紙之通体泊定被仰付候條銘々引請之驛々に番兵を置き諸兵通行之用便を調へ諸事を監督すへし萬一就御用通行之面々限ニ權威を張り粗暴之振舞於有之者無用捨召捕に大政官代刑法局に可申出候自然手ニ餘り候節者打果候而も不苦候事

一器械彈藥運輸之便利を整へ長陣ニ堪る覺悟肝要之事

一 礎陣ハ勿論休泊等兵糧之貯ヘ肝要之事  
 一 宿陣所等不自由之儀者出陣之常ニ付銘々可相辨者勿論之事候條諸事簡易ニ仕向多被仰付候事  
 一 驛々通行之兵隊ニ給候米穀者其方角ニ而取計置可申跡ニて朝廷方金穀とも被下置候事  
 右今般御親征被仰出候就而者前書之條々宜相守マ冗費を省キ萬民之疾苦ニ不立至様精々可致心配御沙汰之事

海陸軍務局  
 會計事務局  
 右一通

東海兩道  
 出張之藩々に

今度御親征ニ付諸藩兵隊道中通行之節者休泊共驛々  
 て兵糧設置ニ相成候事

東海道  
 惣軍兵糧  
 小荷駄方  
 東山道  
 同上

松平 刑部大輔  
 石川 宗十郎  
 市橋 下總守  
 松平 範次郎

右一通  
 一白米四合  
 一金壹朱  
 泊驛  
 一白米貳合  
 一錢百文  
 但  
 休驛  
 右之通壹人ニ付手當可有之候事

二月九日萬民の撫恤は治國の要務なるを以て枉屈の憂なきやう言路を開き隨意に訴願せしむへ

しとの旨を論達せらる

〔王政復古帳〕

〔二月九日太政官代に於て秋吉又助に非藏人を以て渡されたる書付二通の一〕  
 今般 朝政御一新ニ付而者萬民御撫恤之儀之專務之處當今御國內御多事之折柄ニ付自然安民之道等閑ニ相成候際ニ乘  
 し名を勤王ニ假り良民を欺罔して金穀を貪り殘忍ニ民力を致驅役等甚以御撫恤之御趣意ニ致齟齬候儀も多分可有之候  
 間民間之於苦情ハ假令 朝政ニ觸候事ニ候共聊無忌憚可申出候尤領主地頭等ニ於而も厚御趣意ヲ以民間より訴出候節  
 ハ速に太政官へ可致言上候猶又差掛り候件々左之通被仰出候旨領主地頭より厚相論候様可致候  
 但從前之弊習を追而言路擁蔽之事も難測候間民間之者より直ニ 太政官に訴出候儀も勝手次第之事  
 一五畿七道諸宿驛之儀是迄迎も印鑑無之者ハ繼立中間敷管之處近來宮堂上家來杯と唱印鑑引合無之而已ならず無印鑑ニ  
 而人馬繼立剛談仕候者有之趣以外之事ニ候間以來印鑑引合無之且賃錢跡拂等ニ而者決而繼立中間敷事

二月九日我藩士磯谷小右衛門東海道征討軍附屬會計事務取扱方を命せらる

〔王政日新録〕

〔熊本縣 廳所藏〕

太政官代方今日御呼出ニ而非藏人鴨脚加賀を以別紙御書付一通御渡ニ相成早々當人に相達御請書者明日差出候様との  
 儀演達有之候間則相達申候以上

二月九日  
 御奉行衆中  
 御留守居中

細川越中守家來

磯谷小右衛門

右之者此度御親征被 仰出候付右御用中會計方御用向取扱被 仰付候東海道討手之人数ニ附添出張可致候勤方之儀ハ會計局ニ相伺候様可致候事

二月

二月九日我藩東海道先鋒隊の出發に臨み先に殘留を命したる二十歳以下の戰士に對し其父兄の出征する者に限り特に從軍することを許す

〔一新録自筆狀〕

戊辰二月十四日京發同廿四日夜着他筆狀（溝口三宅より家老）  
（中老宛の書簡略）

以別紙申達候

今度御備手之内二十歳以下五十歳以上者被殘置旨被仰付置候處猶思召之旨被爲在子弟ニ限リ二十歳以下たりとも父兄一同出張不苦旨去ル九日及達候

二月九日我藩政府は在京老臣に對し長岡護美上京の件備組二番手上京中止の件及びひ人才を登用し公平の處置を取り一新の事業を達成せしめむことを期する旨を報す

〔一新録自筆狀〕

慶應四ノ二月九日京都へ之急脚自筆草書

以別紙申達候田中八郎兵衛を萬里艦が被指返委曲被仰付越之趣且御評議之稜書等夫々拜承仕若殿様御配慮者申上ニ不  
及各御初多少之御苦辛深察入申候借公子御登京之儀從 朝廷猶又御沙汰之通ニ付早々御上京被爲在候様被仰出來ル廿  
一日此許御發途小島が御發艦之御治定ニ而差寄御供えらる等被仰付左馬助（米田虎之助の事也）方御供且山良洞水御奉行御用人  
兼帶被仰付即日微上降命を茂申達直ニ被召連書ニ御座候且又御小姓頭住江甚兵衛初御身附之外兼而一日亭（護美公子館亭なり）

ニ駈付被仰付置候無息百人引廻三人共御供ニ被召仕管ニ候將又二番手御人数ハ御不用之段又々被仰付越之趣ニ付夷則方途中參懸栗宇恒助（佐貳）を早打ニ而差越於内牧（七日の事也）委細申達右御人数不殘引返候様被仰付夷則方茂今日着ニ相成申候却説桑名世子膳所へ御預等ニ而彼地鎮定第一者關東も謝罪之姿ニ相成候由實ニ天下之幸甚此事ニ而藩塔相關外夷之術中ニ陥候様之儀無之様爲皇國所懇禱ニ御座候様御地者段々御重任を被爲蒙仰彼是御誠意御貫徹之場ニ茂相運可申と恐悅無申計萬端御持重御盡力之程希申候就而者御國許之儀も彌以御奮與一刻も御基本を不被圖候而者難相成人才御登用等を始無偏無黨都而公平之御着眼を以夫々御處置被爲在御一新之御運を被付候御覺悟ニ付此上猶更東西御一轡非常之御事業を奉仰計ニ御座候他者后鴻ニ讓右迄勿々申縮候以上

二月九日

惣 連 名

溝 口 殿

三 宅 殿

〔慶應三年  
王政復古帳〕（熊本縣廳所藏）  
口達

山 良 洞 水

其方儀今度良之助殿御上京御供被仰付之

以上

二月九日

二月九日徳川慶喜は朝譴を蒙りし舊閣老京都守護職所司代監察等二十四人の登城を禁し且つ松平豊前守等十六人の職務を免す

〔王政復古帳〕

松平越中守 松平豐前守 松平肥後守  
板倉伊賀守 永井玄蕃頭 平山圖書頭  
竹中丹後守 塚原但馬守 室賀甲斐守  
瀧川播摩守 大久保主膳正 戸川伊豆守  
松平河内守 大久保能登守 星野豊後守  
牧野土佐守 設樂備中守 新見河内守  
大久保筑後守 戸田肥後守 高力主計頭  
小栗下總守 小笠原河内守 岡部石見守  
右之者共於 朝廷官位被召上候趣御達者無之候へ共御  
布告相成候由ニ付登城不相成旨被仰出候事

二月九日

松平 豐前守  
御役御免如前々雁之間詰被仰付差扣可罷在候  
竹中 丹後守  
御役御免柳之間席被仰付差扣可罷在候  
塚原 但馬守  
御役御免差扣被仰付候

御役被成御免候

思召有之御役被成御免候

永井玄蕃頭  
平山圖書頭  
御側 室賀甲斐守  
大目付 瀧川播摩守  
陸軍奉行並 大久保主膳正  
大目付 戸川伊豆守  
御勘定奉行 松平河内守  
奥詰銃隊頭 大久保能登守  
御勘定奉行並 星野豊後守

二月十日我藩世子護久來十四日大政官代行幸の先驅を命せらる  
〔王政復古帳〕

慶應四年二月十一日御留守居方達有之  
坊城侍從様方之御直回狀寫  
追申刻限卯半刻候可令知給候也  
來十四日大政官代行幸御先廻被仰下候仍早々申入候也

二月十日

三條前大納言殿 徳大寺大納言殿 新大納言殿 權中納言殿  
石野三位殿 左京大夫殿 侍從三位殿 内蔵頭殿  
正親町中將殿 千種前少將殿 新菅少納言殿 前修理權大夫殿  
四條前侍從殿 土佐前少將殿 鷲尾侍從殿 右兵衛權佐殿  
安藝少將殿 薩摩少將殿 細川侍從殿 右少辨殿  
左馬頭殿 石野大夫殿

步兵奉行並

牧野土佐守

御目付

設樂備中守

新見河内守

御役被成御免候

右三通之書付者越邸より至密差廻來候事

(右三通とあれども此には二通のみ擧げたり外一通は二月十二日の條江戸表謝罪狀之寫とある慶喜の謝罪狀なり)

榎本對馬守

俊

政

二月十日桑名なる東海道鎮撫總督府を名古屋へ轉する旨同府參謀より我藩に通達す

〔王政日新錄〕（熊本縣廳所藏）

急々致啓達候東海道鎮撫總督府來ル十三日桑城御出馬尾張名古屋に御轉陣ニ相成候間惣勢其地に相揃候様被仰出候事

二月十日

總督府

薩州 海江田 武次  
長州 木梨精一郎

肥後藩

指揮官各中

二月十日我藩備頭清水數馬に東海道先鋒總帥を命し且つ軍令狀を下附す

〔一新錄自筆狀〕

戊辰二月十四日京發同廿四日夜着他筆狀（節略）

右者今度東海道出張ニ付而者惣奉行之場も相勤候様

清水數馬

平野專右衛門

齋藤新之允

右者今度東海道出務之節當地へ被殘置管ニ候處大筒手御人賦差支候由ニ付別段を以て外々一同出張被仰付旨  
右之通同十日及達候

〔中略〕

右之趣爲可申達如是御座候以上

二月十四日

三宅藤右衛門  
溝口孤雲

御家老宛  
御中老宛

〔一新錄自筆狀、自筆狀并稜書〕

二月十日

一御軍令之御書付清水數馬に御渡

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

二月九日御渡之御軍令狀寫

條々

一總督之軍令末々ニ至迄屹度可相守事

一一手之勝敗といへとも皇威の弛張ニ關る處油斷致間敷事

附一和一致專要之事

一土風正敷廉恥を主とし行軍宿陣とも庶民の迷惑ニ不相成様心を可用事

一受前々々の覺悟筋書夜無忘可心懸事

一大酒堅禁制其餘飲食を恒軀幹壯健ニして勇氣を養ふべき事

右之條々惣帥及隊長々々々精々可相示者也

明治元年

二月(編者曰前書と一日の差あるは蓋し九日に草按なり)て十日に惣帥清水數馬に下付せられたるなるへし)

(朝廷御軍令寫)

軍令

- 一 王師之むかふ草まきに愆意を體し首尾不可輕舉
- 一 戰士者長官之令をうけ長官者其大將之令を受ケ更ニ不可有異儀候事
- 一 私ニ賊徒ニ應接をしあるいは方略を暴白する事最可有心得候事

實 梁 前 光

二月十日我藩費用多端の際軍用金に缺乏せるを以て大坂に蓄積したる米穀を外國人に賣却せむことを請願す

〔王政日新錄〕(熊本縣廳所藏)

細川越中守國許より追々大坂表に積廻置候米穀昨年來一切相捌不申種々心配罷在候内當節之事休々相成俄々借手之者共多勢呼登其前後所々御警衛且桑名御征伐ニ茂餘計之人數差出第一今度東海道先鋒相勤候付而之被是多分之入費相嵩甚以當惑仕候依之當時兵庫滞在之異人共ニ及談判其模様ニ應石米穀之内賣渡候様致度此段奉伺候條急ニ御差圖可被成下候以上

細川越中守内

青地 源右衛門

二月十日

二月十日日本藩王政維新大赦令の發布により文久三年以來入檻せしめたる山田十郎を放免して本

職に復す

〔機密間日記〕

覺

御方 御用人に

山田十郎

右者先年公武御一和之御旨趣ニ違戻いたし候筋有之依御沙汰遂御吟味候處稜々奉恐入候段申出候付屹被仰付筋有之管之處今般王政一途ニ被復且御元服之大禮被爲行大赦被仰出候付罪狀御免被成元々之通被召仕候條以來屹加謹慎候様被仰付候條此段可被達候以上

二月十日

本行被仰付之趣ニ付十郎儀身分伺出候共差扣等ニ不及段御差圖有之管ニ御座候且又文久三年十一月被召籠置候以來是迄被押置候御切米之此節一同被渡下管ニ御座候事

二月十日我藩江戸留守居助勤志方司馬助江戸に至り徳川慶喜に面謁して京都の事情を陳し恭順の實を擧げんことを勸告す

〔王政復古帳〕

慶應四戊辰二月十日於西丸徳川氏に直と演述畢而小監察迄遣置候手扣二通之草稿(一通は正月二十日の條に登載す)

今般之一條付而は越中守右京大夫に態々御直書被遣且私共に被仰聞候通ニ御座候得共京地ニ而之既ニ御親征被仰出就而之畿内七道大小藩各軍旅之用意茂御沙汰有之候付御書之趣ニ朝廷に被申上候得共右之次第ニ付乍心外御返書難被及段申聞候

今般之一條初發伏見鳥羽ニ而御手を被爲出候前後之境々末事ニ而根元 朝廷に御奏問之御書付諸藩に御檄文之通

明治元年

一一一

ニ御座候得之何様御上京之上兵革を以御處置之御覺悟ニ相見前ニ御内話有之候會桑を殊更御先手ニ被差出炮器戎裝を以關内ニ相迫戰爭中日月之錦旗を被差出候後も坂城より御人數被繰出被及炮撃候末御自身ニ之眞之御恭順ニ而聊御異心無之只御先供之行違より如是相成候との御申譯之相立申間敷哉ニ相伺候就右勘考仕候處實ニ御謝罪之思召ニ候ハ、一刻茂御城御立退兩山杯之内ニ御寓居被爲在最前御届兼之次第幾重ニ茂被奉恐入此上之如何様とも 朝廷より御指圖次第ニ御心得之御覺悟ニ而重ク御慎有之其後日光宮様靜寬院宮様方より只管御詫被仰上御家名被爲立候様御歎願ニ茂相成候ハ、御宥恕之筋ニ茂可相運哉何様御謝罪深候得之 天譴茂淺相成御謝罪輕候得之 天譴重相成候儀自然之道理ト乍恐奉勘考候事

〔自筆狀並稜書〕

慶應三年ヨリ聖明治元年閏四月迄  
京都より二月廿五日田上鉄之允早打ニ而被差立候節ひきたしニ而引渡されたる稜書(節略)

二月廿二日

一澤村脩藏去ル十七日江戸立今晝時分着慶喜公御謝罪付而御直書持參

但志方司馬助去ル九日關東着慶喜公拜謁ニ而委細京地之事情申上候處上野大慈寺御立退御慎之由且上野宮様御上京御詫之答

二月十日東海道先鋒長州藩京都を出發す

〔一新録自筆狀〕

(二月十三日附溝口孤雲三宅藤右衛門より郡長則宛書翰の一節)

今度東海道先鋒之藩々御人數長州之十日薩州ハ十一日此方様之昨十二日進發相濟紀州之今日之御様子ニ御座候

〔一新録探索報告〕

東海道出兵

一銃隊百八拾人 一司令八人 一輻重掛共外役附八人 一夫方之者四拾八人以上  
貳百四拾四人 長州

二月十一日各藩貢士を選出すへしとの命あり

〔一新録皇武〕

二月十一日太政官にて御渡之御書付寫四通(外三通は別條に在り)

一大藩 三日

一中藩 二日

一小藩 一日

右者今般王政御一新被爲 仰出輿論公議を執り候御趣意を以各藩より貢士として太政官に指出候様被 仰付候條其御趣意ニ相基キ國々國論にも可相代者人撰有之指出候様 御沙汰候事

但右拜承當日より五十日を限り差出可申尤其者參着次第辨事役所に可届出事

二月

二月十一日各藩封地の石高によりて大中小の三藩に區別せらるゝ旨の令達あり

〔一新録皇令〕

二月十一日太政官にて御渡之御書付寫四通(外三通は別條に在り)



一大藩

但四拾萬石以上ヲ唱

一中藩

但拾萬石以上參拾九萬石に至るヲ唱

一小藩

但壹萬石以上九萬石に至るヲ唱

右之通諸侯石高ヲ以三等ニ區別相立候様被 仰出候事

二月

二月十一日徵士拜命の者は直に朝臣たるへき旨の令達あり

〔一新録皇令〕

二月十一日太政官にて御渡之御書付寫四通(外三通は別條に在り)

自各藩徵士被 仰付候者ハ奉 命即日より朝臣と相心得勿論無藩ニ全ク關係混合無之御趣意ニ候間此旨厚相心得可申

事二月

二月十一日日本藩醫士内藤泰吉に我東征軍に従軍すへき旨を命す

〔一新録自筆狀〕

(戊辰二月十四日京發同廿四日夜藩溝口三宅より來狀の一節)

内藤宗賢育

内 藤 泰 吉

右者桑名表より直ニ關東に出張被仰付旨

右之通同(二月)十一日及達候

二月十一日我藩政務の方針を定め至誠を以て朝意遵奉するは勿論徳川氏亦謝罪の上は舊誼を思ひて疎外すへからざる旨を藩學時習館の教職に諭示す

〔尊攘錄御建白御國議〕

戊辰二月十一日井口呈助(元調導當 時奉行)へ渡調導へ示し同十二日呈助方差返候御國議之趣書付

天朝幕府に 御忠節を被盡候御儀之從來之御國是ニ而始末御替無之候處徳川氏政權奉歸幕職退遜一日東歸ニも相成候上之 皇國之爲 朝廷之御處置一大事之御場合ニ付彌以 御誠意を被盡義理至當之筋を以 皇國御維持可被遊御議定ニ候徳川氏之儀ハ御先祖様御以來之御恩家殊ニ伏罪之上之御危外可有候様も無之此段相心得候様存候事

二月十一日東海道先鋒薩州藩兵京都を出發す

〔一新録自筆狀〕

(二月十三日附溝口孤雲三宅藤右衛門ヨリ郡夷則宛書翰の一節)

今度東海道先鋒之藩々御人數長州之十日薩州ハ十一日此方様之昨十二日進發相濟紀州之今日之御様子ニ御座候

〔一新録探索報告〕

東海道出兵

十一日

一銃隊三百拾貳人

一砲五挺

一右司砲手三拾六人

一小荷駄附役人拾五人

一陪宰土工夫百人位

以上 四百六拾四人

外ニ

持夫百人位

小荷駄馬四拾疋

右貳行中途驛之雇人馬

薩 州

二月十二日徳川慶喜江戸城を出て東叡山大慈院に屏居し上表して征東の軍を輟められむことを

懇願す。

〔形勢雜記壹、安津免久佐〕

江戸表謝罪狀之寫、慶應四年二月十三日發同十七日達

此度 御追討御差向可被遊候段被 仰出候哉之趣透ニ奉承知誠以驚入奉恐入候次第ニ候右者全予か一身之不束より生し候事ニ而 天怒ニ觸候段一言之申上様無之儀ニ付如何様 御沙汰有之候共無遺憾奉命致候心得ニ而別紙之通奏 聞狀差出候依之東叡山に退き謹愼罷在罪ヲ一身ニ引受只管 朝廷に御訖申上億萬之生靈塗炭之苦を免レ候様致度候至願 此事ニ候就而ハ何レも予カ意を體認し心得違無之恭順之道不取失様可致候

〔形勢雜記壹、一新録自筆狀、王政復古帳〕

此度 御追討使御差向可被爲在候哉之趣透ニ奉承知候誠ニ以驚入奉恐入候次第ニ御座候右者全臣慶喜一身之不束より生し候儀ニ而 天怒ニ觸候段一言之申上様無御座次第ニ付此上何様之 御沙汰御座候共聊無遺憾奉畏候所存ニ而東叡山ニ謹愼罷在其段下々に茂厚申諭し假令官軍御差向御座候共不敬之儀等毫末も不爲仕心得ニ御座候得共弊國之儀之四方之士民幅輳之土地ニ茂御座候得之多人數中ニ一萬一心得違之者無之共難申右邊より恭順之意を取失ひ不慮之儀等有之節之猶更奉恐入候而已ならず億萬之生靈塗炭之苦を蒙候様ニ而之實以不忍次第ニ付何卒官軍御差向之儀之暫時御猶豫被成下臣慶喜之一身を被割無罪之生民塗炭を免れ候様仕度臣慶喜今日之懇願此事ニ御座候右之趣厚御諒察被成下前文之次第 御聞届被爲在候様涕泣奉願候此段御奏 開被成下候様奉願候以上

二月

徳川慶喜

花押

〔海舟日記〕

(二月)十二日拂曉終に東叡山中塔中大慈院え御移轉御謹み小臣御供に立たず陸軍士官等へ思召を説諭す皆勇氣と憤激と凜然として涕血す俗吏は其方向を失して青色而已此頃京師へ御書被差立前橋侯持參(前橋侯は松平大和守直克也)

〔一新録探索報告〕

(二月十二日從江戸藩之兼坂熊四郎持參之書付の内)

松平大和守様從 御所被爲 召候付二月九日江戸御發途之段御知せ相達候事

(備考)編者按、徳川慶喜の上表は形勢雜記、安津免久佐二書共に口付なく海舟日記には慶喜の東叡山に屏居せしは正しく十二日として上表のことは「此頃京師へ御書被差立」といひて日を明らかにせず其の上表を持參せりといふ松平直克は探索報告によれば二月九日江戸を出發すとあり又慶喜の舊幕臣等に諭告せし文に「別紙之通奏聞狀差出候依之東叡山に退き謹愼罷在云々」とあるを見れば其身東叡山に屏居して後上表せしにあらす上表して後入山したるものと察せらる然るに探索報告にある兼坂熊四郎は二月五日江戸を發して其携帶せし書は松平直克出發豫定通知書にれば或は出發を延引せしか又二月十日に我藩江戸留守居助勤志方司馬助か慶喜に面調して京師の事情を告げ恭順の實蹟を擧げんことを勧めしかば慶喜の心俄に動き此の上表を奉呈するに至りしかとも思はるゝ故に先づ海舟日記に據りて此に掲ぐ

二月十二日我藩東海道先鋒總帥清水數馬五百餘人を率ゐて京師を發し尾州名古屋へ向ふ

〔自筆狀並稜書〕

(二月十四日畫認の一節)

二月十一日

一東海道先鋒之御人數清水數馬初五百人餘今畫認進發

明治元年

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

二月十二日京都王生御邸出軍草津驛泊

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人數從元治元年 坂本彦衛調の内〕

同月十二日

一關東御親征ニ付護久に東海道先鋒命セラル因テ備頭清

水數馬已下一手ノ人數今十二日京地進發

清水數馬

二十二日

七十八人

番頭並番頭格  
物頭並物頭格  
上銃隊

三百六十七人 銃隊

四十八人 大砲手司令士共

惣合五百十六人

惣人數五百ニテ宜敷トノ旨ニ付數馬一手ノ人數

餘分ハ京師へ殘シ置

〔淺井鼎泉記録〕

一十九日癸二十日〔明治元年正月〕

に御國より一番手清水數馬方の一隊着京モ徳川家御追討御先鋒の命下る薩州長州御國因州津の五藩より人數五百人宛先ツ差出候様との事より依りて直ニ清水方の一隊に出張被命候處同隊は御國舊來の一備其儘にて有之候間實地に差支の廉不少ニ付諸事改革被仰出御備附御奉行田中八郎兵衛は急に御用有之御國許ニ被差下候ニ付鼎泉に右の御改革掛被命候旨孤雲翁より内達あり鼎泉固く辭し奉り候處孤雲翁被申候様ハ先般久我公大和御出張ニ付警衛として御人數被差出候時貴下の取調にて兵員の裝束用度等凡て相調へ候ニ付此度も同様に取調可申と鼎泉申候様ハ大和ハ近國にて有之候間萬一不都合の事有之候時ハ直ニ出張の上相調へ可中心得にて取調候得とも此度ハ遠く關

東まで一御備の御人數被差出候事故逆取調のみにては行はせ中間敷誰ぞ田中跡に可然人物被仰付其者責任を負ふて取調候様有之度と翌日鼎泉田中跡被仰付諸事引除き清水方と申談し御改革の事を取調候様との事より依りて第一ニハ御人數の内にて隊長兵士共五十歳以上のものは相除候事第二ニハ服装は凡て筒袖ニ相改候事第三ニハ山鹿屋受負の人夫は流弊あるを以て盡く解放し御國よりの連人を使用する事と致し又監察にては財津源之進出張被命御横目壹人附屬の政府の書記にて大森某御勘定書記にてハ齋士彌一郎水谷某の二人出張被命以上五人と鼎泉と合て六人を政府の出張員と被定時に京攝間の道路全く杜絶し金銀に不足を告ぐ一御備の準備金ハ小倉出張の例に依りて拾貳萬兩の定ふりしに即今御勘定に於て其準備ふしと申候ニ付御人數の中に五十歳以上の隊長並ニ兵隊は盡く相除き精兵五百人と被定候次第ニ有之候又服装は皆な筒袖にて每一人玉藥四十發ツ、を携帶し大砲は二門にて玉藥五十發を持越せしことと被定〔此間議論紛々尊應を以て被決〕是もても尙準備金に不足を告げ申候ニ付更に連人の員數を減し且賄料を節約し一人ニ付一日百疋ツ、と被定隨て諸手當等も夫々減額せらる依りて差寄右一隊百日分の準備金として大凡貳萬兩と外に別途準備金として五千兩合計貳萬五千兩を持越せしことに決まて愈々京都を發し二月十二日を以て天津驛ニ舍營し東海道を一日四里又ハ五里の行程にて通過の都合より然る處舍營料ハ 朝廷の御賄にて有之候間大ニ御入用を減し實に幸の事にて有之候

二月十三日自今太政官へ行幸ある毎に東院參町辻の警衛を我藩に命せらる

〔王政復古帳〕

今日大政官代御呼出ニ付代勤として秋吉又助罷出候處向後行幸度毎ニ東院參町辻御警衛此方様に被仰付旨非藏人を以被仰渡候此段御達仕候以上

二月十三日

津 田 山 三 郎  
青 地 源 右 衛 門

溝口 孤雲殿  
三宅 藤右衛門殿

二月十三日東海道先鋒總督橋本實梁同副總督柳原前光名古屋に至る

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

〔肥後家 明治元年關東征伐事件覺書〕

二月十三日橋本東海道先鋒總督柳原副總督名古屋へ着軍アリ

〔王政復古帳〕

二月十三日我藩元桑名藩邸北門の添地借用願の件許可せらる

二月十四日

御奉行 衆 中

御留守 居 中

二月十三日日本藩世子護久書を在藩老臣に與へ時勢に應し速に兵制を改革すへき旨を諭示す

〔一新録自筆狀、若殿様左京亮様御滯坂中日記、王政復古帳〕

一筆中候舊冬已來ハ別而不容易事體と相成孰茂辛勞察入候段御國之御軍制ハ是迄御先蹤茂有之事ニ候得とも如是字内之形勢より致變革候而之御軍制茂又不致變革候而之實地之勝利無覺東就而之炮術鍛鍊之儀追々被仰出之趣も有之候處夫さへ思召通被行兼候末先達而京攝間戰爭之次第且御今列藩出師之模様等茂具ニ致承知候へハ猶更切商ニ堪不申此節

清水數馬一備之手分駈引等種々致心配候へは差懸相整候様も無之候へ共此度ハ數馬新九郎も非常之心配行届夫ゆへ是迄と流簡易ニ事被行去ル十二日進發致せ候事ニ候然處一昨十日於太政官副總裁岩倉殿より段々咄之内西洋之兵制ハ數百戰ニ試候良法迎茂此筋ニ不相運候而之皇威を海外ニ赫耀いたし候儀之六ヶ敷依之神州一般有之兵制ニ被仰付旨不遠御沙汰之筈ニ候間非常ニ致盡力候様被申候されハ獨邦家之爲而已ならず朝廷之御趣意と相成候上之素より故障等可申出譯之無之候へとも萬一天下之大勢を不辨不相替偏見固執心得違之者茂難計候間右等者には馬斗申論炮術ハ勿論土囊之兵制より斷然御改革被仰出ニ刻も御國體御取堅不被爲在候而之往々如何成都合ニ成行候茂難量實ニ案勞之至ニ候右之趣ハ大守様に茂一ト通申上候間其方共より直と奉覽思召不被爲在候ハ、蛇度差入誘掖有之度存候以上(本文中ニ日、一昨十日等あるは二月十三日の書には認かならされとも各原書皆斯の如し)

二月十三日

護 久

御家 老 中  
御中 老 中

二月十三日在京本藩老臣は在江戸末家細川利永及びひ家族の同地退去の件につき藩政府に報告す

〔自筆狀並稜書〕

以別紙申達候今日之事跡ニ相成候而ハ若狹守殿初一族方江戸立退之一條何程ニ可有之哉

鳳臺院様殊之外被遊御案勞候付委細莊村助右衛門に被仰含其御地被差立候處於瓊浦田中八郎兵衛ニ行逢同人より指圖之趣有之候山ニ而去ル十日一ト先ツ致出京右之次第具ニ申達候當表ニ而も初發方重疊致懸念結局志方司馬助關東に被差返候節相渡候書取之先々便差進候通ニ而公然と上京聊異議有之間敷と相考居候内一昨夜關東方兼坂態四郎着稜々持越候内近畿關西ニ采地有之而々ハ無懸念致歸邑候様との趣別番御用狀之通徳川家方沙汰ニ相成候上之猶更子細無之様

明治元年

一三一